

＜道北地域研究シリーズ No.20＞

北海道北部の
地域振興 20

2020年3月

＜道北の地域振興を考える研究会＞

目 次

I. 2019 年度研究会の活動	清水池 義治	2
II. 道北の地域振興を考える研究会の活動経過		3
III. 研究会メンバー		
	2019（平成 31/令和元）年度	6
IV. 2018 年度道北の地域振興を考える研究会セミナー（2019 年 3 月 23 日）		
(1) 冒頭挨拶	清水池 義治（道北の地域振興を考える研究会 会長）	8
(2) 第 1 報告	今野 聖士（名寄市立大学保健福祉学部 講師）	
	北海道における観光の現状と農業との関係性	10
(3) 第 2 報告	杉川 毅（宗谷シーニックバイウェイ事務局/稚内印刷（株）代表取締役社長）	
	宗谷地域における観光の現状と広域連携に向けた課題	31
(4) 第 3 報告	日置 友幸（中川町観光協会）	
	上川北部地域における観光の広域連携に向けた取り組み	52
(5) 第 4 報告	池田 俊一（名寄市教育委員会教育部スポーツ・合宿推進課 主幹）	
	冬季スポーツ拠点化事業と交流人口の拡大について	76
(6) 総合討論		102
V. 2019 年度道北の地域振興を考える研究会セミナー（2019 年 10 月 20 日・21 日）		
(1) 冒頭挨拶	清水池 義治（道北の地域振興を考える研究会 会長）	119
(2) 第 1 報告	浅川 晃広（きた北海道移住支援型シェアハウス・キックスタート！代表、名古屋大学大学院国際開発研究科 講師）	
	人の国際移動から見た国内移住	121
(3) 第 2 報告	菅原 英人（元・天塩町地域おこし協力隊）	
	代替不能な地域固有資源に起因する移住事例	149
(4) 第 3 報告	中島 まなみ（沖ヨガインストラクター）	
	豊富温泉が与えてくれた第 2 の人生～地域に役立つ隙間を見つける柔軟な発想～	175
(5) 総合討論		203
(6) 国道 40 号音威子府バイパス工事現場見学報告		216

I. 2019 年度研究会の活動

清水池 義治

(研究会会長、北海道大学)

1. 『北海道北部の地域振興 20』の発行

ここに『北海道北部の地域振興 20』を発行します。次ページと次々ページに、道北の地域振興を考える研究会の発足（1997 年度＝平成 9 年度）から第 23 年目の 2019（平成 31/令和元）年度に到る活動経過を一覧表にして掲載します。

なお、今号は電子媒体のみでの発行です。

2. 研究会の事業

(1) 2019 年 10 月 20 日に「きた北海道移住支援型シェアハウス・キックスタート！」（稚内市）にて、「2019 年度道北の地域振興を考える研究会セミナー」を開催しました。「北海道北部地域における移住の今と未来」と題して、浅川晃広会員（キックスタート！代表）、菅原英人氏（元天塩町地域おこし協力隊）、中島まなみ氏（沖ヨガインストラクター）から報告をいただきました。翌 21 日には音威子府村に移動し、国道 40 号音威子府バイパス工事現場を見学しました。ご協力いただきました旭川開発建設部の皆さまに御礼申し上げます。

(2) 2020 年 3 月 5 日に名寄市立大学にて、第 23 回道北の地域振興を考える講演会を「北海道北部における観光と地域の未来」と題して行う予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から中止としました。

(3) 2019 年度から若手会員の研究活動を奨励する観点から、道北地域研究奨励事業を開始しました。今年度は、モデル事業として役員会で選定した以下の 2 名の研究を対象としました（研究代表者氏名：丸山ちなみ会員、中島泰葉会員）。研究成果は、次年度以降のセミナーや会誌で報告します。来年度以降は広く公募して選定する予定です。

これら内容は、本号と次号会誌『21』に掲載します。

3. 研究会会員の動向など

本年度は、入会者 8 名（一般会員 5 名、学生会員 2 名）、退会者 1 名となり、多くの入会者を迎えられました。また、新たに森田康志氏（株式会社北開水工コンサルタント顧問）を顧問にお迎えしました。加えて、学生会員の入会で事務局機能を強化しました。

2019 年度末（2020 年 3 月時点）で会員数は 40 名で、一般会員 31 名、学生会員 2 名、顧問 7 名となっています。うち道北地域居住者は 20 名です。研究会活動のさらなる活性化に向けて、今後も事業の充実と会員拡大を進めていきます。

II. 道北の地域振興を考える研究会、従来の活動経過

年度	講演会(住民参加形態)	研究会会員の勉強会、研究会セミナー等	冊子発行	備考:冊子中の論文(勉強会、講演会の記録以外の論文)、特記事項など
第1年目 1997年度 (平成9年度)	第1回、1998(平成10)年3月26日、市立名寄短期大学 加藤 昭:北海道開発の過去・現在・未来 池田 均:ロシア・サハリン州の社会、経済の現状	1997(平成9)年12月17日～18日、北大雨竜演地方習林(母子里) 石井 寛:第6期北海道総合開発計画について 奥田 仁:産業クラスターと北海道第1次産業の発展方向 楠本 篤:上川北部の地域振興について 細田 直志:森林提案(基調)ー北海道・下川町における森林資源のサステイナビリティー(持続的生産)とワイズ・ユース(賢明なる利用)ー		
第2年目 1998年度 (平成10年度)	第2回、1999(平成11)年3月23日、市立名寄短期大学 藤森 郁雄:北海道農業にエールを送る! 山本 宏:これからの北海道の木材産業を考える	1999(平成11)年1月27日～28日、北大雨竜演地方習林(母子里) 谷口 秀之:第6期北海道総合開発計画と道北地域整備の展開構想 細田 直志:下川産業クラスター研究会の活動(1998年度)	北海道北部の地域振興 71ページ、1998年11月	
第3年目 1999年度 (平成11年度)	第3回、2000(平成12)年3月23日、市立名寄短期大学 石井 寛:EUのエネルギー政策とスウェーデンの木質バイオマス利用の現状 七戸 長生:いわゆる産業クラスター論の前提と課題		北海道北部の地域振興 II 84ページ、1999年12月	
第4年目 2000年度 (平成12年度)	第4回、2001(平成13)年3月28日、市立名寄短期大学 小田 清:現代の地域問題と地域開発政策のあるべき方向について ー北海道の抱える基本問題を考える 西本 肇:北海道の教育ー人づくりから見えるものー		北海道北部の地域振興 III 134ページ、2000年11月	細田 直志:下川産業クラスター研究会の活動 その2(1999年度) 奈須 憲一郎:地域の内発的発展における「新住民」の果たす役割 ー北海道下川町を事例としてー
第5年目 2001年度 (平成13年度)	第5回、2001(平成13)年9月25日、市立名寄短期大学 北 良治:これからの社会保障のあり方と地方自治の果たす役割 津田 美穂子:高齢社会における住民生活と地域振興 加藤 昭(特別報告):世界水フォーラム(2003年3月、京都)の開催 ーその内容と意義ー 第6回、2002(平成14)年3月28日、市立名寄短期大学 奥田 仁:新たな地域発展の道ー欧州と北海道ー 七戸 長生:「人々の定住」をめぐる		北海道北部の地域振興 IV 123ページ、2002年2月	細田 直志:下川産業クラスター研究会の活動 その3(2000年度)
第6年目 2002年度 (平成14年度)	第7回、2003(平成15)年3月24日、市立名寄短期大学 川上 幸男:幌延に住んで50年 森 啓:合併でまちづくりはできるのか 加藤 昭(特別報告):森と湖に親しむ全国大会ーその内容と意義ー	*2002(平成14)年11月2日、旭川 澤口 二郎:これからの開発事業と道北地域 渡邊 政義:最近の道路整備を巡る話題	北海道北部の地域振興 V 174ページ、2003年1月	細田 直志:下川産業クラスター研究会の活動 その4(2001年度)
第7年目 2003年度 (平成15年度)	第8回、2004(平成16)年3月26日、市立名寄短期大学 太田原 高昭:食の安全・安心と北海道農業 奥田 仁:過疎の克服と周辺地域の経済発展	2003(平成15)年12月6日、旭川 今 尚文:名寄市農業の現状と担い手育成・支援の取り組み 佐藤 信:道北地域の人口動態と過疎化について 2004(平成16)年2月7日、旭川 夏井 岩男:農業の多様な担い手育成について 山本 美穂:道北農村における伐後・耕後後退と土地利用	北海道北部の地域振興 VI 145ページ、2004年2月	神沼 公三郎:戦後のわが国における林業政策の軌跡と森林・林業基本法 細田 直志:下川産業クラスター研究会の活動 その5(2002年度・2003年度)
第8年目 2004年度 (平成16年度)	第9回、2005(平成17)年3月23日、市立名寄短期大学 松田 從三:家畜ふん尿のバイオガスシステムについて 桑原 隆太郎:道内市町村合併に関する主要論点 ー北海道の自治の姿をどう描くのかー	2004(平成16)年12月18日、旭川 前田 憲:課題の整理と「道北」概念の範囲 佐藤 信:道北地域の社会的諸問題ーいままでの研究成果の検討ー 前田 憲:道北地域の教育問題 2005(平成17)年2月19日、旭川 久保田 宏:北・北海道の地域医療ーむかし・いま・これからー 池上 佳志:天塩川流域の環境問題	北海道北部の地域振興 VII 244ページ、2005年3月	細田 直志:山村地域における持続可能な森林管理を求めて ーBeyond the Despairー
第9年目 2005年度 (平成17年度)	第10回、2006(平成18)年1月13日、市立名寄短期大学 山下 邦廣:下川町の林業と森林組合の取り組み 森田 康志:道北の地域振興と北海道開発局の役割	2005(平成17)年11月26日、旭川 奈須 憲一郎:森林を活かして起業するー道北の地域振興実験ー 宮入 隆:道北地域における広域野菜産地形成の現状と課題 神沼 公三郎:研究会10周年に向けて、目指すべきもの 加藤 昭:北海道総合開発計画及び国土形成計画について 2006(平成18)年1月14日、名寄 鎌谷 俊夫:西興部村の「自立」計画と課題 長岡 哲郎:下川町のまちづくりへの取り組み	北海道北部の地域振興 VIII 163ページ、2006年2月	
第10年目 2006年度 (平成18年度)	第11回、2007(平成19)年1月12日、名寄市立大学 「道北の地域振興を考える研究会」10周年記念＝講演とシンポジウム＝ 「道北地域の現状と発展可能性」 報告 神沼 公三郎:研究会活動を振り返って 講演 島 多慶志:上川北部地域と名寄市の現状を考えて、将来を見据える 講演 久保田 宏:北・北海道における名寄市立大学の役割 シンポジウム:道北地域の現状と発展可能性を考える (シンポジスト)島 多慶志・亀井 義昭・河合 博司 (司会)神沼 公三郎	2006(平成18)年8月31日～9月1日、北大中川研究林(中川) 亀井 義昭:中川町の地域づくり 千見寺 正幸:音威子府村の地域づくり 吉田 俊也:北海道北部の天然林の変化ー北大研究林の長期データを中心に 宮沢 晴彦:道北漁業の現状と担い手の動向 10周年記念誌の論文執筆のために、研究会会員による個別の研究発表 2007(平成19)年1月13日、1月14日、名寄 10周年記念誌の論文執筆のために、研究会会員による個別の研究発表	北海道北部の地域振興 IX 176ページ、2007年2月	

年度	講演会(住民参加形態)	研究会会員の勉強会、研究会セミナー等	冊子発行	備考:冊子中の論文(勉強会、講演会の記録以外の論文)、特記事項など
第11年目 2007年度 (平成19年度)	第12回 2008(平成20)年3月21日、名寄市立大学 粟井 是臣:医療機関のネットワーク化と地域医療 山田 美緒子:地域に生きる、地域に学ぶ～なかとんべつの健康づくり～ 難波江 完三(特別講演):新たな北海道総合開発計画の特徴と課題	2008(平成20)年1月18日、北大北方生物圏フィールド科学センター(札幌) 山崎 幹根:北海道における道州制改革の課題 10周年記念誌の完成にむけて、研究会会員の最終討議	北海道北部の地域振興 X 114ページ、2008年3月	
第12年目 2008年度 (平成20年度)	第13回 2009(平成21)年3月23日、名寄市立大学 三島 徳三:ローカリズムと地域産業政策～道北で可能性をさぐる～ 石井 寛:地域社会で期待される国・道有林の役割	2008(平成20)年7月12日、名寄市立大学 『北海道北部の地域社会—分析と提言—』を批評する集い 批評1 島 多慶志:本書に対する評価、そして道北地域の展望 批評2 亀井 義昭:地域づくりの視点から見た本書の特徴と問題点 批評3 白井 暢明:北海道における道北の地域づくりと本書 批評4 鈴木 敏正:社会教育の視点から見た本書の特徴と残された課題	北海道北部の地域振興 X I 165ページ、2009年3月	
第13年目 2009年度 (平成21年度)	第14回 2010(平成22)年3月24日、名寄市立大学 寺沢 実:シラカンバ樹液の利用 吉田 弥生:「心の過疎」を乗り越えるまちおこし～中川町エコミュージアムセンターの取り組みを事例に～			
第14年目 2010年度 (平成22年度)	第15回 2011(平成23)年3月18日、名寄市立大学 基調講演 西村 宣彦:地方財政改革の現状と持続可能な地域づくり 研究報告 清水池 義治:フランス地域自然公園制度(PNR)の枠組みと天塩川流域での可能性(仮) 奈須 憲一郎:流域単位での内発的発展の構想～天塩川流域をモデルとして～		北海道北部の地域振興 X II 96ページ、2011年3月	<特記事項>研究代表者・清水池義治、共同研究者・神沼公三郎、佐藤信、吉田俊也、奈須憲一郎、三島徳三の計6名で名寄市立大学平成22年度学長特別枠支援経費を申請し、認められた。共同研究のテーマは『地方自然公園』制度を活用したボトムアップ型地域振興の可能性—天塩川流域を対象として—。研究期間は2010年度、2011年度の2年間。
第15年目 2011年度 (平成23年度)	第16回 2012(平成24)年3月9日、名寄市立大学 特別講演 加藤昭:道北地域の人口動態及び振興について 小林 国之:地域のブランド化とブランド認証制度 ～フランス・地方自然公園制度を訪ねて～ 木村 花菜:芸術文化活動(アート)による地域コミュニティ・ネットワークづくり ～『心の過疎』の克服を目指して～	2011(平成23)年9月29日～30日、北大中川研究林(中川) 川口 精雄:わが町の地域づくり 佐近 勝:わが村の地域づくり 横山 貴志:地域資源の保存と活用について ～音威子府村の歴史的資源の視点から～ 清水池 義治:地域振興策における地域ブランド・アイデンティティの創造 ～ブランド論からのアプローチ～		
第16年目 2012年度 (平成24年度)	第17回 2013(平成25)年3月15日、名寄市立大学 吉田 俊也:北海道北部の天然生林～持続的利用への展望～ 青柳 かつら:地域のお宝を活用して天塩川流域の暮らしを元気に! ～士別市朝日町郷土資料室を核とした山村文化保存・教育普及活動の事例～		北海道北部の地域振興 X III 182ページ、2013年3月	
第17年目 2013年度 (平成25年度)	第18回 2014(平成26)年3月20日、名寄市立大学 中嶋 信:名寄市立大学道北地域研究所に込められた願い 青木 紀:道北地域と名寄市立大学	2013(平成25)年9月12日～13日、中川町(ボンピラ温泉) 麻生 翼:健康・教育・観光分野での森林の利活用を通じて森林業の創造を ～下川におけるNPO法人森の生活の取り組み～ 田中 教幸:道北野外研修に参加した海外留学生から見た道北の現状と未来 菅原 萌:天塩川流域における地域活性化への広域的取り組みの可能性	北海道北部の地域振興 X IV 135ページ、2014年3月	2013年9月13日に国道40号音威子府バイパス工事現場を見学
第18年目 2014年度 (平成26年度)	第19回 2015(平成27)年3月19日、名寄市立大学 佐々木 政憲:地域に根ざし、地域に学び、地域を創造する大学～稚内北星学園大学の取り組み～ 佐近 勝:おといねっぶ高校の歩みと創造力を育む芸術教育	研究会セミナー 2014(平成26)年11月22日～23日、稚内北星学園大学 斉藤 吉広:地(知)の拠点整備事業の全体像と進捗状況 ゴータムB. P.:稚内北星学園大学の地域ネットワークへの取り組み 清水池 義治:名寄市立大学における地域貢献の意味と課題	北海道北部の地域振興 X V 141ページ、2015年3月	2014年11月23日に稚内メガソーラー発電所、宗谷岬ウィンドファームなどを見学
第19年目 2015年度 (平成27年度)	第20回 2016(平成28)年3月18日、名寄市立大学 林 明日美・堂脇 聖美:豊富温泉もりあげ隊の取り組みと 移住者が地域とつながる拠点づくり 黒井 理恵:nanicoCAFEから見る、まちづくりに重要なリスクテイクとチャレンジ	研究会セミナー 2015(平成27)年9月26日、音威子府村(天塩川温泉) 伊藤 徳彦:建設事業の事業地域における経済波及効果推計プロセスの構築 に関する研究～音威子府中川地域を事例として～ 疋田 吉織:博物館活動から地域づくりへ ～中川町エコミュージアムセンターの取り組み～	北海道北部の地域振興 X VI 134ページ、2016年3月	
第20年目 2016年度 (平成28年度)	第21回 2017(平成29)年3月21日、名寄市立大学 第1講演 神沼 公三郎:研究会の20年を振り返って 加藤 昭:道北地域の将来展望～道北研究会の新しい視点～ 第2講演 地元産小麦を通じた農商工・地域連携 基調講演:渡辺 幸一 トークセッション コーディネーター:佐久間 良博 パネリスト:草野 孝治、佐藤 導謙、相原 万百美	研究会セミナー 2016(平成28)年9月16日、名寄市立大学 今野 聖士:不足する農業雇用労働力とその対応 ～季節雇用から通年雇用へ向かう野菜産地～ 工藤 裕之:宗谷本線を軸とした道北新時代 ～「DMO」で変わる新たな道北ブランドの構築～	北海道北部の地域振興 X VII 135ページ、2017年3月	2016年9月15日にサンルダムの工事現場を見学

年度	講演会(住民参加形態)	研究会会員の勉強会、研究会セミナー等	冊子発行	備考:冊子中の論文(勉強会、講演会の記録以外の論文)、特記事項など
第21年目 2017年度 (平成29年度)	第22回、2018(平成30)年3月19日、名寄市立大学 葦島 栄紀:道北の古代交流が現代に語りかけるもの—アイヌ史研究の新潮流 鈴木 邦輝:天塩川に生かされたアイヌ～近世文献を中心に～ 氏江 敏文:チャシから見えてくる道北アイヌの生活～中川町でのチャシ発掘調査より～	研究会セミナー 2017(平成29)年11月18日、稚内北星学園大学 小田 清:「北海道の鉄道再生と地域発展をめざして」 斉藤 吉広:「宗谷地域研究所の鉄道プロジェクト」 高山 博幸:「北海道における高規格幹線道路整備によるストック効果事例」	北海道北部の地域振興 18 143ページ、2018年3月	2018年3月20日にニチロ畜産名寄工場などを見学
第22年目 2018年度 (平成30年度)	2018年度セミナーの2019年3月開催により中止	研究会セミナー 2018(平成30)年3月23日、名寄市立大学 今野 聖士:北海道における観光の現状と地域農業との関係性 杉川 毅:宗谷地域における観光の現状と広域連携に向けた課題 日置 友幸:上川北部地域における観光の広域連携に向けた取り組み 池田 俊一:冬季スポーツ拠点化事業と交流人口の拡大について	北海道北部の地域振興 19 98ページ、2019年3月	2018年9月6日、7日に2018年度セミナーを開催予定だったが、平成30年北海道胆振東部地震の発生により中止
第23年目 2019年度 (令和元年度)	2020年3月5日開催予定も新型コロナウイルス感染症予防の観点から中止	研究会セミナー、2019(令和元)年10月20日、キックスター！(稚内市) 浅川晃広「人の国際移動から見た国内移住」 菅原英人「代替不能な地域固有資源に起因する移住事例」 中島まなみ「豊富温泉が与えてくれた第2の人生～地域に役立つ隙間を見つける柔軟な発想～」	北海道北部の地域振興 20 ページ、2020年3月	2019年10月21日に国道40号音威子府バイパス工事現場を見学

注1)講演会は、第17回(2013年3月)まではいずれも、主催:道北の地域振興を考える研究会、共催:名寄市立大学道北地域研究所(2005年度までは市立名寄短期大学道北地域研究所)、後援:上川北部地区広域市町村圏振興協議会。

第18回(2014年3月)から第20回(2016年3月)までは主催:道北の地域振興を考える研究会、共催:名寄市立大学道北地域研究所、後援:テッソ・オ・ベツ賑わい創出協議会。

第21回(2017年3月)と第22回(2018年3月)は主催:道北の地域振興を考える研究会、共催:名寄市立大学コミュニティーケア教育研究センター、後援:テッソ・オ・ベツ賑わい創出協議会。

2019（平成 31/令和元）年度 ※肩書きは 2020 年 3 月時点

＜顧問＞

七戸 長生 北大名誉教授、元市立名寄短期大学長
加藤 昭 (一財) 水源地環境センター顧問、元北海道開発事務次官
前田 憲 名寄市立大学名誉教授
石井 寛 北大名誉教授
三島 徳三 北大名誉教授、元名寄市立大学副学長・教授
神沼 公三郎 北大名誉教授
森田 康志 株式会社北開水工コンサルタント 顧問

＜会長＞

清水池 義治 北大大学院農学研究院 農業経済学分野 食料農業市場学研究室 講師

＜副会長＞

斉藤 吉広 稚内北星学園大学学長
佐藤 信 北海学園大学経済学部 教授
藤田 健慈 名寄商工会議所 会頭
結城 佳子 名寄市立大学保健福祉学部看護学科 教授、同大学コミュニティーケア教育研究センター長

＜事務局長＞

今野 聖士 名寄市立大学保健福祉学部 講師

＜監事＞

播本 雅津子、伊藤 徳彦（下記の会員欄）

＜以下、会員＞

秋山 隆太郎 北海道大学大学院農学院 修士課程
浅川 晃広 名古屋大学大学院国際開発研究科 講師
麻生 翼 NPO 法人森の生活 代表理事
石川 守 北大大学院地球環境科学研究所 准教授
伊藤 徳彦 (一社) 北海道開発技術センター (DEC) 調査研究部
伊藤 学 旭川開発建設部 道路計画課長
小尾 晴美 中央大学経済学部 助教
河井 恒久 元 (株) エフエムなよろ メディア事業部
黒木 宏一 九州産業大学経済学部経済学科 講師
ゴータム・ビスヌ・プラサド 稚内北星学園大学情報メディア学部 准教授
末永 千絵 北海道大学大学院農学院 博士課程
田中 教幸 元 岩手大学 教授
中島 泰葉 名寄市立大学保健福祉学部看護学科 助手
奈須 憲一郎 eggplant 代表
播本 雅津子 名寄市立大学保健福祉学部看護学科 教授
日置 友幸 中川町観光協会 事務局員
疋田 吉識 中川町教育委員会 エコミュージアムセンター 主査
松浦 智和 名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科 講師
松倉 聡史 名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科 教授
丸山 ちなみ 北海道大学農学部農業経済学科

宮沢 晴彦	北大大学院水産科学研究院 教授
名徳 知記	酪農家
森 久大	帯広百年記念館 学芸員
山本 宏	NPO 法人北海道住宅の会 副理事長、元北海道立林産試験場長
横山 貴志	音威子府村総務課地域振興室 主事
吉田 俊也	北大北方生物圏フィールド科学センター 教授、北管理部長、雨竜研究林長
吉田 弥生	北大大学院教育学院 博士課程

IV. 2018年度 道北の地域振興を考える研究会 セミナー

- (1) 冒頭挨拶 清水池 義治 (道北の地域振興を考える研究会 会長)
- (2) 第1報告 今野 聖士 (名寄市立大学保健福祉学部 講師)
北海道における観光の現状と農業との関係性
- (3) 第2報告 杉川 毅 (宗谷シーニックバイウェイ事務局/稚内印刷 (株) 代表取締役社長)
宗谷地域における観光の現状と広域連携に向けた課題
- (4) 第3報告 日置 友幸 (中川町観光協会)
上川北部地域における観光の広域連携に向けた取り組み
- (5) 第4報告 池田 俊一 (名寄市教育委員会教育部スポーツ・合宿推進課 主幹)
冬季スポーツ拠点化事業と交流人口の拡大について
- (6) 総合討論

期 日 2019年3月20日 (水)

場 所 名寄市立大学

主 催 道北の地域振興を考える研究会 (会長: 清水池 義治)

共 催 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター (センター長: 結城 佳子)

後 援 テッシ・オ・ペツ賑わい創出協議会 (会長: 加藤 剛士 (名寄市長))

(1) 冒頭挨拶

司会: 清水池 義治 (道北の地域振興を考える研究会会長、北海道大学大学院農学研究院 講師)

本日は、年度末のお忙しい中、足を運んでいただきまして、誠にありがとうございます。私は、北海道大学の清水池と申します。本日のセミナーの主催団体であります、道北の地域振興を考える研究会の会長を務めております。

本日は、北海道北部の観光戦略を考えるというテーマで、セミナーを設定させていただきました。本研究会は北海道北部地域の地域振興に資する研究を行うことを目的として、1997年に結成されました。主な活動としては、秋にセミナー、3月には講演会という形式で毎年度行っております。実は、本日の観光に関する内容のセミナーは、昨年9月7日に予定していました。皆さんもご存じの通り、北海道胆振東部地震で中止となり、今日、場所も中川町から名寄市に変えて開催ということになりました。

本日は、本研究会の会員を含めまして、4人の方からご報告をいただきます。名寄市立大学の今野さん、宗谷シーニックバイウェイ事務局の杉川さん、中川町観光協会の日置さん、そして名寄市教育委員会の池田さんの4名です。この4人の方におかれましては、ご多忙の中、セミナーでの報告をお

引き受けいただきまして、誠にありがとうございます。それぞれの報告は観光という内容では同じなんですけれども、かなり多彩な中身となっておりますので、私としても非常に楽しみにしております。まず、4人の方からご報告いただいた後、質疑応答、総合討論の時間を1時間弱程度になると思いますが、設けております。今日は参加者も限られておりますので、皆さんからもざっくばらんにご意見をいただければと思います。

本セミナーは名寄市立大学コミュニティーケア教育研究センターとの共催になっております。開催に向けてはさまざまなご支援をいただき、感謝申し上げます。加えまして、本セミナーは各種団体からもご支援をいただいております。石狩川振興財団、北海道河川財団、ならびに北海道開発技術センターからのご支援を受けて開催していることとお知らせするとともに、合わせて感謝申し上げます。それでは早速、報告のほうに移っていききたいと思います。よろしく申し上げます。

(2) 第1報告 北海道における観光の現状と農業との関係性 今野 聖士 (名寄市立大学保健福祉学部 講師)

1. はじめに

皆さんこんにちは。名寄市立大学の今野と申します。大学では経済学を主に担当しております。専門は農業経済学ですので、観光については素人なのですが、せっかくの機会を頂きましたので北海道における観光の現状をごく簡単に整理した上で、農業とどのような関係性があるのかという視点から、今日はお話をさせていただきたいと思います。まず問題の背景なのですけれども、今の日本の農業・農村を考えますと、この道北地域は非常に農業が盛んに取り組まれているわけですが、農業者が取り組む観光を考えると、特別な誰かしかできないという取り組みではなく、大小様々な取り組みがされてきたと思います。古くは地域農業と切り離された観光農園。つまりその地域の特産物、例えば小麦や玉ねぎを作るのとは別に、観光客を呼び寄せるために、例えばリンゴを植えたとか、ハスカップの収穫体験ができるようにしたというような取り組みです。このように農業と観光の関係性は、観光を目的として作った農園が始まりであろうといわれております。これは日本全体でもそうですし、北海道においてもそういう面はあると思います。

ただし最近ですと、日本型グリーンツーリズムと呼ばれる体験農園と修学旅行生を中心とした活動やインバウンドといった形で外国人の観光客の方が非常に奥地まで入ってくるようになったこと、さらに都市住民との交流活動なども含めまして、いろいろな展開がなされてきている状況があります。このような背景の中で、北海道の観光業を非常に浅い整理ではありますが、見てみますと、インバウンドの増加もありまして、観光業が北海道の主たる産業の一つになってきております。いわゆる観光の入込客数、北海道に観光に来るお客さんは、やや増加傾向になります。一方農業を見てみると、急速な農家戸数の減少があり、北海道全体でも4万戸を切っている状況になり、大型化が非常に進んでいます。とはいえ農業も北海道の主たる産業の一つになっていることは言えると思います。北海道のこれまでの観光というのをざっくり見てみますと、典型的とか画一的と言われてきました。雄大な自然を楽しむとか、温泉につかるとか、定番の海産物（カニ、ウニ、イクラ）、定番の農産物（メロン、じゃがバター）、定番の観光ルート・名所といったものを、点と点で結ぶというのが北海道観光の強みであり、弱みであると考えられてきました。振り返って、今日のメインテーマである、観光と農業の関係性はどのようになっていたのかと言いますと、最初に簡単に言ってしまうと、あくまでも一般的な農産物の供給にとどまるという点が、これまでの関係性だったと考えられます。つまり特別なものではなくて、その場にあるものを一般的に供給していた関係性です。観光農業はもちろん観光のために農産物を作りますが、北海道の農業全体が観光客に向けた営農活動をしていたかということ、そうではないだろうというところがあります。一方、観光農業でも移動した先にある点としての農業体験にとどまっていた。北海道の農業とはどういうものなのか、農家で生活するということはどのようなことなのか。そういったこと（本質）ではなくて、“果物を収穫しました。おいしかった。ジャガイモを掘ってみました。おいしかった。”そういったものにとどまっていた。つまり北海道で行われてる一

般的な農業（いわゆる慣行農業）・大規模な農業との接点は実はあまりなかったと考えられます。とても大きな畑で、小麦を大きなコンバインで収穫しているところを観光客に見せることは、収穫時期や事故の危険性から難しいというのがありますので、どうしても体験させてあげやすいものになってしまっていたのではないかと考えられます。もちろん、農業の本質を見せる取り組みがいままで全く無かったわけではなく、多くの取り組みがされており、成果が上がっているとも言えます。これは点としてはすごく頑張っている方がたくさんいらっしゃるからです。ただ北海道全体として考えてみますと、やはり都府県のような観光と農業がすごく密接につながって、地域が活性化するような取り組みは、まだまだこれからなのではないかというところだと思います。

ではそれがなぜまだまだ本州と違う、北海道としての状況になっているのかを考えますと、ある意味北海道は、日本の中で農業構造が特殊なのではないか。先ほども言いましたように、北海道の農業は大規模ですけども、さらに消費地から離れているという特徴もあります。すぐそこに出荷先がない＝運賃が高くなるので、大ロットで遠くに運ぶことになります。こうなると一人ではできないので、専門用語で共販体制と呼んでいますが、農協を中心にしてみんなでまとまって送り、売るという形が一般的になります。さらに大規模に取り組める農家＝農業専業の方が非常に多くなります。すると、なかなか農作業以外に手間が掛けられない。もう農業が忙しくて、なかなか観光客の方が来たところで、対応しにくい。挙家離村といいまして、農業やめてしまったら、リタイアしたまま農村にとどまるのではなくて、一家を挙げて都市部に移動してしまう（すなわち農村人口の減少と大型化が同時進行する）。こういったことから表現されるような、特殊な構造だったのではないかと。そのため、都府県と同じような観光と農業の関係性の構築は難しいといわれてきました。けれども最近はその関係性を急速に（いやこれではまずい思い）、もっと観光面も含めて農業もやっぴいこうと考え、急速にその関係性の再構築を行っている中ではないかと考えました。この視点で今日は農業と観光の関係性を見ていきたいと思います。

2. 北海道観光の概要

次に北海道における観光の概要をお話ししますが、これは皆さんご存じの方も多いかと思えますし、今日のメインのお話とはずれますので、ごくごく簡単にご紹介させていただきたいと思えます。

まず観光客の入込客数ですね。実人数は、東日本大震災の影響などによりまして、2011年度には落ち込んだのですが、その後は増えてきています。2016年度の結果ですと、5466万人です。一方、北海道の観光といいますとすごくインバウンドが増えたという実感があると思います。ところが北海道の観光客としては、メインはやはり道内客です。当然外国の方も増えているのですが、道内客を上回る状況にはなっていません。増えた分は外国人であるという統計データは出ています。こちらがデータなのですが、一番下の列を見ていただくと分かるのですが、全体が5466万人で、道内客が4600万人ですね。そして、道外が594万人、外国人客が230万人となっています。ただし外国人の方は非常に宿泊の日数が長く、落としてくれるお金が多いので目立つのですが、人数としてはまだ少数です。さらに北海道観光は地域とか季節による偏りが非常に大きい。これ

も皆さんご存じのことだと思います。つまりスキーで見るとやはりニセコですとか、観光地で言いますと札幌、小樽などに偏っている。新千歳空港を中心とした道央圏に集中しています。つまり釧路、根室、オホーツクですとか、上川の北部など新千歳空港から遠い地域は、2次交通の利便性があまりよくないこともあって、苦戦している状況になります。そこで、道央圏、道北圏など圏域ごとに統計データを見てみますと、図のような形になっていまして、やはり道央圏が一番大きくなっています。実は道北は2位なのですが、これで名寄を含めた道北地域は安泰かといいますとそうではなくて、これは富良野が入ってるんですね。ほぼ富良野で観光客の大部分を稼いでいるという状況になってしまいますので、この結果が上川全体の傾向を示しているわけではありません。また季節にもよっても入込客数の差が非常に大きく、日本人はやはり夏ですね。この7月、8月に旅行する方が多いのですが、冬はちょっと小さくなります。逆に外国人の方は冬ですね。ニセコに代表されるような冬の観光が非常に大きくて、夏は落ち込んでしまうと。こういったラグがあります。またどこの国の方が来てるのかというのを見ますと、一番下が最新のデータになっていますけれども、中国、台湾、韓国が多くなっています。韓国の方は非常に最近増えてきているという状況になっています。

次に、経済的な関係を少し見てみますと、北海道における観光消費額の推定額は1兆4298億円ということになっております。道内の方が6300億円、道外が4200億円、外国人が3700億円となっており、人数の割にやはり外国人の方はかなり落としてくれるお金が多い。農業部門としてはどうだったか見ますと、195億円にとどまります。2兆円の中で195億円ということなんですけれども、そのぐらい消費されて、それを支えるために478億円の生産誘発額。つまり195億円の商品を作るために、478億円が周辺として動いた。人数面でも6000人の雇用がプラスになったというのが、統計データとしては出ています。これが北海道の観光のごくごく簡単な整理という形になります。

3. 北海道における観光と農業の関係性の変化

それでは、北海道における観光と農業の関係性について見ていきたいと思います。大まかな経緯としましては、北海道の観光と農業の関係性の変化があります。一番最初に申しましたように、観光農業というものから、近年のグリーンツーリズムへ。そして、ごくごく最近の動きとして、ルーラルツーリズムというものについて見ていきたいと思います。まず観光農業からグリーンツーリズム、6次産業化という取り組みですが、冒頭にも申しました通り、観光農業、いわゆる既存の普通の農業とは異なる、観光のために作られた農業ですね。こういったものからスタートしました。これは別に北海道に限った話ではなくて、全国的にそうなっています。例えば果樹のもぎ取り体験みたいなものになります。基本的には札幌都市圏から日帰りということになりますので、仁木ですとか余市ですとか、札幌の定山溪の奥の方などで今も盛んに行われています。

観光農園の取り組みは消費者が農村を体験するという意味では限定的なのですが、現場を理解してもらうという意味では一定の成果があります。ただ北海道の一般的な形態である大規模生産ですとか、遠くにたくさんの農産物を出荷するとか、そういった普通の農業（＝慣行農業）とは

異なる農業ですので、それを体験したから北海道の農業の理解が深まるとは言いきれないところがあります。そこで1990年代に入ってから新しく取り組みが始まったのが、グリーンツーリズムという概念になります。これまで直売所、もぎ取り体験といった（観光）農業体験がありましたが、“点”の体験（観光のために作られたその場所・ほ場のみが体験・学習の場）でした。グリーンツーリズムはそうではなく、もうすこし広範な農業体験が可能であるというのが特徴だといわれています。つまり一般的な農業に近い、普通の農村でも観光客の受け入れが可能になったといわれています。つまり観光客のために何かを植えるとか準備することなく、普段の作業、例えばお米の刈り取りをするだけでなく、雑草を抜くとか、普通に肥料の調整をして、それをまくとかです。体験のためにいいところだけを用意するのではなく、農業全体の、その時できることを提供するということが可能になったという点で、日本型グリーンツーリズムは非常に画期的だったと考えられています。さらに農業者によるさまざまな取り組みが最近では増えてきて、加工品の販売やファームレストラン、ファームインといった形で、グリーンツーリズムの関連施設数はどんどん増えてきています。

一方で、グリーンツーリズムをどんどん展開した結果、“修学旅行を含む教育旅行を受け入れて、農業体験と農家民泊を2泊3日で行う”、これが農業体験だよ、グリーンツーリズムだよ、というような、画一化が指摘されるようになりました。これが悪いという意味ではないのですが、この条件に当てはまらないと農業体験の受入はできない（うちには宿泊させることができないから受け入れできない、など）と

画一的な判断をするところも出てきてしまいました。つまり北海道も都府県と同様に、こういった“修学旅行を基本とし、農業体験と宿泊をセットにした日本型グリーンツーリズム”という枠内で、90年代以降発展してきたといわれるのですが、批判もあったということになります。ただ最近ではさらに新しい動きが見られます。それを私はルーラルツーリズムという言葉で借りて、今回表現しています。どう変わってきたかといいますと、これまでの農業と観光の関係性はあくまでも“ごく一部の農業と観光客の関係性”だったのですが、近年、農村の景観が再評価されるようになりました。すると、（農村）景観はタダで見ることができます（フリーライド）ので、観光業が一方向的に観光資源を消費し、その大元である農村景観を作り出している農業者へは全く還元されない、むしろ観光バスによる渋滞により作業の遅れや観光客のほ場侵入による病気の発生など、農業にとってマイナス面が大きくなってきてしまいました。以降、これについてお話ししたいと思います。

これまで観光客が農村で消費するものといえますのは、観光農園ですとかグリーンツーリズムによる「体験」が目的でした。逆に最近、農業がそこで営まれることで発揮される外部効果というものに、注目が集まるようになりました。例えば富良野や美瑛のきれいな農村景観がありますね。あれは景観作物という見た目中心の作物も当然あるんですが、それを除けば、農業者が景観のために農作業を行ってるわけではないのです。あくまでも自分が農業をするために作業した結果、きれいな風景ができたという状況になります。つまり従来からそこに住んでいる人にとっては、当たり前前の景色だったのです。ところがそれが、“この景観に価値がある”と観光側が認識

して、それを地域資源として生かし始めるという動きが出てきました。観光地、温泉街だけではなく、北海道の農村の景観を目的として設立される、レストランやカフェなんかが増えてきたわけですね。例えば美瑛ですと、フェルム・ラテールという東京の会社がそのために新しくお店を作ったりですとか、これは（写真を示して）有名な青い池というところですけども、これも観光のために作ったのではなく、あくまでも治水ダムを作った結果、たまたまできた副産物になります。これを外部効果と呼んでいます。つまり観光客が消費するものが、「体験」から「農村そのもの」を楽しむ、景観も含めてですね、そういったところへ変わってしまっていて、それをルーラルツーリズムとヨーロッパのほうでは昔から呼んでおりましたので、そういった形への転換が始まっているのではないかと考えられます。

一方でこの景観を生かすということはいいことばかりではなく、フリーライドが可能だという問題点が指摘されています。つまり、“この景観きれいだな、いいな、じゃここにレストランを建てよう、ここに宿泊施設を建てよう”という、建てただけですと、農家の収益にはまったくつながらないのです。つまり農家が頑張っても景観を維持したとしても、それが地域資源として活用されるのですが、農家には還元されないということになります。むしろ地域に人が来ることは、農業にとっては「農道が渋滞して、結局作業コスト掛かってしまう」とか、よくあるのが「畑の中に入って写真を撮って、足に付いている虫が中に入ってしまふ」といったマイナス面が生じます。特にジャガイモですと、非常にうつしてほしくない虫などがいます。そういった負の影響をもたらすことのほうが認識されやすいです。例えば美瑛町に哲学の木という木がありましたが、老朽化はもちろんあったのですが、いくら観光客にほ場に入らないで欲しいと訴えても聞き入れてもらえなかったから切られてしまったというのは、最近の記憶に新しいところですね。では、このような問題を回避するためにはどうしたらいいかといいますと、やはり何かの経済的利益を、多少なりとも農業者に還元するような関係性を作る必要があると思います。例えばどういうことができるか考えてみます。これまで地域の飲食店や宿泊施設は必ずしも地域の食材を使っていなかったといわれています。その原因の一端は、先ほど言いましたように、画一化された北海道のイメージです。どこに行ってもカニとかトウキビのイメージです。もう一つは、北海道特有の農産物流通システムです。先に言いましたように、遠くに・大量に・みんなでする・というシステムですので、逆にいいますと地元のために“ちょっとだけ”商品を生産して流す、こういう仕組みは苦手なわけですね。地元のホテルが地元の食材を求めても対応できなかったという、実は、農業側、農産物を流通させる側の問題もあったと思います。ただ今の状況を考えますと、そういった小さな地場消費の取り組みも、きちんと農業側で対応していかななくてはいけない。農業側に対応が求められる社会になってきたといえると思います。つまり北海道におけるこれからの観光と農業の関係を考える時は、これまでのような“大きな、遠くに、みんなでする”送るという仕組みもありつつ、やはり地場流通で、地域で作ったものを地域で食べてもらう仕組みも、同時に作らなければいけない。実はこれ、すごく難しいことなのですが、やらなくてはならない。また観光業も積極的にそういった地場食材を使うことで、地域の農業に対する理解を深めて、利益還元の取り組みも進める方向が必要なのではないかと考えられます。

3. 事例紹介

では具体的にどんなことがあるのかなと、考えていきたいところですが、これがベストですよといえますのは、実はまだありません。今日は完全な例ではありませんが、近い取り組みとして、二つほど紹介したいと思います。時間の都合でごく簡単な紹介になりますが、一つは美深の事例になります。美深は非常に小さな町ではありますが、小麦を最近頑張って作っております。小麦という作物は、もうまさに大規模流通の代表です。なかなか地元で地元の小麦を食べることはできなかったものなのです。地元の小麦を地元で食べられるようになったのは、ごくごく最近です。なぜできなかったといえますと、小麦は非常に量が多く取れますので、あまり小さい量では流通してなかったのです。仮に何らかの方法で、例えば地場産小麦、美深町で作ってる小麦を入手したとしても、小麦は米と違って、そのまま食べられないんですよ。どうしても製粉という作業をして、小麦粉にしなければいけません。そうすると製粉会社というのは皆さんご存じの通り、大きな会社が多いです。例えば日清とか日粉とか昭和とかですね。そうしますと、どんなに小さく小さくお願いします、最小量で製粉してくださいといってもですね、最低ロットが20から25トンっていう状況です。20トンは大体6万個の食パンになります。6万個といえますと、5枚切りにしたら30万食です。5000人ぐらいの町ではもうとても消費し切れない！という量になってしまいますので、そこにいい小麦がある、地元を食べさせたい、特に給食なんかで食べさせたいと思っても、なかなかできない。そういった問題がありました。ところが美深ではそれを何とかしたいということで頑張りました、小麦のまず生産を進めました。さらにちょっと時間がないので私のほうで省略しながら話しますけれども、江別製粉という、江別にある有名な製粉会社さんなのですが、そこがF-shipという機械を作ってくれました。この機械は最低ロット1トン弱から製粉できます。すると、製粉の歩留まりが8割程度ですから、大体750キロの小麦で製粉すると、2割から3割落ちて、500キロぐらいの小麦粉ができてきます。そうすると食パンだと2500個になりますので、2500個だったら学校給食と地域に配れば何とか消費できるな、ということで、小さな町でも地場産の小麦が使えると、そういった仕組みを作ることができました。とはいえ2500個です。これを使うというのはなかなか大変ですので、麦チェーン推進協議会という組織を町内で作りまして、小麦を使っている業者さんにどんどんサンプルを配って、どんどん使いましょう。地元の小麦を使って、使い切れる環境を作りましょう。こういったことをいろいろ工夫しました。当然生産面でもいろいろ工夫があり、例えば初冬まきという技術を入れたという取り組みもあるのですが、お時間がないので今回は省略したいと思います。初期の成果としては、美深麺ですとか、牛肉まんですとか、クリーミーパスタですとか、こういったものが作られまして、地域の特産物ができて、非常にPRに貢献していることが指摘されています。また農業者にとっては、今までは、自分の作った小麦を誰が食べるのか分からないというのが当たり前でしたが、地元で食べてもらえるということで、モチベーションが上がったというのが、いい点として指摘されているところでもあります。商品を並べるとこんな感じで、非常に、おいしそうな商品ができています。

次に紹介するのは、「一般的な農業と観光客の求める農業をつなぐ役割」これについて見ていきたいと思います。一つは農業体験ガイドが必要なのではないかというのが、私の考えです。より“農業体験をコンテンツとして、広く旅行者に体験してもらおう”と思うと、現在のような“農業者が旅行者に、最初から最後まで付きっきりのもてなし”は難しいだろうと思います。「いらっしやい、何なら駅に迎えに出ます。そして、畑に来て、今日は1日これをしましょう。泊りましょう。ごはんを作りましょう。次の日、体験して帰りましょう」とすると、専業農家ですので、全員が全員、全部の時期にそういったスタイルで旅行者を受け入れるのは難しいだろうと思います。逆にヨーロッパスタイルで、自由に農村を移動してくださいとしますと、圃場への侵入が起きたり、営農上の不都合が生じてしまうだろうと思います。そうしますと、やはり農業者の負担を抑えつつも、適切なルートで農村景観とか農業体験を楽しむことのできる方法が必要となり、それがガイドを付けることじゃないかと考えました。一部の地方では、実はこの考えに近い事業が実施されてるケースがありまして、例えば旭川の旅行会社さんが取り組まれている事業ですとか、十勝地方のいただきますカンパニーという会社さんですとかがあります。こういったところを利用しますと、例えば農業者とガイドの間であらかじめ場所、内容を決めておきます。そうすると利用する場合はガイドから農家さんに、これから行きますのでよろしくね、というような連絡があって、もちろん農家に時間があれば、現場に行ってお話をするってこともあるんですが、例えばすごく忙しい時期、収穫時期なんかだと、勝手に来て、勝手に収穫体験して、勝手に帰ってくれるというのがあります。そうすると忙しい時期とか、やっぱりおもてなしを行うと、どうしても農家の奥さんに対する負担が大きくなりますので、専業農家でも受け入れることができるという意味で、非常に裾野を広げることができるのではないかと考えられます。例えばいただきますカンパニーのホームページを見ると、長靴が並んでいるのですね。これは非常に気を遣ってまして、畑に入る時に、どこかからか持ってきた病害虫を移さないために、きちんと消毒された長靴を用意して、履き替えてくださいという取り組みです。こういったことをきちんとしてくれるのが強みだといわれています。

ここまでを簡単にまとめますと、富良野のようによく知られたところを観光資源として活用するためには、従来の農家ですと、観光と農業は対立関係であっただろうと思います。観光業としては一定儲かっているし、人が来ているのかもしれないけれども、やっぱり農業にとってはフリーライドであって、畑に人が入ってきたら困るし、作業のロスも出るし、あまり農業側にはメリットがないよね、と考えられてきたわけです。しかし、これから考えると農家の負担を抑えつつも、適切な方法で楽しむことができるような、協調関係に発展させてく必要があるだろうと思います。そう考えますと、例えば登山ですとかアクティビティ、バックカントリーなんかでも最近有名になっていますが、秩序を守りつつ、安全に楽しむことのできる知識を持ったガイド役が、やはりこれから必要になるだろうと思います。また民泊はできないけれども、農業体験は提供できる農家ですとか、素材はあるが、体験提供ノウハウがない農家ですとか、宿泊だけではなくて、やはりコンテンツとして農業体験を提供したいっていうホテルですとか、こういった方たちをつなげる取り組みが必要になってきます。地域内でそれぞれ提供できるものに限定がある中で、旅

行者がどこに依頼すればいいのかが分かりづらいという問題がありますので、ワンストップで調整して組み合わせをしてくれるような取り組みが求められています。

4. おわりに

北海道の観光は自然や食材といった優位性から観光客を引きつけてきたわけなのですが、最近では外国人来道者が急増しております。北海道における農業と観光の関係性は、もぎ取り体験ですとかそういった観光農園から始まり、グリーンツーリズムの普及とともに、農業体験に移行しました。さらに6次産業化といった形でいろいろな取り組みがなされてきたわけですが、やはり点での展開であったと思います。本質的な意味でのルーラリティの消費、つまり農村に滞在することを楽しむという行動とはちょっと違うよねっていうところになってしまっていました。一方で観光業が農業生産の多目的機能の一つ—ちょっと難しい表現ですけども、景観のためにつくったわけではなく、営農する中で生じる、農業生産以外の機能、例えば田んぼが洪水調整をするように畑が景観を作るようなこと—営農するが故に、たまたまできた景色。これを再評価する動きが増えてきました。これは観光業とか地域経済にとってはいいことなのですが、それを維持している農業者への還元が十分に行われてこなかったという問題がありました。一方で農業サイドもなかなか地場流通に対応できず、少量多品種で地元のを地元で食べていただくための流通システムが、なかなかできていなかったという問題もありました。このために「小さな流通を作る仕組みです」とか、「地元のを大きな流れの中で抜き取る仕組み」ですとか、「農業者に過度な負担を掛けなくて、農業体験の手助けをするガイドの存在が必要」ということなどを指摘したいと思います。このように北海道における農業の観光との関係性は無関係、むしろやや対立関係—哲学の木が切られたみたいな状況—から、農業・農村の多面的機能、つまり営農で作られた景観や地元食材を観光資源として観光業が再評価してくれましたので、それに対応できるような仕組みを農業、流通サイドでも作っていかねばいけない段階に来ています。さらに、観光客対応に本質的に向いていない、一般的な大型農家（生産規模が多くて忙しい）と、もっと農村を楽しみたいという観光客をつなぐガイド役や窓口役が求められています。そういった動きが急速に最近進んでいるのではないかと思います。こういった仕組みがあれば、繁忙期やおもてなしが苦手な農家でも、農業・農村体験、ルーラル・ツーリズムを提供することが可能になります。日本型のグリーンツーリズムと並行して、やはりこういった北海道型ともいえるような観光と農業の関係性—ヨーロッパ型のルーラルツーリズムに近い形の展開—が、実は北海道では適しているのではないかと、私は考えています。そういった意味では、地場産流通の振興ですとか、観光業のフリーライドの解消、調整窓口の設置・良質な農業ガイドの育成というようないろんな課題がありますので、当然行政もそういう課題に対する動きを適切に支援していく必要があると思われますし、それに何らかの組織が応えていくことが、これからは求められているのではないかなと思います。私の報告は以上になります。ありがとうございました。

北海道における観光の現状と 農業との関係性

今野聖士(名寄市立大学)

1. はじめに

問題の背景

- 今日の日本の農業・農村において“観光”は特別なものではない...**様々な取り組み**
- 古くは地域農業と切り離された“観光農園”として始まった観光と農業の関係性
→日本型グリーンツーリズムの普及や、インバウンドによる観光客の増加・地方部への浸透、人手不足への対応や都市住民との交流を目的とした都市農村交流など多様な展開に

2

1. はじめに

問題の背景

- 北海道の観光業は主たる産業の一つに(ex.インバウンドの増加)
→観光入込客数は**やや増加傾向**

北海道の農業は急速な**農家戸数の減少と大型化**が進みつつも、一定の作付面積を維持し、こちらも主たる産業の一つとなっている。

★一方で...

これまでの北海道の“典型的”観光といえば...画一性

- 雄大な自然 ・温泉 ・**定番の海産物**(カニ・ウニ・イクラ)・**定番の農産物**(メロン・ジャガバター)・観光ルート...名所を**点と点で結ぶ**

3

問題の背景

では観光と農業の関係性は？

- あくまでも“**一般的**”な**農産物の供給**にとどまる

- “観光農業”でも、移動した先にある“**点**”としての“**農業体験**”(果樹やジャガイモ、スイートコーンの収穫体験)にとどまる

★北海道で行われている一般的な農業(慣行農業・大規模)との接点は(実は)あまりない(?)

4

問題の背景

- もちろん点としての取り組みをみれば...
- 各地に農業と観光がつながる多様な取り組み
→多くの成果
- しかし、北海道全体では？
 - 都府県のような観光と農業の密接な関係性
→例えば農業・農村の取り組みによって観光客を誘致し、地域を活性化させるような取り組み→はまだ端緒についたばかり

5

問題の背景

- それは北海道農業が...
ある意味日本の中では**特殊な農業構造**
→遠隔地・大ロット出荷・強固な共販体制・大規模専業・挙家離村による農村の非農業者の減少といったキーワードで表現されるような
の元で営まれているため
→都府県と同じような展開が難しい
- ★その制約の中で**その関係性を急速に構築しようとしている**最中ではないか？

6

北海道観光の現状 -「北海道観光の現状 2017(北海道経済部観光局)より」

- 北海道の観光入込客数(実人数)は、東日本大震災の影響などにより2011年度に落ち込んだものの、2012年度より回復基調
2015年度は5,478万人となり過去最高を更新
2016年度は5,466万人と微減(北海道新幹線↑・台風↓)
- 北海道の延べ宿泊者数は3,498万人泊で、全国の7.1%(東京都に次いで第2位)
- 一方で観光消費額の高い道外客の入込は、1999年度の最高値(615万人)を超えておらず、伸び悩み
→**増加分は外国人来道者**

7

8

2. 北海道における観光の概要

表1 北海道における観光入込客数(実数)
および宿泊客数(延べ数)の推移

単位:万人

年度	観光入込客数				計	宿泊客 延べ数
	外国人 客	道外客	道内客			
1999	20	615	4,515	5,150	3,631	
2006	59	600	4,250	4,909	3,443	
2007	71	578	4,309	4,958	3,279	
2008	69	559	4,079	4,707	3,222	
2009	68	529	4,085	4,682	3,092	
2010	74	521	4,532	5,127	2,991	
2011	57	487	4,068	4,612	2,887	
2012	79	544	4,475	5,098	3,029	
2013	115	565	4,639	5,319	3,215	
2014	154	569	4,654	5,377	3,279	
2015	208	577	4,693	5,478	3,471	
2016	230	594	4,642	5,466	3,498	

資料:北海道観光入り込み客数調査 各年次

・訪日外国人来道者数は、2012年度以降、国際定期便の新規就航や増便、ビザ発給条件の緩和、免税制度の拡充、円安基調の継続などから回復

2016年度は230万人(前年度比 10.6%増)と、過去最高を更新
日本全体の外国人旅行者2,482万人の9.3%を占める

★偏りが大きい北海道観光<地域・季節>

・圏域別に見ると、観光客入込数に大きな偏り
道央圏域が7,786万人と最も多い(構成比55.2%)
→札幌・小樽・ニセコといった人気の観光地、新千歳空港
そもそも北海道の人口が札幌圏に偏っていることも

反面、釧路・根室圏域、オホーツク圏域は道外客の発着点である新千歳空港から遠く、2次交通の利便性が低いこともあって苦戦

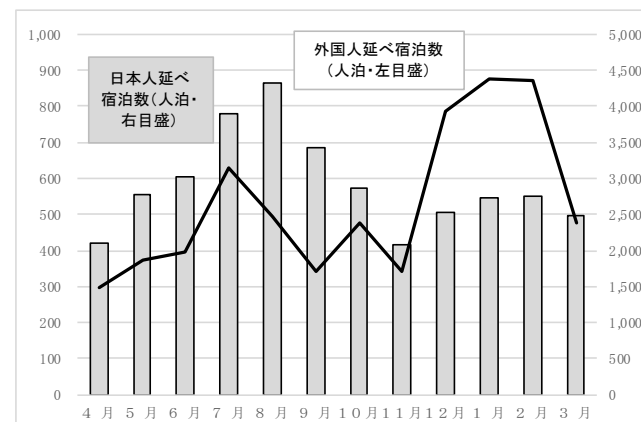
表2 北海道における圏域別観光客入込数(延べ人数)の偏り

圏域名	観光客入込数(千人)	構成比(%)
道央圏域計	77,861.0	55.2
道北圏域計	22,366.4	15.9
道南圏域計	13,726.1	9.7
十勝圏域計	9,557.3	6.8
釧路・根室圏域計	9,125.6	6.5
オホーツク圏域計	8,356.3	5.9
(北海道計)	140,992.7	100.0

資料:北海道観光入込客数調査報告書 平成28年度版 より

★偏りが大きい北海道観光<地域・季節>

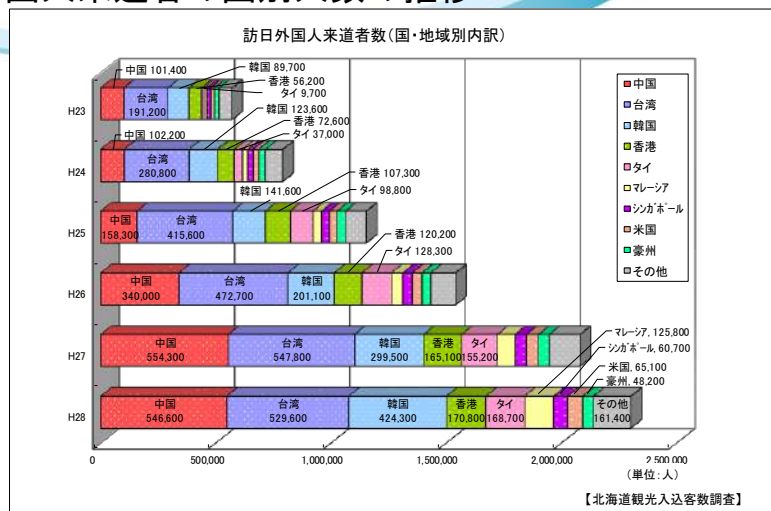
・棒グラフの日本人観光客は夏期、とりわけ7・8月に集中し、6~9月の夏期で1年の約4割を占めている。一方外国人は7月と12~2月の冬季に2回山がある。



資料:北海道観光入込客数調査報告書 平成28年度版

図1 月別延べ宿泊数の偏り

★外国人来道者の国別人数の推移



- ・2016年は前年比10%増の230万人となり、過去最高
- 国際定期便の新規就航や増便があったため
- ・国・地域別には、元々大きな割合を占めていた中国・台湾の実数がやや減少する一方で韓国が前年比42%増と大きく伸張

13

★観光産業と農業の経済的関係性

- ・北海道における総観光消費額は1兆4,298億円(道内客6,374億円、道外客4,220億円、外国人3,705億円)、生産誘発額は2兆897億円
- 農業部門への影響は、195億円の観光消費により、478億円の生産誘発額が生まれ、雇用面でも6,722人の雇用が生まれたと計算されている。

表5 北海道における観光消費による農業の生産誘発額・雇用誘発者数

部門	観光消費額	直接効果	第1次間接効果	第2次間接効果	合計	全産業構成比(%)	
生産誘発額 (百万円)	農業	19,525	9,700	32,113	6,019	47,832	2.3
	全産業	1,429,840	1,216,328	546,844	326,497	2,089,669	100.0
雇用誘発者数 (人)	農業	19,525	1,363	4,513	846	6,722	3.5
	全産業	1,429,840	125,516	39,834	24,629	189,979	100.0

資料:「第6回北海道観光産業経済効果調査」北海道経済部観光局

14

3. 北海道における観光と農業の関係性

北海道における観光と農業の関係性について

これまでの大まかな経緯を

1)観光農業からグリーン・ツーリズム、6次産業化へ から

次いでごく最近の動きとして

2)ルーラル・ツーリズムと農業(者)の関係性を示す

3. 北海道における観光と農業の関係性

1)観光農業からグリーン・ツーリズム、6次産業化へ

★これまでの北海道における観光と農業の関係性

<観光農業>(=既存の慣行農業と異なる形態)

・マストツーリズムの拡大...札幌都市圏から日帰り(果樹:”もぎとり”体験)

→消費者が農村を体験(消費)するという点では限定的。現場を理解してもらおうという点では一定の成果

⇔北海道の一般的な形態である大規模生産・農協を通じた遠隔出荷型とは異なる農業形態

15

16

<グリーン・ツーリズム>

- ・90年代に入ってからグリーン・ツーリズムの概念が確立
 - ・これまで: 直売所やもぎ取り体験といった“点”の体験
- ⇔GT: 広範な農業体験

→“慣行”農業に近い... “普通”の農村でも観光客の受入が可能に

- ・近年では農業者による様々な取り組みがさかんに
- Ex. 加工品の販売やファームレストラン、ファームインなど
- ・グリーン・ツーリズム関連施設数は年々増加



17

一方で...

- ・修学旅行を含む教育旅行を受け入れ、「農業体験と農家民泊を2泊3日等で行う事」=グリーン・ツーリズムというような画一化が指摘されるように

すなわち、

北海道も都府県と同様に日本的グリーン・ツーリズムの枠で発展してきた

※観光農園+(画一化された)農業・農村体験

18

2) ルーラル・ツーリズムと農業(者)の関係性

①グリーン・ツーリズムからルーラル・ツーリズムへ

★景観の再評価とフリーライド、農業者への還元

これまで観光客が農村で消費する“モノ”は、観光農園(もぎ取り・お土産)や(日本的な)グリーン・ツーリズムによる農業体験といった“体験のみ”が目的であった...

⇔近年、農業がそこで営まれることで発揮される“外部効果”に注目が集まるように

19

例えば...

- ・富良野や美瑛のきれいな農村風景は(景観作物を除けば)、農業者が景観のために農作業を行っているのではない...あくまでも自身の営農のために作られた結果としての風景

・従来からそこに住んでいる人(農業者も含む)にとっても当たり前前の景観



20

近年は...

・その**景観に価値がある**と**観光側が認識**し、それを**地域資源**として活かしはじめている

・**観光地・温泉街**ではなく、**北海道の農村の景観**を目的として**設立されるレストラン・カフェ**等が増えてきている

※例えば、美瑛には昨年、東京の洋菓子・レストラン経営の会社であるラ・テール社が、美瑛の景観と地場産小麦を初めとする素材のよさに惹かれてパン、お菓子、レストランのお店である フェルム ラ・テールを出店し、話題となっている

このほか道内各地の“田舎”にオーベルジュ等が出店している

21



23

フェルム・ラテールHPより



HPにおいても農村景観と地場産食材の活用を前面に打ち出している

※フェルム・ラテール:1998年東京で創業、2017年美瑛に出店。素材を活かした洋菓子・パン・レストランの経営、コンサルティング会社。

22



23

すなわち...

観光客が消費する“モノ”が(日本的)グリーン・ツーリズムのような”体験”から”農村そのものを楽しむ”方向への転換
→いわゆる真の意味でのルーラル・ツーリズムへの転換が始まっていると考えられる

・農産物や用意された体験だけではなく、農村独自の景観、雰囲気、文化、さらには生産物などを含むルーラリティ(農村性)を消費するツーリズムへの変化

25



出典:img.4travel.jp

24

一方で課題も...

「景観を活かした地域資源の価値」は、フリーライドが可能

⇔景観を活かした観光業が農村に立地するだけでは**農家の収益にはつながらない**

・地域に人が来ることは観光業を初めとする商業にとってプラスであるが、農業にとっては関係性がない
→むしろ農道の渋滞(作業コストの上昇)、圃場への侵入(病害虫リスク)、など負の影響をもたらすこともある(例えば美瑛町の哲学の木)。

26

これを解消するためには...?

・「商品化された(地域の観光資源化された)景観」から生み出された経済的利益を農業者へ何らかの形で**還元**できるような関係性を築いていく必要がある

28

例えば...

・これまでは地域の飲食店・宿泊施設が必ずしも地域の食材を使っていなかったと言われている

その要因の一端は、観光業によってプロモーションされてきた...

- ・北海道の画一化された食材のイメージ(カニ・トウキビ・メロン)
- ・価格面...だけではない

29

すなわち、北海道におけるこれからの観光と農業の関係性を考えるとき

・大ロット遠隔流通システム下においても成立しうる**地場流通システム**の構築

・観光業による地場産食材の利活用の拡大を支援することで、農業者への**利益還元**の**取り組み**を進める

ことに注目する必要がある と考えられる

31

25

→北海道特有の農産物流通システムである、農協を介した大ロット遠隔流通システムが、必ずしも少量多品種の地場流通に対応出来なかった

※青果物だけでなく小麦や(かつての)牛乳なども

・観光業が流通地場産食材に価値を見だし、利用するようになってきた...景観維持の原資(農業の多面的機能)を支えるという意味で重要

→それを支えるような取り組みが農業側に求められる

30

②事例報告

★本項では①の整理を受け、具体的な事例を紹介

(1)大ロット遠隔流通システム下における地場流通の創出

・大ロット流通が基本であり、地場産食材として活用が難しかった小麦(地粉)を小ロットでも活用できる仕組みを構築

→地元レストランで食材(麺)としての利用を可能としたり、地場産小麦を活かした商品開発を行ったことで画一的なお土産から脱却し、好調な売り上げや知名度の向上につなげた、美深町麦チエン事業

32

(1) 大ロット遠隔流通システム下における地場流通の創出

★北海道美深町の事例

・事例地の概要

美深町は、上川支庁管内の北部中川郡に位置し、稚内市と旭川市を結ぶJR宗谷本線・国道40号のほぼ中央
人口4,727人(2014)

農協は2003年に合併したJA北はるか管内は美深町・音威子府村・下川町・中川町
美深支所管内の主な作物は、酪農(約2,700頭)、畜産(肉牛約6,800頭)、稲作(もち米約200ha)、畑作(小麦約200ha、馬鈴薯、甜菜等)・園芸(かぼちゃ・アスパラ・きぬさや・メロン等)



33

・地場流通を可能にする仕組み

<(当時)地場産小麦流通が難しかった理由>

◆集荷・流通面

通常、小麦は農協から全量ホクレンに出荷されるため、北海道産の小麦は購入できても、美深産の小麦を指定して購入することは、加工・消費者段階では難しい(ホクレンを経由しないと経営安定所得対策等の対象にならない)

◆需要量面

何らかの方法で地場産小麦を入手したとしても、小麦は“小麦のまま”では使用できないため、小麦粉へ製粉する必要があるが、装置産業である製粉会社は、通常20~25tが最低ロットとなっており、小ロット製粉は不可能
→小さな町・地区では消費しきれない量となってしまう

※20t=6掛けで12tの小麦粉。食パン一斤200gとすると6万個の食パン相当。5枚切りで30万食となり、小さな街では消費しきれない量となる。

34

・地場流通を可能にする仕組み

<(当時)地場産小麦流通が難しかった理由>

◆生産面

現在では、秋まき小麦の「ゆめちから」が開発(2012~)され、パン用小麦の生産が大幅に増加したが、それ以前は道産小麦でパン用の強力系小麦と言えば春まき小麦しか存在していなかった

なかでも「はるゆたか」は1987年登録の古い品種であるが、製パン適性があり、全国の実需から要望が強かった(ブランド化していた)

⇔赤カビ病、穂発芽など栽培は難しく、面積は減少していた

35

・地場流通を可能にする仕組み

<対応>

- ・通常、農協がホクレンに出荷した小麦...慣例に従って各実需者(製粉会社)へ割り当て
- ・これまで:産地側も、どの実需者に販売するかを選択することはしてこなかった
- ・産地と実需者の間で双方の合意が得られれば、実需者が産地指定を行う事が可能
- ・今回のケースでは組織の構成員に入っている江別製粉が、産地である美深町(北はるか農協美深支所管内)と協議の上、相対取引を行い、美深町産100%の小麦粉を製粉し、納品する協力関係を構築したことで、産地を指定した小麦粉の確保が可能に

36

◆需要量面

麦チェーン推進協議会に入っている「江別製粉」のプラントを利用することで地場産小麦が利用可能に

江別製粉の小規模プラント“F-ship”は最低ロット1t程度から製粉可能

→製粉後で約500kgとなり、食パンであれば2500個

→小さな町でも消費できる

麦チェーン推進協議会が町内の実需者へサンプルを配布して商品開発を促したことで、一定量の需要を確保

・初期の成果(商品)

商品名	開発年	特徴
美深麺	2009	はるゆたか100%の中華麺。市内7店舗で出食中
美深牛肉まん	2010	生地にはるゆたかを使用、牛肉も町内産
パンプキンクリーミーパスタ	2010	はるゆたかを用いた平麺タイプのパスタと町内産かぼちゃを用いたパスタソース
北はる香かりんとう	2010	はるゆたかと蜂蜜、天然酵母を使用
北はるかラーメン	2011	はるゆたかを用いた乾麺
ピウカポッチャ	2011	観光協会と地元菓子店が主体となって開発。はるゆたかとかぼちゃの「くりゆたか」を使用

37

39

・地場流通を可能にする仕組み

<対応>

◆生産面

春まき小麦を初冬(降雪寸前)に播種する「初冬まき」によって生育期間を安定的に確保する技術の紹介を受け、導入

技術の平準化を行うため、「美深町春まき小麦初冬まき生産組合」を設立、「春小麦初冬まき栽培プロジェクトチーム」を組合・町・普及センター・JAで立ち上げて支援

町単独補助事業で専用播種機を導入

播種・収穫は共同作業とすることで機械の初期投資負担を軽減、技術の平準化を図る

2006年 2戸4ha → 2015年 207ha へ伸張

※ただしリスクは高い 2017年は播種できず。病気等のリスクも大、他品種「はるきらり」の導入を徐々に開始

38

・そのほかの成果

これまで美深町には特徴のあるお土産は(あまり)なかったが、はるゆたかという特産品を用いたそこにしかないお土産を用意できた

→道の駅で販売好調、肉まんは町内6:町外イベント4の比率で売れている

町外でのPRに役立っている

農業者が加工・販売・消費と顔の見える関係を築くことが出来たため、モチベーションの向上につながる

地産地消・高付加価値化・地場産農産物の消費拡大・観光振興に寄与

40



・まとめ

集荷・流通面 (JA)、需要量面 (製粉～加工～一般家庭)、生産面 いずれも地場流通が難しい課題を抱えていたが、麦チェン推進協議会の設立を契機として、それぞれの立場で課題を解決

協議会を通じて町内全体で試作・商品開発・PRに取り組んだことで町民の理解が得られた (需要者確保) ほか、多くの商品開発に成功

生産者も生産した物が道産小麦としてどこかに行くのではなく、地元に戻ってきて自らも食べることが出来、感想を聞くことが出来る
 →町内 (+α) の関係者 (生産者、製粉業者、加工業者、消費者) のモチベーションに。魅力的なお土産物や特産品が出来たことで町外へのPR効果大

・農業体験ガイドの必要性

より農業体験をコンテンツとして広く旅行者に体験してもらおうと考えたとき...

現在のような農業者が旅行者に最初から最後まで着きつきり「もてなし」をするスタイルは、農作業上も精神的にも難しい。

一方、自由に旅行者が農村を移動する形式を推奨すれば、圃場への侵入など、**営農上の不都合**が生じてしまう

このため、今後は、農業者の負担を抑えながら、適切なルート・方法で農村景観・農業体験を楽しむ事のできる「ガイド」が必要になると考えられる

(2) “慣行”農業と観光の新たな関係を支える取り組み

・北海道における一般的な農業は大規模・遠隔流通

GTが浸透して一部農家で農業体験を実施できるようになったとはいえ、多くの農家にとっては手が回らないという問題

→一般的な農業と観光客の求める農業をつなぐ役割が必要に

一部の地方ではすでにこの考え方に近い方式で実施されているケースもあり

例えば、
旭川のまるうんトラベルが実施する「野菜泥棒」
十勝地方の「いただきますカンパニー」の事業

農業者とガイドの間で予め場所・内容を決めておき、利用する際はガイドから農家へ連絡が入り、ガイドの指示の元で参加者が野菜を収穫する。その際、農家は特に対応する必要が無く、後日、利用実績と対価が知られるという形式

→繁忙期やおもてなしが苦手な農家であっても、農業体験（もしくはその素材）を提供することが可能に

45

すなわち

富良野のようなよく知られた農村景観を観光資源として活用するためには、従来の農家と観光の**対立関係**から、農家の負担を抑えつつ、適切な方法で楽しむことが出来るような**協調関係**に発展させていく必要
→登山やアクティビティで実施されているような、秩序を守りつつ、安全に楽しむことの出来る知識を持った**ガイド役**が必要に

また、
民泊は出来ないが農業体験は提供できる農家
素材はあるが体験提供のノウハウがない農家
コンテンツとして農業体験を提供したいホテル
など、地域内でそれぞれ提供できるものに限定がある中、旅行者がどこに依頼すれば良いのか分かりづらいという問題

→**ワンストップ窓口**を設け、そこで一括して調整・組み合わせを行って
旅行社へ提供できるような取り組みが期待されている

47



46

4. まとめ

48

北海道の観光は、自然や食材といった優位性から、道内外客を引きつけてきた

近年では特に外国人来道者が急増し、その消費性向の高さから、その受入が急務となっている

北海道における農業と観光の関係性は、旧来の観光農園でのもぎ取り“体験”からグリーン・ツーリズムの普及とともに“農業体験”への移行、さらに6次産業化の展開による多様な取り組みが展開されてきたが、“点”での展開であることや、本質的な意味でのルーラリティの消費につながっていないことが指摘されてきた

49

一方で観光業が農業生産の多目的機能の一部である景観を再評価し、地域観光資源として活用するような動きが増えてきている

このことは観光業・地域経済にとってプラスであるが、景観を維持している農業者への還元が十分に行われて来なかったという問題点や、農業サイドでも、農協を介した大ロット遠隔流通システムが少量多品種の地場流通に適していなかったことも指摘されている

これらに対する対応策として、農協を中心とした小ロット流通を可能にする流通システム構築の動きがあることや、農業者に過度な負担を強いることなく、適切な方法で農業体験の手助けをするガイドの存在が求められていることを指摘した

50

このように、

北海道における農業と観光の関係性は、無関係(やや対立関係)から、

農業・農村の多面的機能(景観)や地元食材を地域観光資源として再評価する観光業、

それに対応しようとする小規模・地場産流通システムを立ち上げた流通・農業サイドの動き

また観光客対応に向いていない(生産規模が大きく繁忙)一般的な農家と本質的なルーラリティを求める観光客をつなぐガイド役や窓口役が求められる新たな段階へと進展しつつあることが指摘できる

51

- このような仕組みがあれば、繁忙期やおもてなしが苦手な農家であっても、農業体験(もしくはその素材)を提供することが可能となる。
- 北海道においては、日本型グリーン・ツーリズムと並行して、ガイドや体験のワンストップ窓口による調整によって、農業者が旅行者と過度に接触しないタイプのグリーン・ツーリズム、いわばヨーロッパ型のルーラル・ツーリズムに近い形の展開が適しているとも考えられるのでないだろうか。
- 地場産流通の振興による農業と観光業のフリーライドの解消、調整窓口の設置と良質な農業ガイドの育成を行政が適切に支援していくことが必要であろう。

52

(2) 第2報告 宗谷地域における観光の現状と広域連携に向けた課題
杉川 毅 (宗谷シーニックバイウェイ事務局 / 稚内印刷 (株) 代表取締役社長)

ご紹介いただきました宗谷シーニックバイウェイの杉川と申します。本日テーマとして宗谷地域における観光の現状と、広域に向けた連携課題、その必要性ということでお話をさせていただきたいと思います。

シーニックバイウェイ、日本全体では日本風景街道ということで、全国で141のルートがございます。北海道の中では13のルートと二つの候補ルートがございます。宗谷シーニックバイウェイは日本の最北端のエリア、稚内市を中心とした1市5町1村で構成されております。

宗谷シーニックバイウェイの特徴は、各道路にいろんな名前を付けさせていただいておりまして、なかなか浸透はしておりませんが、例えば宗谷ヒストリーロードということで、宗谷の歴史を知れるのはこの道路を走ると分かりますよとか、西海岸側の宗谷サンセットロードは夕日がきれいな道路ですよというように、名前をいろいろ皆さんと一緒に考えて付けさせていただきました。

宗谷の観光の現状ということで、真ん中の写真が宗谷のシンボルであります、利尻富士であります。日本の最北の一番はやはり利尻礼文サロベツ国立公園でありまして、それから非常に特徴的なのがオホーツク海側と、日本海側にラムサールの条約登録湿地があること。また北オホーツク道立自然公園があり、このエリアにはおいしい海産物やお肉だとか、北緯45度から北には非常に特異な植物があります。特に利尻礼文は、世界遺産に匹敵しそうなぐらい、素晴らしい自然がございます。

宗谷の観光の入込数なのですが、平成14(2002)年をピークに右肩にぐっと下がってきまして、平成23(2011)年を底に、最近はちょっと右肩上がりで推移をしています。外国人も平成23(2011)年は7000人泊ぐらいいましたけれども、現在3倍強になります25900人泊ぐらい人が来ています。

内訳は台湾が一番多くて30%ぐらいで、香港、中国、韓国、アメリカと並んでいるところがあります。宗谷の観光も先ほど先生からご説明あったように夏型観光でありまして、やはり6月、7月、8月がピークになっていまして。もう少しこのショルダーシーズンといわれる5月、10月、もしくは冬を伸ばすということが、当地域の観光の課題になっているところでもあります。

それでは入込数のところですね、少し見ていただきたいと思いますが、193万7000人が来てるのですが、稚内ブロックと、利尻礼文ブロックと、南宗谷ブロックと分けると、このような配分になっております。これを道内の入込数だけを見ますと、南宗ブロックがちょっと上がっておりまして、他が少し下がっております。今度道外の入込数を見ますと逆転現象が起きてまして、南宗谷がぐっと落ちまして、稚内と利礼が上がります。宿泊客数も稚内、利尻、礼文が上がっておりまして、南宗谷が下がるような感じになっているのが分かります。外国人も同じ感じで推移をします。このように南宗谷は、道内のお客さまも通過点としてはおられる方が多くな

っていると思うのですが、道外とか宿泊客数の方々は、やはり利尻、礼文、稚内のほうに偏っているというのが現状であります。

この入込数のカウントなのですけれども、実は宗谷独特なものがございまして、ちょっとここでお話をさせていただきます。例えば2泊3日で東京から稚内に入りまして、宿泊を豊富町、それから利尻町、そしてまた東京にお帰りになる場合に、宗谷総合振興局さんのカウントがどうなっているかっていうのを見ていただきたいと思います。まず飛行機で稚内空港の30名のお客さまが降り立ちますので、稚内市に観光入込数は30、日帰り客として30がカウントされます。その後この皆さんがバスに乗って観光して、豊富町に泊まりますので、豊富町の観光入込数が30、宿泊客が30というカウントをされます。2日目ですが、豊富町に泊まられたお客さまが稚内港に行きまして、フェリーで利尻に入ります。利尻のフェリーの入り口は富士町さんですので、利尻富士町さんに30の入込数と、日帰り客が30というカウントをされます。その後島内観光をして利尻町に行きまして、ご宿泊されると観光入込数が30で、宿泊客が30というカウントになります。三日目、お帰りになるのですが、これはカウントがされずにフェリーに乗って、その後飛行機で東京にお帰りになられるということになります。そうするとどうなるかっていうのですが、入込数は120、宿泊が60、日帰り客が60ということで、実際は30名のお客さまですけれども、入込数としてはこのようになります。4倍の数になるわけなのですけれども、移動中お金は当然落としてはいきますが、やはり一番お金を落としていただけるのはこの宿泊客ということになりますから、入込数だけが中心に発表されて増えた、減ったといっていますけれども、実は一番お金を落としているのは、宿泊数のところですので、ここを最重要視しなければならないということになります。ヨーロッパでは入込数というカウントはされておりませんで、宿泊客だけをカウントとして公表されています。

宗谷の観光の広域の課題というか、必要性ということでお話をさせていただきます。稚内を中心にアクセスが集まっておりますので、この稚内を中心に周遊をして、先ほどちょっとご紹介したのと同じです。じゃあどう組み合わせと一緒にやればいいのかっていうことが、やはり課題があります。それからこの宗谷エリアは今まで団体のツアーのお客さまが大変多くて、旅行会社さんが商品を作って運んでいただいたという現実があります。ただ最近はやはりF I T、個人のお客さまが増えてきたというところが特徴的なところでもあります。団体ツアーから個人のお客さまへ変わってきましたし、少子高齢化で日本人の旅行者が増えていかないという現状です。一方で外国人の方が増えている現状があります。

そんな中、広域観光周遊ルートとして、観光庁が平成28(2016)年にこのルートを北ルートとして設定していただきました。こちらの士別・名寄にもお越しになっているかと思いますが、筑波大学の石田先生が実は検討会議の副座長をやられておりまして、いろんな意味で先生から情報を頂きながら、この周遊ルートを取り組んでおります。新千歳空港と旭川空港を軸にした、大きなルートなのですけれども、なかなか広くて、うまく機能してないというのが現実ですが、悩みながら今取り組んでいる最中でありまして。ただ先生に教えていただいたのは、世界に目を向けなさいっていうことでありました。この道北には非常に素晴らしい自然があるので、これを何と

か世界に向けて売るようにしたらいいよっていうことを教えていただきました。

では、世界に向けて何を売ればいいのかとか、どんなおもてなしをすればいいのかっていうことで、悶々とする日々が続くのですけれども、そんな中スイス在住で観光カリスマであります山田桂一郎さんに当地に入っただき、いろいろなところを視察していただき相談を申し上げ、ご講演をいただきました。先生からは量より質の時代が来ているので、それに対応したほうがいいよということでした。それから旅行会社さんがお客様を連れてきていただくのは、地元としては非常に楽なのです。A地点からB地点への接続とか、対応、クレームも含めて、旅行会社さんが全部やっていただきます。ところが個人がどんどん増えていくと、地域の方々、もしくは事業者側が全て直接受けなければいけないという観光にはそういう手間が必要で、逆に手間を掛けなければ利益が出ないよということをお教えいただきました。それからもう一つはやはり世界水準を目指せということと、マーケティングの重要性をお教えいただきました。

そんなことで自然を売りにしたいと話していたところ、ツェルマットに在住されております山田桂一郎さんがぜひスイスにおいでよっていうことで、訪問する機会がありまして、シーニックバイウエイの関係者14名でスイスの視察に行っていました。世界中から観光客を受け入れているスイスのツェルマットなのですけれども、詳しくはちょっと時間がないので省きますけれども、どんな取り組みしているかを少しご紹介します。観光で売り物にするのであれば、やはり自然環境をしっかり守る。このツェルマットの村は5700人ぐらいの村ですけれども、電気自動車しか走っておりません。静かですし、エンジン音がしませんし、当然排気ガスの匂いもしない。それからおもてなしとしては、手ぶら観光です。駅に着きますとすぐホテルの方がお迎えに来ていただいて、荷物預けるとそこからすぐ観光がスタートでき、帰りも同じように駅まで荷物を持ってきていただけるので、帰るぎりぎりまで観光ができます。それから体験観光、自然と遊ぶ、いろんなメニューが用意をされています。これが非常に驚いたのが、滞在ですね。地域の素晴らしい景色のところをゆっくりしてもらおうということをお重要視してまして、山が見えるようなところにはテラスが必ずあって、マッターホルンが見えるところにはテラスやレストランがあり、2、3時間十分に過ごせるということです。

このように北海道にも素晴らしい景色がいっぱいあるのですが、その素晴らしい景色の前に立って写真を撮ってすぐいなくなってしまう。5分、10分もいれば足りてしまうとなると、滞在時間が短か過ぎる。これだけ滞在時間が短くなると宿泊をしませんということで、滞在時間をいかに伸ばすかっていうことが大事なのだということをお聞かせされました。それから景観です。今まで自然景観はたっぷりあるのですけれども、街並みの景観もやはり一緒に考えていかなきゃいけないということです。それから当たり前にある空気とか水とかですね、あと音、静けさですね。大都会の方々が田舎というか、自然豊かなところに来て何を求めるかということ、この静けさってというのは非常に売りになる。音がないってということです。風の音、水の音、そういう音を大事にしたいということです。もう一つは顧客管理だとか、マーケティングを展開する。それをまた守っていくための組織をきちんとしているということで、世界からスイスのツェルマットにはお客さまが来てリピートしております。

その中で私たちが非常に導入できそうだと、真似したいなと思ったのはスイスマobilリティという仕組みでありました。スイスマobilリティっていうのはアクティビティと公共交通機関を組み合わせ、自由に旅をするというスタイルのものなのですが、スイスの観光局が2008年からスタートをさせています。ハイキングをしたり、サイクリングをしたり、マウンテンバイク乗ったり、インラインスケート乗ったり、カヌーに乗ったりとかです。自然の中でたっぷり遊んで移動するということです。経済効果も非常にあって、日本円で270億から450億ぐらいの効果があると測定されているようでありました。そんなことで私たちも導入しようということで、宗谷シーニックで考えていたところ、天塩川のシーニックバイウェイさんでもスイスのほうに視察行かれた方がおりまして、何とか一緒にこの自然をテーマにした観光の提案ができないか。旭川から稚内の間、国道だとか、それから鉄道。それから河川もありますので、これを生かした取り組みできないかということで、いろいろと一緒に今活動しております。後でこのことは次の日置さんからご説明があると思います。このように飛行機とか車とかで、早いモビリティで移動すると気付かないことがいっぱいあります。自転車とか歩くということで改めて発見するものがいっぱいあるのだったということが、分かりました。

1960年代の旅行ブームの時には、新幹線や高速道路が開業して、その観光地のホテルがどんどん大型化をして、ホテルの中で全て終わらせるような囲い込みをしたおかげで、観光客の方が観光地を歩かなくなる。つまりその町の衰退を招きました。登別なんかはまさにその通りだった。1980年代、リゾート開発ブームがありましたけれども、これはすぐバブルが崩壊をして、頓挫をしてしまいます。2003年からビジット・ジャパン・キャンペーン（VCJ）で外国人を呼ぶということで、これは先ほど先生もご説明ありましたけれども、2018年には3000万人を超えておりますので、着実に伸びているところでありますが、これをブームで終わらせないためには、観光地経営っていうのが必要だよということが最近話題になってきています。

それが日本版DMOという組織であります。ディストネーション（目的地）っていうことですが、旅行会社さんに言わせると、これ商品という言い方をします。この商品をいかに売るかというために、マーケティング戦略を立て、それを経営的観点でしっかり守っていく組織を作りなさいということで、観光庁がDMOを推進しています。これは地域で稼げっていうのですけれども、実は今まで旅行会社さんが、北海道ですとか東北とか、欧州も含めてですけど、旅行の商品を作られています。これを出発地で募集を掛けて、団体枠を作りまして、その団体枠を飛行機からバス、ホテルまで全て旅行会社が手配をする。ということは旅行会社がお金もお客も旅先に持ってきてくれていたというのが仕組みになっています。

ところが最近やはり個人の方、外国人の方が、どうやって見つけているかっていうとやはりインターネットで目的地を見つけますし、見つけた目的地に対しては、個人が飛行機、JRだとかホテルも手配ができるような時代になりました。その目的地なのですからけれども、例えば北海道、稚内市っていう検索はほとんど今しませんで、北海道に行きたいなという人が、北海道の例えば「夕日を見たいな」という検索をすると、例えば先ほども紹介しましたように、宗谷の西海岸の夕日が出てくるとします。そして、ここに行こうかという時に、周辺観光のチェックをするわけ

です。稚内に行ったら何があるのかなとか、稚内の周辺に何があるのかなとなるので、当然広域で連携をして情報を載せなければ、お客さまは夕日だけの情報しか取れないと、お客さまが来ていただけるが、お金を稼ぐ旅先にならないということでもあります。量から質の時代が変わったというところで、受け手側も、着地側のほうもどんどん変わっていかなきゃいけないのだろうと思っています。

これは講演でお聞きしたお話なのですが、観光で稼ごうというのが今全国でやられている。じゃあ私たちは何を売るかという時に、例えば地域のお母さんたちの郷土料理1杯750円のを、行政や観光協会の方々が、これが良いからとブランディングして、宣伝費など数百万掛けて売ろうということで展開をします。それを見た方々が、じゃあ出掛けようということで、乗り物を乗り継いでその場所に来て、郷土料理を食べていただいて宿泊をされると、ざっくりの計算ですけど、例えば17500円地域にお金が落ちるとしても、実は域外に出るお金、電車代ですとか新幹線とか、そういうお金が3万円出てしまうと。つまり外に出るお金のほうが大きくて、中に落ちるお金のほうが小さいということになります。さらに宿泊をされないで日帰りされちゃうと、ここから宿泊代金を引かれちゃうと、1500円しか残らないということになります。やはり宿泊をしてもらうためにどうするかっていう仕組みを作っていないと、なかなか観光のお客さま、入込数は上がっても、お金は落ちないっていうのが現実であります。それから宗谷の場合は特にですけれども、移動についても、今までは旅行会社さんの添乗員さんがおられましたし、ガイドさんが付きますので、飛行機からフェリー、フェリーから例えば礼文島に行くのも全部案内をしてくれますけれども、これじゃあ個人のお客さまだったらどうなるかということになります。初めての町を訪問する観光客が、飛行機からバスに乗り継いで、フェリーに乗り継ぐのに、しっかりちゃんと迷わず行けるかっていうことが考えづらい。つまり移動も地域連携をしながら案内をしなければいけない時代になってきたということでもあります。

FITでは訪日外国人が増えたことで、北海道の中にも新たな連携したゾーンがどんどん生まれています。新幹線を軸にして、函館やニセコや小樽と今連携を始めました。それから新千歳空港、空の玄関ですけれども、ここをベースに洞爺、登別が連携をしたり、新千歳から車に乗って、高速道路を通過して十勝に行き、富良野に上がって旭川経由でまた戻ってくるような連携が行われています。道東のほうも釧路、中標津、女満別空港が拠点を張っておりますので、そこが連携をし始めたということになります。じゃあこの道北エリアと宗谷エリアは、今後どう連携していくのがいいのかなということを考えなければいけない時期だと思っています。広域観光地づくりなんですけど、私もいろいろやっております。今日も豊富町の方が来られておりますけれども、多分お互いのことで気持ちが通じないと、なかなか連携ができないなと思うのです。その連携を作るためには、地域の持っている観光課題が何かという議論をしっかり積み重ねていって、共通の、共有のビジョンをしっかり持って目標が定まらないと、連携しようよって口では言うのですが、なかなか連携できないのが、そこなのかなって思っています。たまたま天塩川のシーニックバイウェイさんと宗谷は、このシーニックっていうキーワードで結ばれましたし、スイスモビリティで結びましたので、ビジョンが一緒になったので今連携をしながらやらせていただいでい

ます。地方は人口減少で疲弊が始まっておりまして、稚内も毎年 600 人ぐらいずつ人が減っております。その中で 1 次産業と観光、稚内でいいますと水産業が中心になりますけれど観光は、地域から離れては産業としては生きていけません。流動人口を増やそうとしている観光なのですが、外から来るお客さまの目線で全て考えていく必要がある。これからやはりインバウンドです。外国人を対応していくガイドも一緒に加えていく必要がある。そして周遊性を高めるためには、やはり連携したストーリーを作っていかなければいけない。最後にはやはり、何のために観光やってるかっていうのが非常に大事だと思っております、定住人口を増やすだとか、地方が元気になるために、その観光がちゃんと寄与できるのかっていうことをやらないと、観光業だけの観光ですと、地域は多分持続できないのだろうと思っております。以上でございます。どうもありがとうございました。

道北の地域振興を考える研究会 ～2019～



宗谷シーニックバイウェイ・ルート運営代表者会議
事務局長 杉川毅



宗谷シーニックバイウェイ

全国：141ルート



宗谷地域における観光の現状と広域に向けた課題・必要性



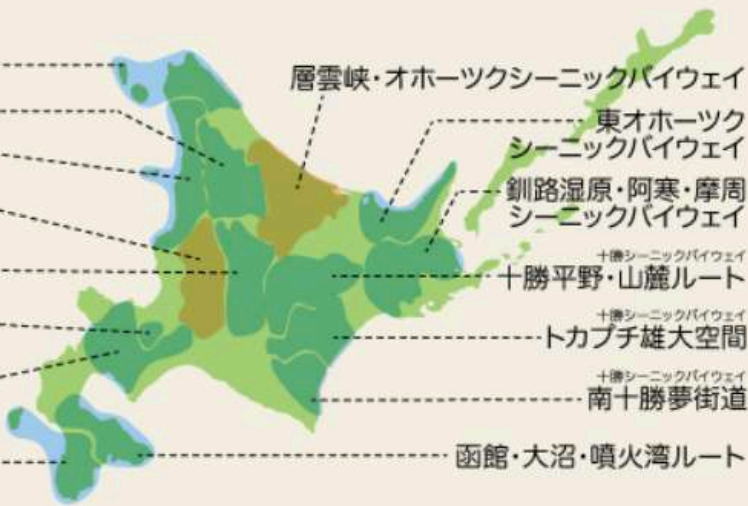
宗谷地域における観光の現状と広域に向けた課題・必要性

宗谷シーニックバイウェイ

北海道：13のルート、2の候補ルート

宗谷シーニックバイウェイ

- 天塩川シーニックバイウェイ
- 萌える天北オロロンルート
- 空知シーニックバイウェイ
—体感未来道—
- 大雪・富良野ルート
- 札幌シーニックバイウェイ
藻岩山麓・定山溪ルート
- 支笏洞爺ニセコルート
- どうなん・追分
シーニックバイウェイルート



- 層雲峡・オホーツクシーニックバイウェイ
- 東オホーツク
シーニックバイウェイ
- 釧路湿原・阿寒・摩周
シーニックバイウェイ
- 十勝シーニックバイウェイ
十勝平野・山麓ルート
- 十勝シーニックバイウェイ
トカプチ雄大空間
- 十勝シーニックバイウェイ
南十勝夢街道
- 函館・大沼・噴火湾ルート



- ・稚内市
- ・豊富町
- ・猿払村
- ・浜頓別町
- ・礼文町
- ・利尻町
- ・利尻富士町
- (1市5町1村)



宗谷地域における観光の現状と広域に向けた課題・必要性

宗谷シーニックバイウェイ

ルートの概要

宗谷の歴史を知る「道」

- ・宗谷発祥の地・間宮林蔵
- ・2つの北海道遺産

関連市町村

- 1 稚内市
- 2 猿払村
- 3 豊富町
- 4 利尻富士町
- 5 利尻町
- 6 礼文町
- 7 浜頓別町





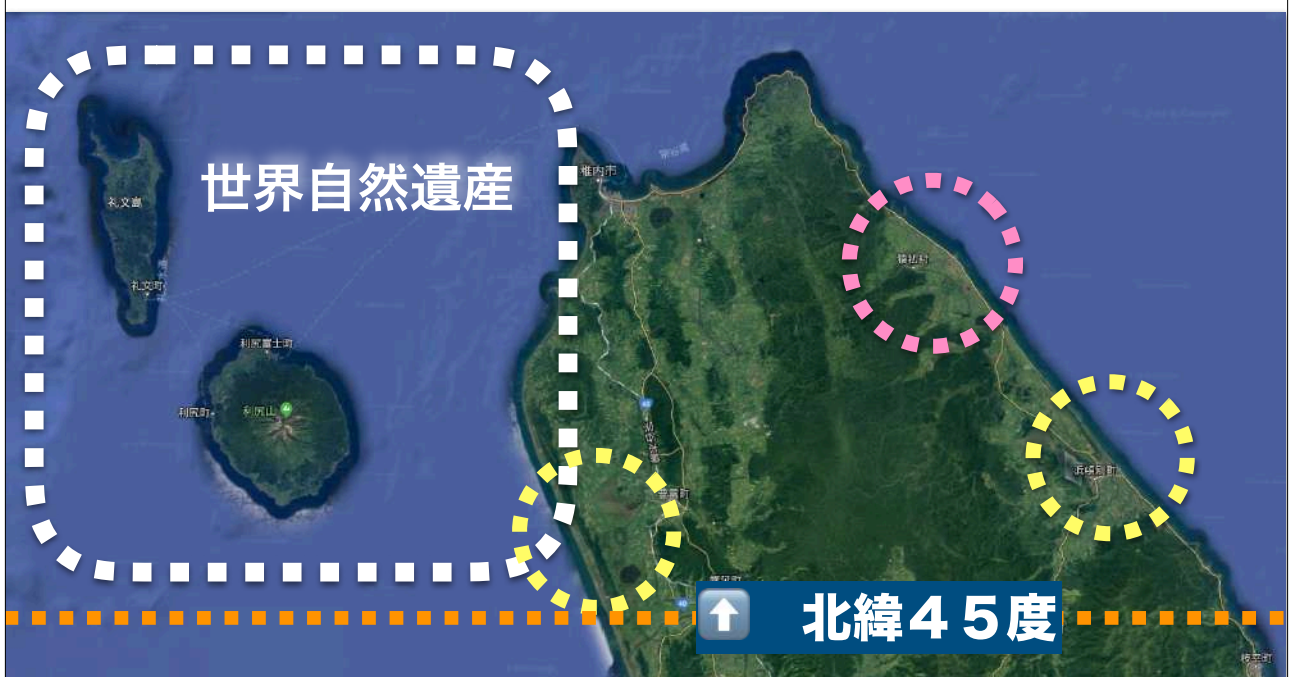
宗谷地域における観光の現状と広域に向けた課題・必要性

宗谷の観光の現状



日本
最北

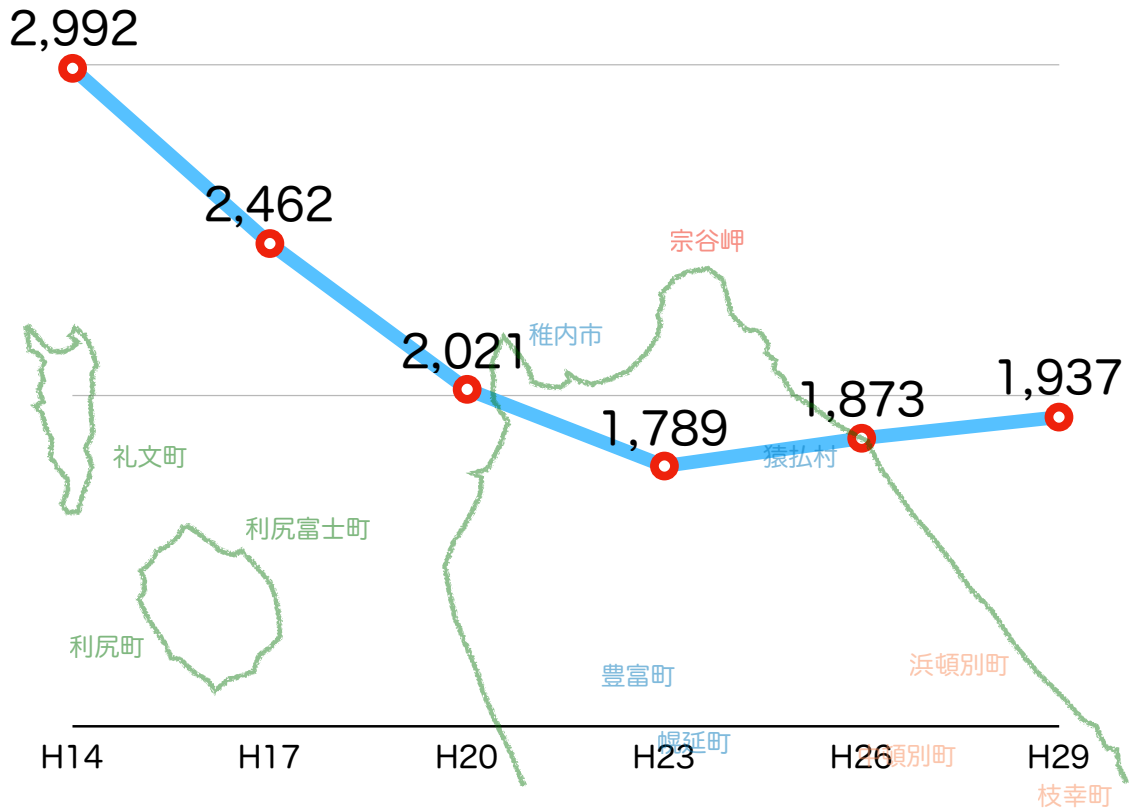
利尻礼文サロベツ国立公園
ラムサール条約登録湿地
北オホーツク道立自然公園



宗谷の観光の現状 【観光客入込数推移】

単位：千人

資料：H29 宗谷総合振興局

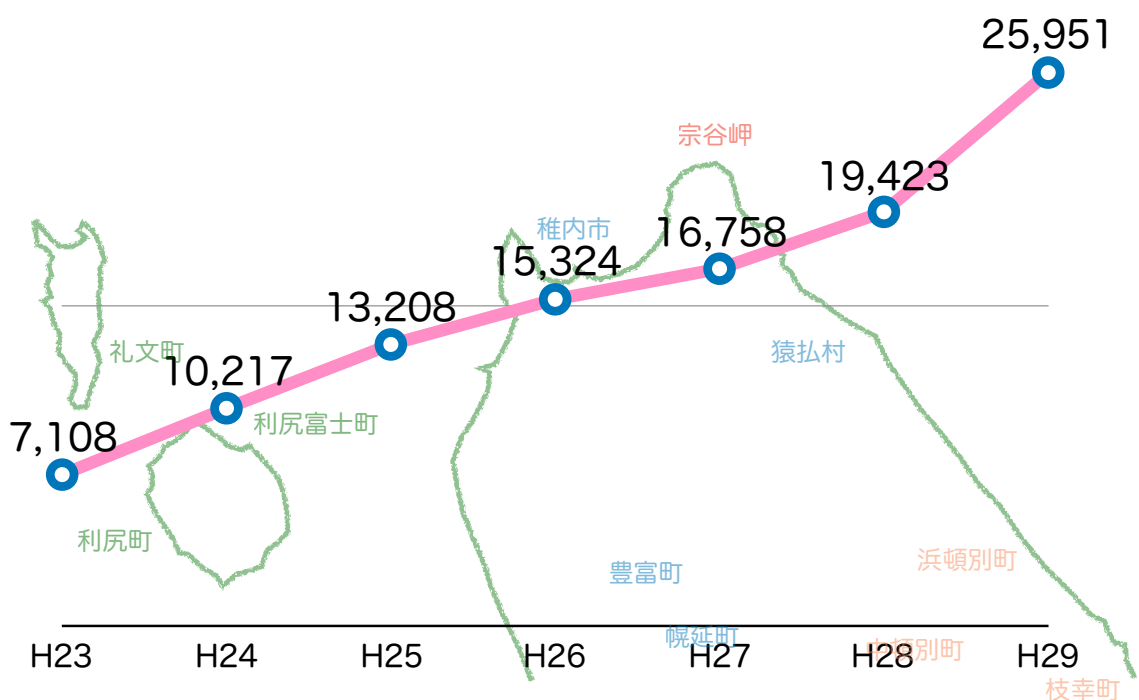


宗谷の観光の現状 【訪日外国人】

単位：人泊

資料：H29 宗谷総合振興局

25,951人泊

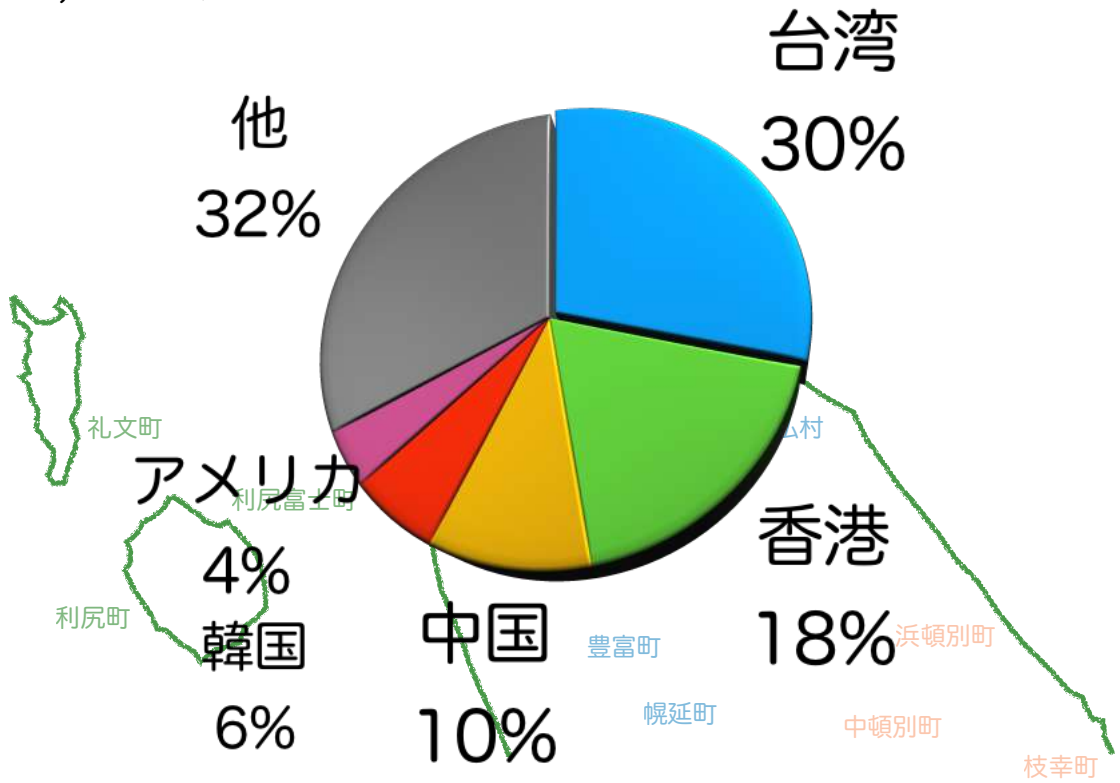


宗谷の観光の現状 【訪日外国人】

単位：%

資料：H29 宗谷総合振興局

25,951人泊

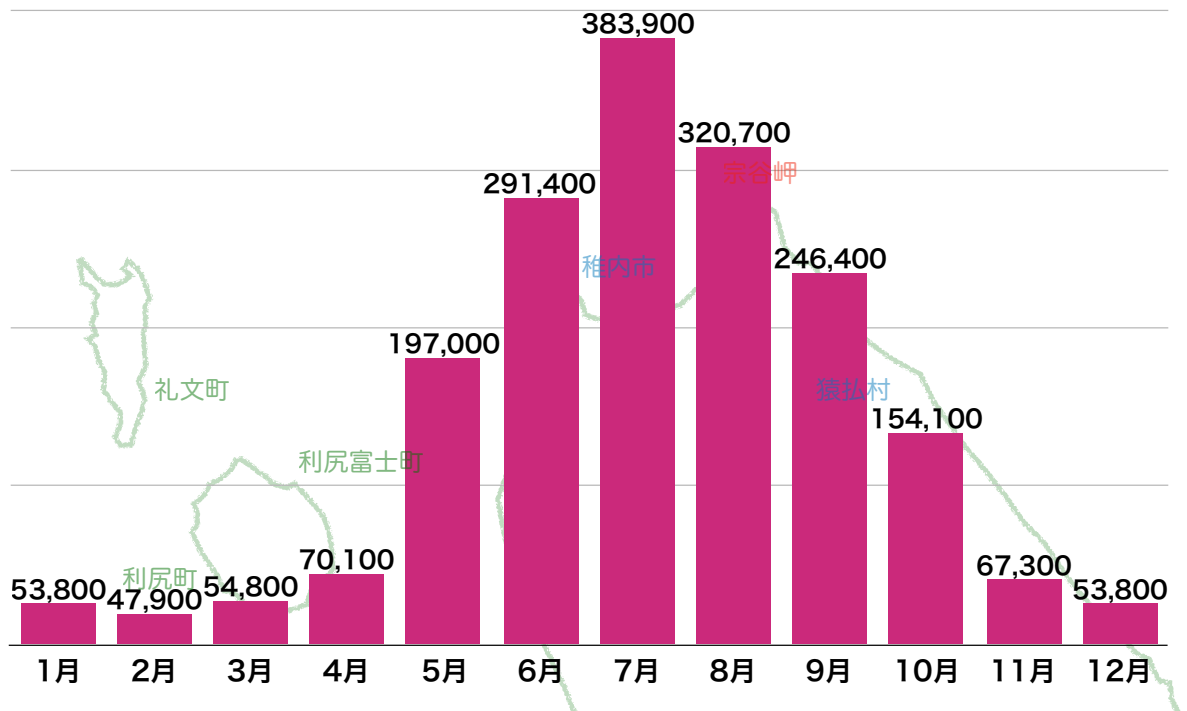


宗谷の観光の現状 【月別変動】

単位：人

資料：H29 宗谷総合振興局

1,937千人 (宗谷全入込数)

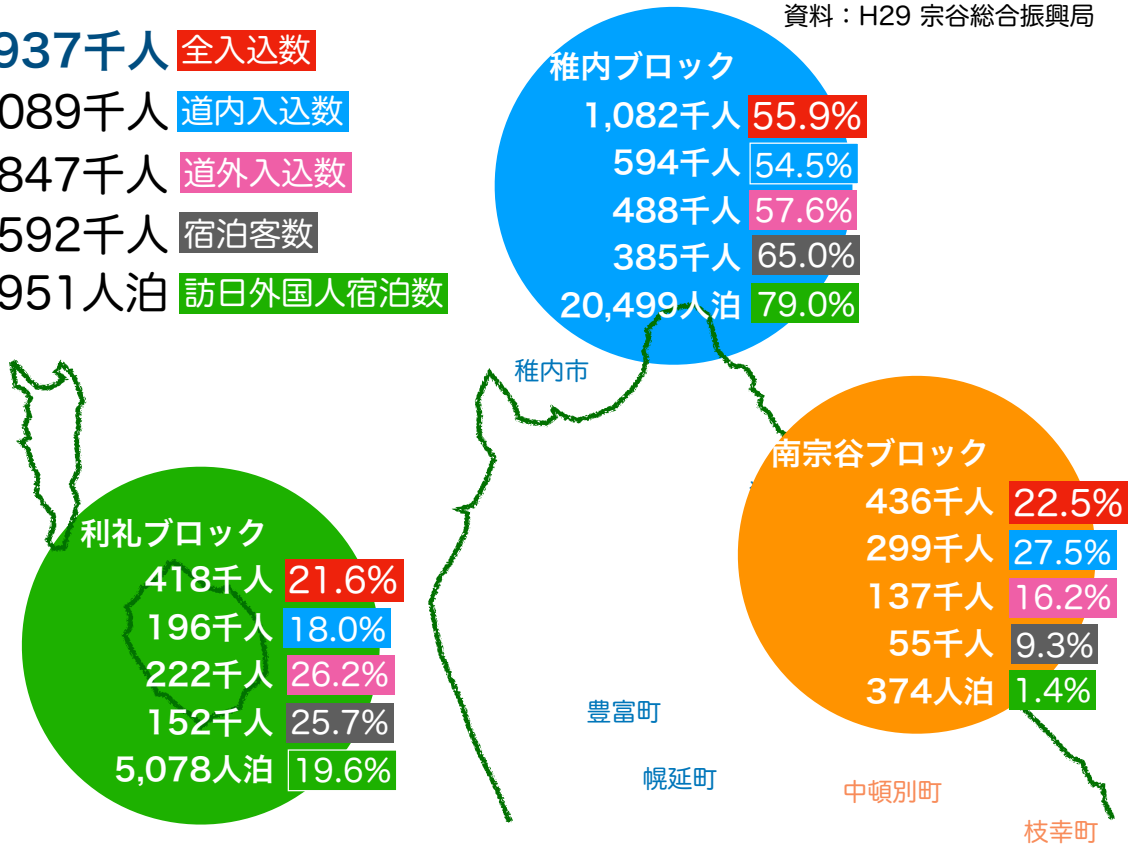


宗谷の観光の現状 【観光客入込数】

単位：千人

資料：H29 宗谷総合振興局

1,937千人 **全入込数**
 1,089千人 **道内入込数**
 847千人 **道外入込数**
 592千人 **宿泊客数**
 25,951人泊 **訪日外国人宿泊数**

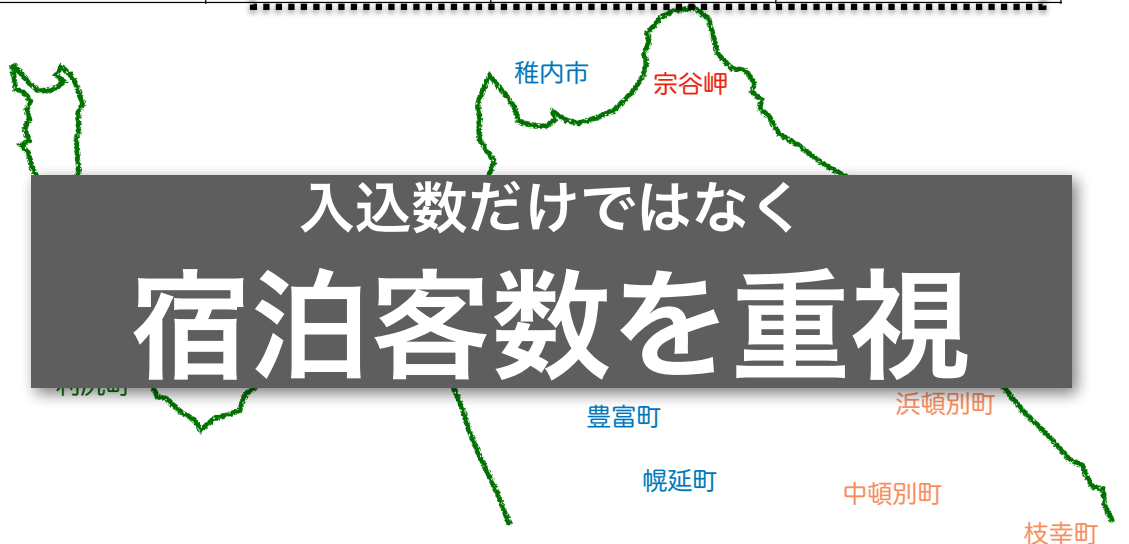


宗谷の観光の現状 【観光客入込数】

単位：千人

資料：H29 宗谷総合振興局

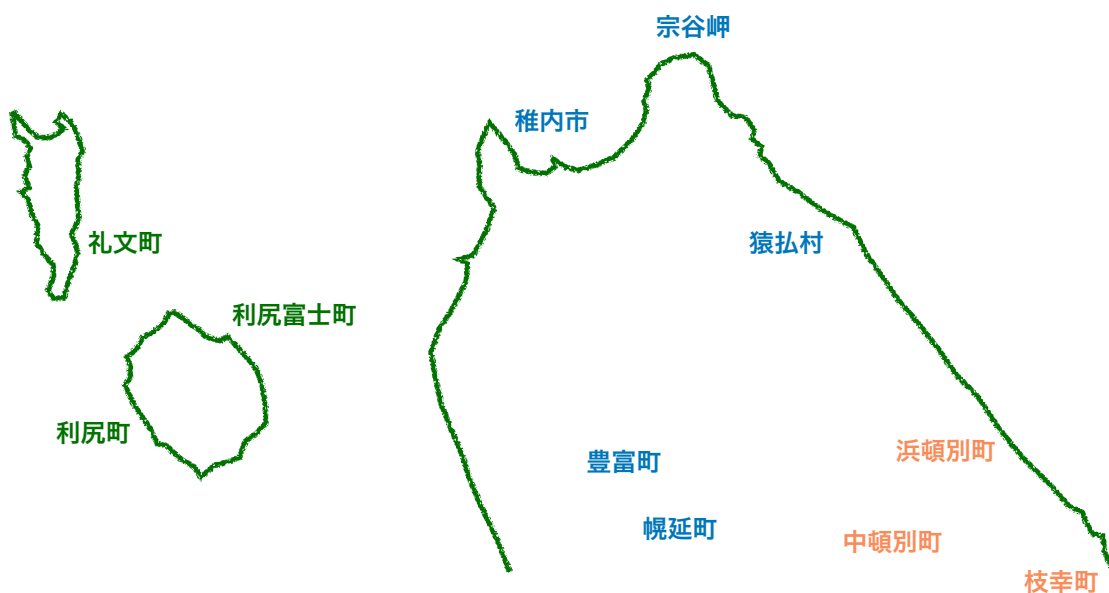
	観光入込数	宿泊客	日帰客
稚内市	30		30
豊富町	30	30	
利尻富士町	30		30
利尻町	30	30	
合計 (延べ数)	120	60	60





宗谷観光

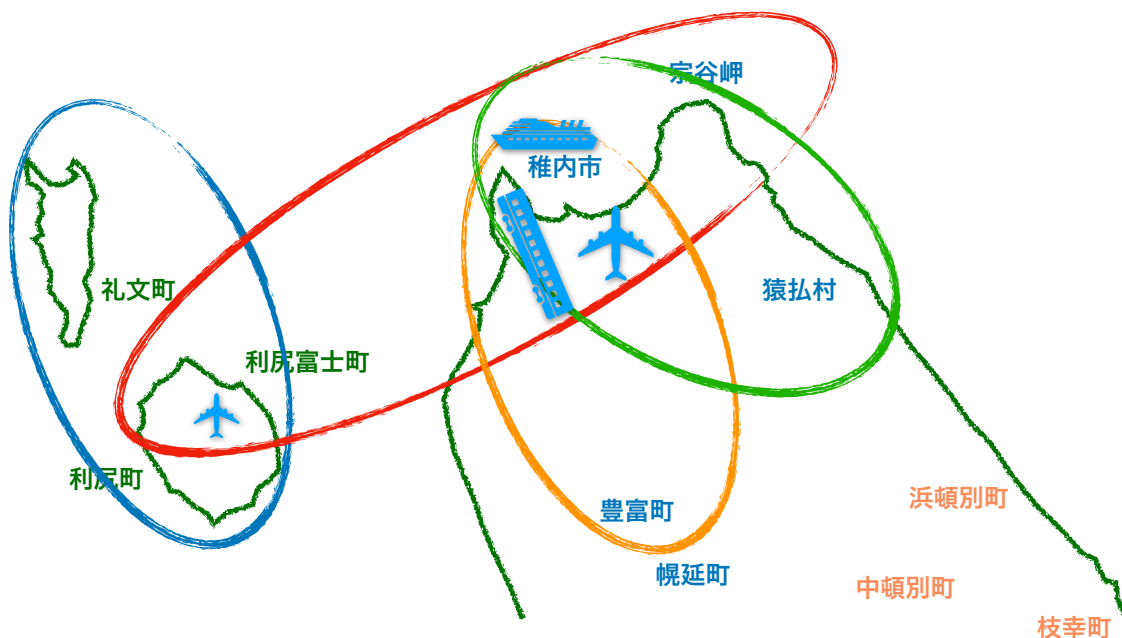
広域の課題・必要性



広域に向けた課題（必要性）

広域の課題・必要性

- ・ 地域内での周遊している観光客





広域に向けた課題（必要性）

宗谷地域における観光の現状と広域に向けた課題・必要性

広域の課題・必要性

- ・ 団体ツアー一型依存度が高い

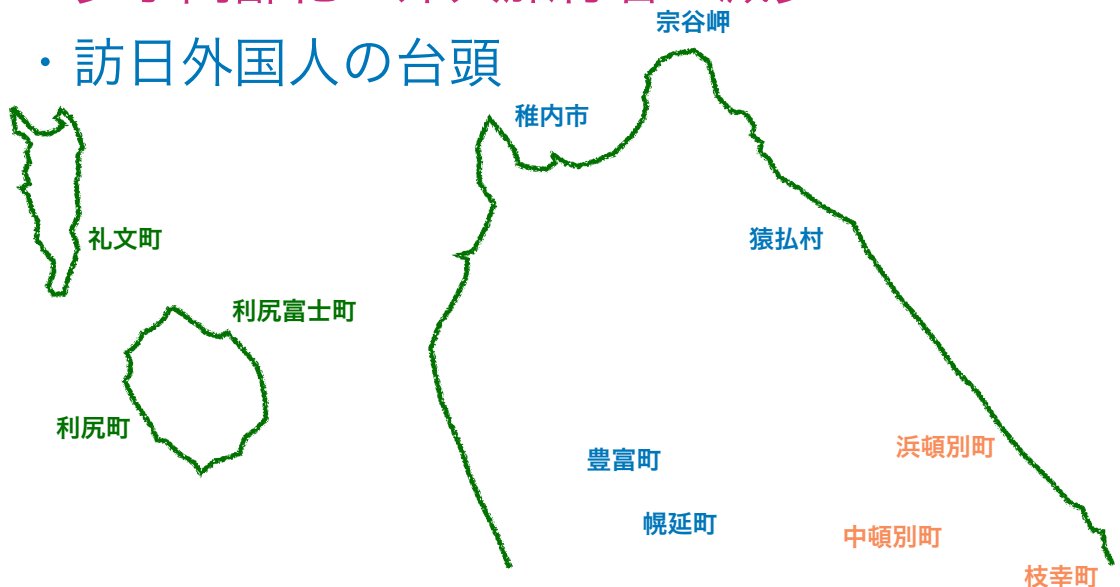


広域に向けた課題（必要性）

宗谷地域における観光の現状と広域に向けた課題・必要性

広域の課題・必要性

- ・ 団体ツアーからFIT（個人）へシフト
- ・ 少子高齢化で邦人旅行者の減少
- ・ 訪日外国人の台頭



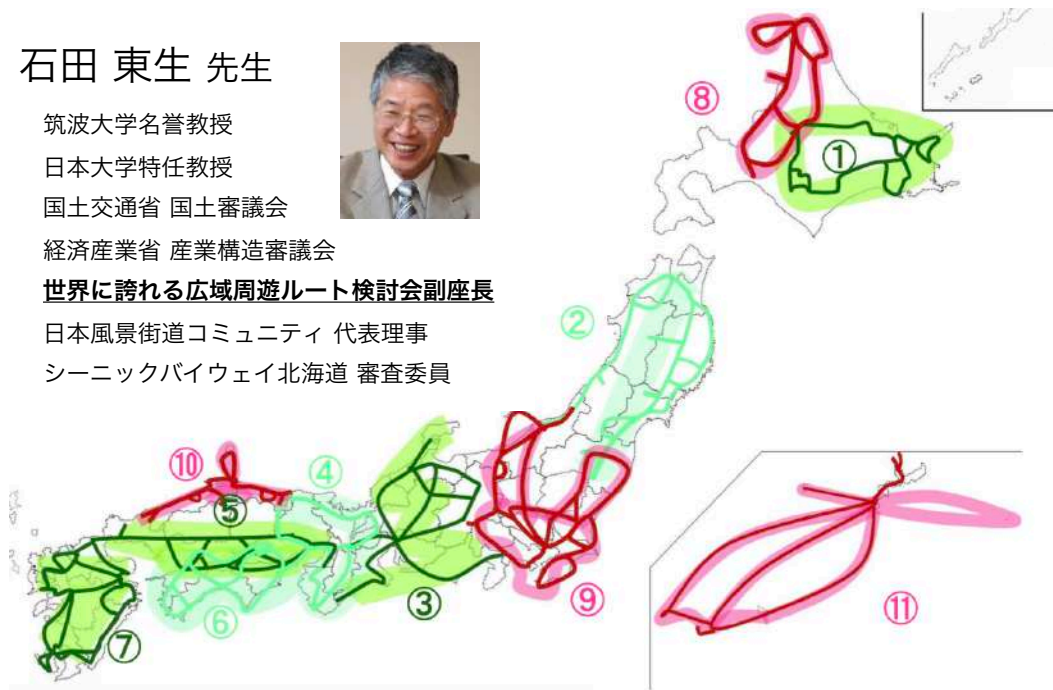


広域に向けた課題（必要性）

広域観光周遊ルート形成事業

石田 東生 先生

筑波大学名誉教授
 日本大学特任教授
 国土交通省 国土審議会
 経済産業省 産業構造審議会
世界に誇れる広域周遊ルート検討会副座長
 日本風景街道コミュニティ 代表理事
 シーニックパイウェイ北海道 審査委員



広域に向けた課題（必要性）



スイス在住・観光カリスマ
山田桂一郎 氏

- ・ 「量より質」の時代
- ・ 観光には手間が必要
- ・ 世界水準を目指せ！

自然を「ウリ」にしている
 スイスへ
 宗谷SBW 14名で視察


マーケティングの重要性





広域に向けた課題（必要性）



世界中から観光客を受入れている  スイス・ツィルマット



広域に向けた課題（必要性）



スイス・モビリティとは？

アクティビティと公共交通を組合せて自由に旅する新たな旅行スタイルのこと。

- 2008年にスイス観光局がスタート。
- 経済効果は年間3～5億フラン（約270億～450億円）
- 韓国や長野でもスイス・モビリティを参考した取組みをスタートしている。

A地点からB地点へ自転車をベースに移動できるのがスイス・モビリティの大きな特徴



スイスモビリティのコース案内サイン



自転車がそのまま持ち込める電車



ハイキング



サイクリング



マウンテンバイク



インラインスケート



カヌー



広域に向けた課題（必要性）

過去の観光ブーム

・1960年代の旅行ブーム

- 1) 新幹線・高速道路の開業
- 2) ホテルなどの大型化と囲い込み
- 3) 観光地を歩かなくなり、街が衰退

・1980年代のリゾート開発ブーム

- 1) 1987年リゾート法施行で大型開発
- 2) バブル崩壊による計画の頓挫

・2003年からのVJCとインバウンド

- 1) 海外プロモーション
- 2) ビザの緩和

※着実に効果を上げ、2018年に3,119万人

ブームで終わらせないためには「観光地経営」が必要



広域に向けた課題（必要性）

DMO

地域で稼ぐ

Destination = 目的地（商品）

Marketing = 商品を売る戦略

Management = 経営・管理

Organization = 組織、機構



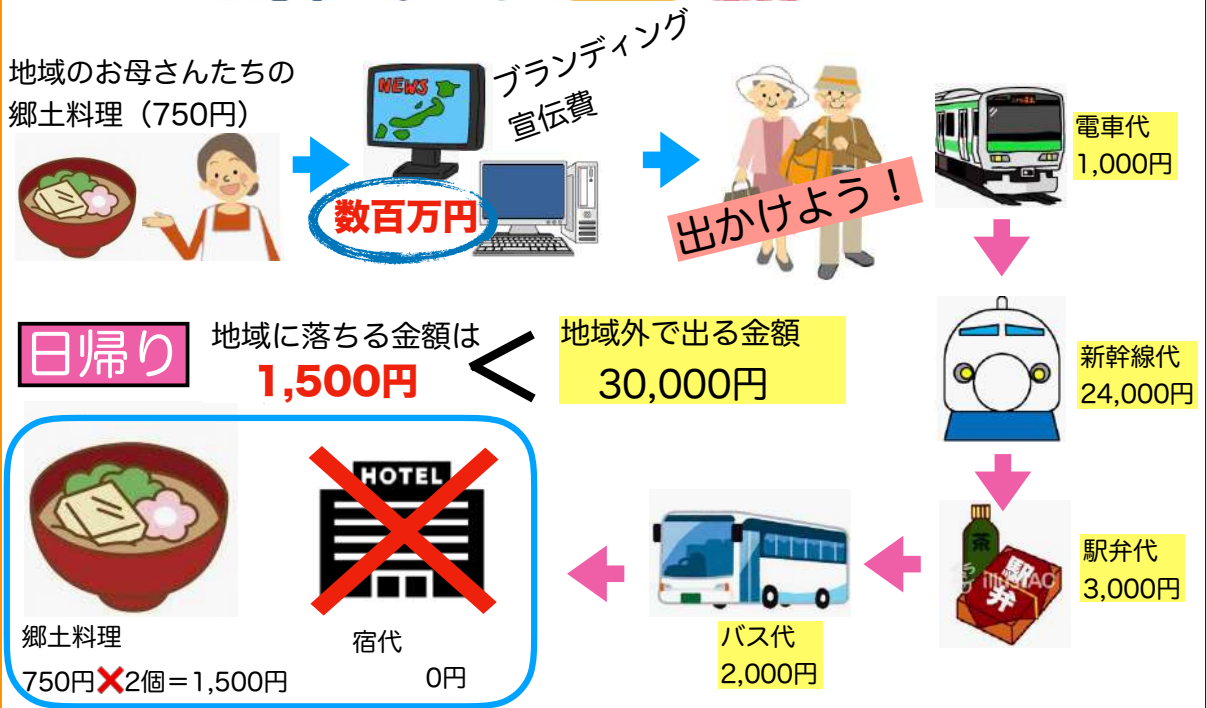
広域に向けた課題（必要性）

宗谷地域における観光の現状と広域に向けた課題・必要性



少子高齢化 人口減少 地方消滅

地方創生 観光で「稼ぐ」



宗谷地域における観光の現状と広域に向けた課題・必要性



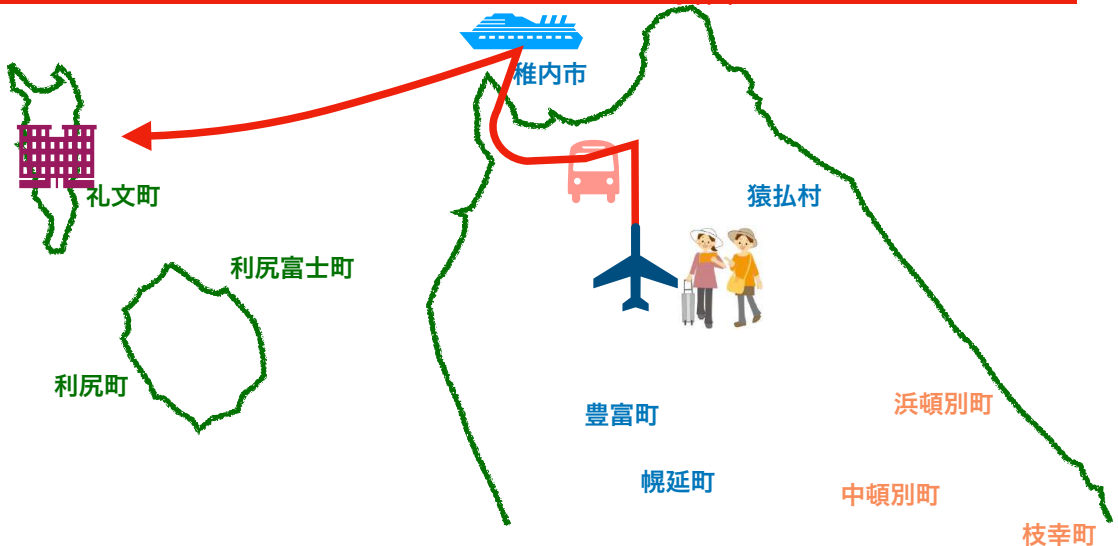
広域に向けた課題（必要性）

はじめての街を訪問する観光客



移動の案内も地域連携が必要

アドボガシー・マーケティング 地域で観光客への支援が重要



広域に向けた課題（必要性）

FIT・訪日外国人が増えたことで北海道のなかに新たな連携した観光ゾーンが出現。

1.新幹線を軸

函館・ニセコ・小樽エリア

2.新千歳空港が軸

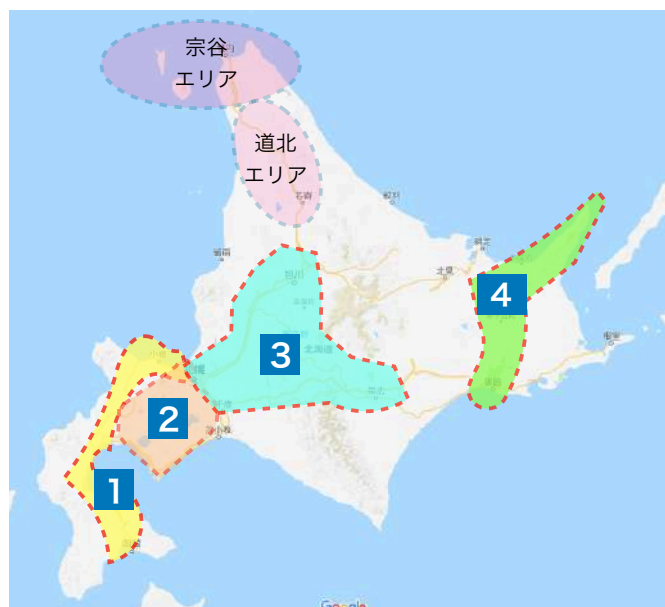
札幌、洞爺・登別エリア

3.新千歳空港と高速道路を軸

新千歳空港→高速道路→
十勝・富良野・旭川→
旭川空港または高速道路→札幌エリア

4.3空港を軸

釧路・中標津・女満別空港が拠点
釧路・阿寒・知床エリア





広域に向けた課題（必要性）

広域観光地づくり

気持ちに通じなければ、連携はできない。



共通の目標達成のための連携組織

天塩川SBW



宗谷SBW



広域に向けた課題（必要性）

地方は人口減少で疲弊がはじまっています

1. 「一次産業」「観光」は地域から離れられない
2. 流動人口を増やす観光は、マーケットイン志向
3. インバウンド対応
4. 周遊性を高めるため周圏と連携したストーリー
5. 定住人口増加・地方創生に寄与

何のために「観光」をやるのか？



ご静聴ありがとうございます。

(2) 第3報告 上川北部地域における観光の広域連携に向けた取り組み 日置 友幸 (中川町観光協会)

中川町観光協会の日置と申します。よろしくお願ひします。今の杉川さんのお話とも連動はしてくるんですけども、中川町といいますか、名寄市ともやりとりをさせていただいて、上川エリア北部で広域的な観光の取り組みを行っているので、それを紹介させていただきます。

先ほど杉川さんのお話の中で、スイスマビリティをモデルにしたということがありましたが、重複するのでここは簡単にいきたいと思うんですが、まず出発地から目的地までの移動そのものを楽しい体験にしておきたいということで、サイクリングですとか、ハイキング、フットバス、それからカヌーといった、移動型の体験観光を中心にお客さんには楽しんでもらうと。で、出発地からいろいろサイクリングしながら旅をするんですけども、目的地に着いた時には荷物がすでに着いていると。そういったことで、手ぶらで体験もできると。そういったことを仕組みとして道北で作っていかうということで、活動を行っております。

こちらでやっていかうというような取り組みにした背景としまして、いくつかあるんですけども、まず観光の変化とか多様性が挙げられます。いろいろお話出ていますけども、箱ものの観光だったり大型バスによる団体旅行。そういったことがどんどん個人旅行、少人数による旅行へ変化してきてると。インターネットなんかでかなり詳しく、個人でいろいろ情報が得られる時代になってきてますので、フォーマット化されたツアーではなく、個人の好みで今旅を選べるような状況になってきております。もう一つは、首都圏の需要ということで、東京、大阪といったところ、北海道でいうと札幌とか旭川で、外国人観光客が爆発的に伸びました。宿泊施設を含めて都市部では飽和状態になっているところへ、地方へ分散させたいという国の施策というか意図があって、ここ数年そういった流れが主流になってきています。あと地域側として、特に道北は中川町に限らずこういったところが多いと思いますが、目玉になるような観光施設がなかった地域にとって、本来元々持っていた自然景観、田園風景、またそういった日常的な暮らし。先ほど先生のお話もありましたけども、田舎の暮らしそのものが観光資源になり始めたというような時代背景があると思います。

スイスマビリティをベースにしたこのエコモビリティということなんですけども、まず移動を楽しむというところ。あと手ぶらでしかも手軽に楽しめる。あと公共交通と組み合わせることで、より遠くへ行けるといったようなことを取り組んでおります。名寄市を中心とした、道北観光連盟という組織がありまして、そこが先ほどお話にありましたが、天塩川シーニックバイウェイというルートづくりを行い、2016年から取り組みを始めております。まずは自分たちの地域にどんなものがあるのか、どういった遊びが提供できるのか。そういう基礎調査をやりつつ、しまなみ海道とか、そういったサイクルツーリズムの先進地に視察に行ったりもしております。で、2年目、3年目としては、交通事業者さんですとか、運送会社さんと意見交換をしながら連携をしてきておりまして、道北におけるメインルートを中心に、受け入れの環境づくりを行ってきておりました。

具体的にどんなことをしてるのかというところで、まず大きく広域的な推進活動と、あと後半には中川町独自で取り組んでいることをご紹介させていただきたいなと思います。まず、広域的な推進活動は、出発地は旭川を想定しまして、ゴールは稚内、宗谷岬。日本最北端、まさに日本唯一の魅力的なコンテンツになりますので、そこをつなぐルート、アクティビティを作っていくということで、連携しながら行っております。

そういった中で、今度は中川町は独自にどういった魅力を発信して立ち寄っていただけるのか、そういう町づくりを目指しております。で、広域的な推進活動の中で一番特徴的というか、メインになってるのは TEPPEN-RIDE というサイクリングイベントの実施です。で、こちらは先ほど言ったように、宗谷岬、日本のでっぺんを目指して自転車だけでツアーを行うサイクリングイベントで、旭川駅をスタートして、3日間のイベントになっております。宗谷岬は当然サイクリスト、ライダーたちの聖地とされてますので、そこを目指すというストーリーも付けて、道北全体の認知度向上を図っていききたいなと思います。また、これまで取り組んできたモビリティ推進事業で、環境整備はちゃんと整ってるか。そういった進捗状況も確認しながら、取り組んでおります。また、道北はサイクリストに限らず観光客があまり多くない地域ではあったんですけども、富良野や美瑛に行かれるようなサイクリストのみなさんにも道北を楽しんでもらうというようなことで、プロモーションを行いながらやっております。

例えば昨年になりますと、9月22日から24日の3日間行いまして、参加者は以下のようになっております。毎日ほぼ100kmずつぐらい走っていくんですが、途中各地域に立ち寄りながら特産品を紹介したり、お昼を食べたりしてもらっています。名寄市がまず1日目の宿になりまして、2日目は名寄を出発して、中川町をゴールと。3日目がいよいよこれ中川町出発して、ゴールの宗谷岬を目指すというようなルートです。

道北の特徴としましては、やっぱり4号線がメインルートになると思うんですけども、途中天塩川ですとかJR、宗谷線と、かなりこの3本のラインが、近寄りながら北上していけるというようなところがすごい魅力かなと思っております。また、中川町以北から宗谷エリアに入りますと、景観がガラッと変わったり、植物の感じ、景色も変わってくる。そういった変化が楽しめるルートかなと思っております。これがイベントの様子の▼写真▲になります。

こういった地域地域に立ち寄った時には、地域の方の関係者、観光協会の方とかが中心になって受け入れをやってもらったりとか、そういった形で連携もしつつ。で、各地のおいしいものを紹介しながら3日間北上していくという内容になっております。広域的な推進活動の一つとして、開発局さん、旭川開発建設部さんと連携をしながら行っております。2016年、開発局によって組織されました、北海道のサイクルツーリズム推進に向けた検討委員会ということで、道内に五つのモデルルートが設定されました。一番上にあります北ルートについては、われわれが取り組んできましたモビリティのメインルートがほぼ採用されてるという状況です。

もう一つ、受け入れ環境の整備ということで、自転車ラックは最近皆さんも目にするようになってきたとは思いますが、割と専門的なロードバイクっていうのは自立のスタンドがありません。サイクリストの皆さんは休憩中はもう地面に寝かせたりとか、建物に立てかけたりとか、

そういったようなことがあったんですけども、このスタンドを各地の道の駅ですとか、要所要所に置くことによって、サイクリストの皆さんに利用をさせていただいております。ほぼほぼ地元の木材を使って、道内ルート上では統一のものを置かせていただいております。また空気入れですとか、パンクの時のチューブ交換なんかにも対応できるような、簡単な工具セットも同様に置いております。

ここで中川町では特にどんなことをやっているのかということで、ちょっとだけ紹介をさせていただきます。まず自転車文化というか、結構専門的なロードバイクなんかにも町民の皆さんが触れられるような環境を作っていこうということで、2016年、17年ですね、国からの地方創生補助金を頂く機会がありまして、これで今30台前後のレンタル用の自転車を整備しております。またこれを活用して、今まで普通にいわゆるママチャリしか乗ったことなかったような人たちにも参加してもらって、町民サイクリングイベント。これを実施しております。年に3回ぐらいやってるんですけども、大体20人から30人ぐらいの参加者が毎回あります。地域の魅力を改めて地元の人にも認識してもらおうというような目的もあります。で、地元の有志というか、元々好きだった人も含めて、中川町サイクリングクラブというのを結成して、今20人前後のメンバーがいるんですけども。お互い自転車に関して勉強などをしながら、町内のそういったサイクリングイベントの時のサポートであったり。また最近では町外のサイクリングイベントなんかでもお声掛けをいただいて、サポートライダーとして活躍するメンバーも出てきております。将来的には自転車で来たお客さんたちの案内を、地元のサイクリストができるような仕組みを作っていければなど思っております。

もう一つ、民間との連携です。まず、宿泊施設のサイクルスタンドを整備させていただいて、お客さんの希望があれば、部屋の中にロードバイクを持ち込んで、一緒に泊まれるというような環境を作っております。割と高価なものが多いですし、これのサービスはかなりサイクリストの方には喜んでいただいております。それとハイヤー事業者との連携をして、台数そんなに多くないんですけども、自転車を車にそのまま積み込んでできるサイクルエリアを、町内のハイヤー事業者が整備をしました。これレンタサイクルなんかも含めて、サイクリングを楽しんでいるお客さんがちょっと遠くに行き過ぎて帰るのがつらいとか、パンクしてしまったりとか、そういった時に駆けつけてくれるようなレスキュー機能を持っています。あと例えば結構すごい峠とか、上るのは大変なんですけども、下りは楽しくて、そういった体験をしていただきたいという時には、坂の上まではこの車で行って、下りだけを楽しむとか、そういった使い方ができるようになっています。

さらに、ここ数年力入れてるのが、砂利道を活用した体験ですね。先ほどのモビリティで行くと、かなり町と町の間が長距離走ることが多いので、どうしてもロードバイクが中心になります。皆さんの地域にも割とあるのかなと思うんですが、中川町の特徴の一つである森林ですね。そういった管理のために引かれた作業道、砂利道がかなり多くの本数、町内走っておりますので、そういったところをマウンテンバイクで体験してもらおうと、そういったようなコースづくりも含めて取り組んでいます。レンタルもありますので、そういったつもりじゃないことで訪れたお客

さんにも、こういった経験がしてもらえるとというのは強みかなと考えています。もう一つ、こういったトレイルライドを体験するにあたっては、こちら側のガイドと一緒に走ってもらうのをお勧めしていきまして、ガイド付きライドで1回3000円と、そういったようなことで、去年の夏からこういった活動を行っています。レンタル料についてはヘルメットなどを含めて4時間1100円という料金設定です。で、先ほどお話しましたが、車両による頂上までの搬送を1回2000円と、そういったような形で打ち出して、普及をさせたいと考えています。町内の町営牧場が昔あったんですけども、そこが今もう使われなくなっています。その作業道を使って、こういったような場所でのロングライドも可能になっております。

あともう1点が冬のサイクリングに力を入れているところです。先ほどお話したマウンテンバイクはスパイクタイヤが付けられますので、冬のサイクリングを参加者の皆さんに楽しんでもらうと。今年も1月末の日曜日に行いました。その時も30人ぐらいの参加者をいただきまして、開催しました。マウンテンバイクが今16台ありまして、元々好きでファットバイクとか、最近増えてるんですけど、そういったものを個人で所有して楽しんでもる方はいらっしゃるんですが、そういったものがない人でも楽しめる、体験をさせてあげられるっていうような中川町の強みかなと思っております。

今後は、TEPPEN-RIDEは引き続き継続していきたいなということで、今年に関しては9月20日から23日までを予定しています。『サイクルスポーツ』っていう雑誌があるんですけども、先日発売された号中に今シーズンの全国のイベントカレンダーっていうのが付いてて、そこにも載ってるのでぜひご覧ください。また運送業者さんと連携をしながら、手ぶらサイクリングができるような、そういったシステムづくりを今後進めていきたいなと思っています。またJRとの組み合わせが手軽に楽しめるような形を作りたいなと思っております。なかなか自転車をそのまま積めるような環境にはちょっと正直ならなそうなんですけども、うちの観光協会としては輪行バッグをそろえまして、それも一緒に貸し出せるような仕組みを作っています。またこれはかなり、ちょっとハードル高いのかなとは思いつつも荷物の即日配送ですとか、レンタサイクルの乗り捨てをできるようなシステムを作りたいと考えています。先ほど、中川町サイクリングクラブの結成についてお話しましたが、町外のサイクリストさんたちの交流も今進んでおりまして、相互に連絡を取り合って、お互いの地域に行って走ったりとか、そういった連携も生まれてきています。今後、どんどん観光協会としては応援していきたいなと思っています。発表以上になります。ありがとうございました。

エコ・モビリティ推進事業

中川町の取り組み



中川町観光協会

①エコ・モビリティとは

①-1 基本チャート

① 登山、ハイキング

登山等が楽しめる観光地に、自動車でアクセスした場合、登頂ルートと下山ルートが同一となり、体験する風景の多様性に欠ける。そこで、自動車でアクセスして登山口から下地点まで自動車を運ぶサービスがあったらいいですね。

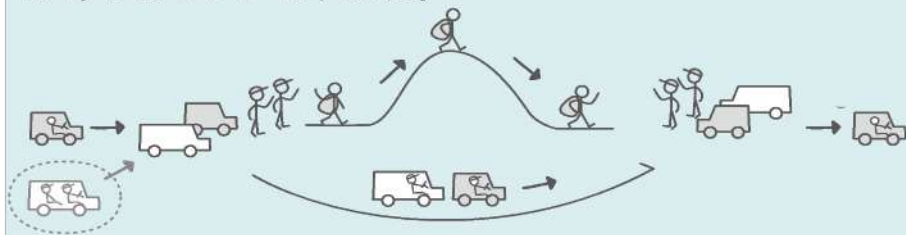


図 登山、ハイキングイメージ

原始的な自然が生きる、きた北海道。

信号が少なく、ストレスフリーな国道と、天塩川。そして

それらと絡み合うように北上するJR。

この地域には、「エコ・モビリティ」が根付く十分な環境があります。

キーワード

- ①移動を楽しむ！
- ②手ぶら・手軽にアクティビティ！
- ③公共交通と組み合わせ！

旅人が、複数の移動手段（モビリティ）を利用しながら地域の資源を「手ぶら」で「快適」に巡る。

新たな観光資源を作るのではなく、その為の環境整備が「エコ・モビリティ事業」の本流です。

② サイクリング、カヌー

自転車やカヌー等、移動自体に観光的要素を持たせる場合、荷物や体験し終わったモビリティ等の輸送が必要となる。そこで、これらを到着地やホテル等へ輸送するサービスがあったらいいですね。

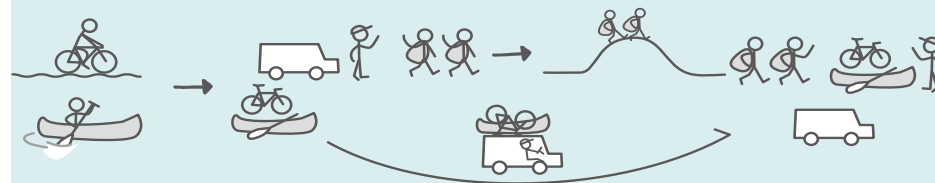


図 サイクリング、カヌーイメージ

①エコ・モビリティとは

キーワード

- ①移動を楽しむ！
- ②手ぶら・手軽にアクティビティ！
- ③公共交通と組み合わせ！

①-2 取り組み始めた背景

事柄	内容
“観光”の変化・多様性	<ul style="list-style-type: none">○<u>箱モノ・大型バス</u>によるフォーマット化された観光メニューから、<u>個人・少人数</u>による自由なメニューへ移行○情報化が進み、個人が目的地や目的を容易に検索できるようになった
“首都圏”の事情	外国人観光客数の爆発的な伸びと、首都圏への一極集中 ⇒地方へ分散させたい、国の意図（政策）
“地域の事情”	○目玉となる観光施設がなかった地域にとって、本来から備わっていた、 <u>自然や田園の景観・日常的な暮らしや体験</u> が観光資源になり始めた

①-3 キーワードについて

移動を楽しむ！	サイクリングやカヌーなど楽しんだ結果、前に進んでいる体験メニュー
手ぶら・手軽にアクティビティ！	宿泊荷物の即日配送や、レンタルの充実が鍵
公共交通と組み合わせ！	経験者・上級者じゃなくても、目的地を遠くに設定できる

②全体ビジョン

きた北海道の新たなツーリズムとして、自転車やカヌー、フットパスなど“人力”による移動と公共交通を組み合わせ、体験型の周遊観光を楽しむ『きた北海道エコ・モビリティ』を推進しています。同時に、移動自体を観光の目的とすることで、二次交通が弱い道北地域においても周遊性を向上させることも図ります。

2015年より着手し、受け入れ環境の整備・プロモーションを行い、地域の知名度向上と交流人口の増加を目指しています。

【過去3年間の取り組み】

事業名	1年目	2年目	3年目
受入環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎調査 ・モデルルートの検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・交通事業者や地域受入施設等の環境整備 	<ul style="list-style-type: none"> ・本格的な受入れ態勢の構築
PR・プロモーション	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージビデオ等の素材収集 	<ul style="list-style-type: none"> ・旅行業者・旅行者等へのPR 	<ul style="list-style-type: none"> ・商品化に向けた旅行会社等へのPR
旅行商品化		<ul style="list-style-type: none"> ・モニターツアーの試行 	<ul style="list-style-type: none"> ・本格的な商品の試行
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・先進地調査 ・検討会（2回） ・勉強会（1回） 	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強会 ・検討会 	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強会 ・検討会

③具体的な活動

モビリティ事業推進にあたって、当会は①「広域的な推進活動」と②「中川町での推進活動」に取り組んでいます。

①「広域的な推進活動」は、この事業で非常に重要な意味をもつ観光資源「国道40号線・天塩川・JR宗谷線」沿線の地域が連携し、旅人がどこを訪れても同様のサービス・利便性を享受できることを目指します。

②「中川町での推進活動」では、同様に環境整備に取り組みながら、中川町独自の魅力・体験を発信していくことで、一日でも長く滞在していただけるマチづくりを目指しています。



④「広域的な推進活動」

④-1「TEPPEN-RIDE」の実施

概 要：きた北海道のオンリーワン資源「宗谷岬」（日本最北＝日本のてっぺん）を目指し自転車だけで走破するイベント。旭川をスタートとし、3日間かけて日本のてっぺんを目指す。

目 的：①サイクリストの聖地「日本最北端・宗谷岬」を目指すオンリーワンのイベントで、きた北海道エリアの認知度向上を図る。

②取り組んできた「エコ・モビリティ事業推進」での環境整備の進捗状況を図る。

⇒各地のスタンド等の整備／手ぶらサイクリングの実証／サポート体制／地域連携

③道北にサイクリストを呼び込むきっかけづくりとして実施する。

④ルート上の立ち寄り先で各地域の特産品を紹介し、エリア全体のPRを行う。

日 程：2018年9月22日（土）～24日（月・祝）

参加者：旭川（1）／札幌（1）／東京（2）／静岡（1）／宮崎（1）



走行ルート / 全行程315km



1日目：93km

JR旭川駅⇒比布（休憩）
⇒剣淵（昼食）⇒名寄（ゴール）



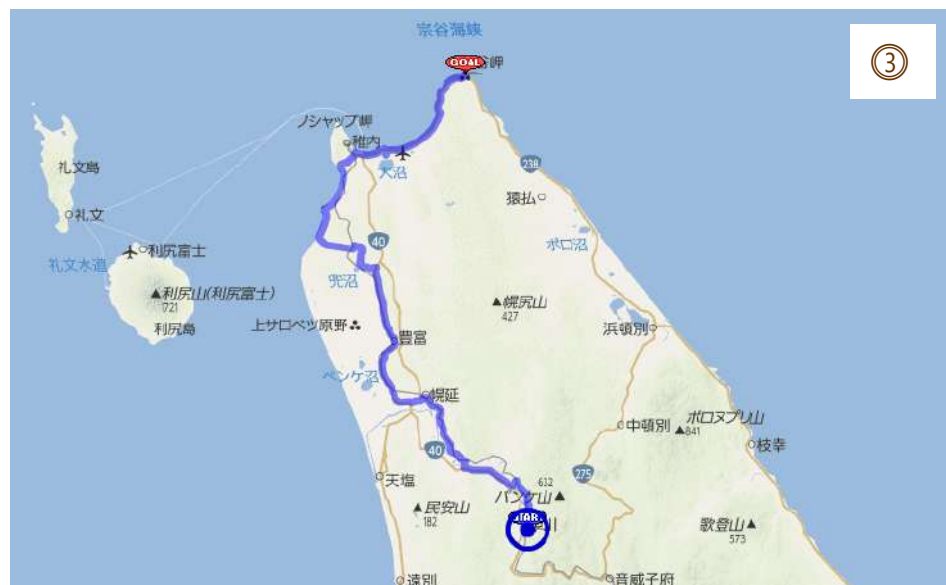
2日目：90km

名寄⇒道の駅びふか（休憩）
⇒音威子府（昼食）⇒中川（ゴール）
⇒サイクルツーリズム検討委員との意見交換会（れすとらんささき）



3日目：132km

中川⇒豊富（昼食）⇒宗谷ふれあい公園（休憩）
⇒宗谷岬（ゴール）
⇒完走記念パーティー（稚内市内）



ツアーの様子

9月22日：JR旭川駅～比布～剣淵～名寄

河川敷のルートを選択し、交通量のストレスを回避。
知られていない国道以外の裏道と、立ち寄り先での
地域の特産品をPR。



最初の休憩は比布の特産品



和寒の絶景サイクリングポイント



スタート直前



塩狩峠での出会い



道の駅なよろの「ソフト大福」

初日のゴール名寄



ランチマップ片手に剣淵で昼食

9月23日：名寄～美深～音威子府～中川

参加者の手荷物を即日配送
 プロのメカニックによるサポート体制
 ローカル駅のガイド～サイクリング以外の地域の魅力



プロのメカニックによるメンテナンス



手荷物即日配送による「手ぶらサイクリング」



美深町観光協会のお出迎え



地域資源「天塩川」ルート



地元サイクリストによる資源解説



地元企業の協力で「仮設トイレ」



「ナカガワグルメ」でおもてなし

9月24日：中川～豊富～稚内～宗谷岬

内陸から日本海側への展開⇒景観の変化・走り応え
シーニックバイウェイ2ルートをもたぐ協力体制

地元スイーツの差し入れ



昼食は豊富で



歌内橋



利尻岳をバックにオロロンラインを疾走

ゴール前の最後の休憩



感動の「日本のてっぺん到達」



完走記念パーティー



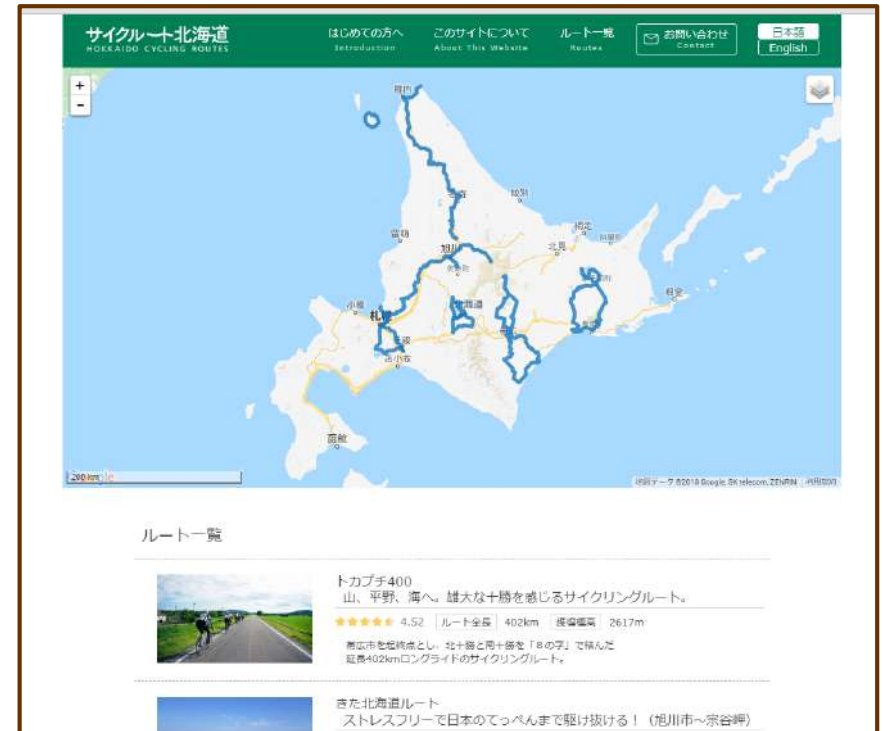
バイクはヤマト運輸が輸送



④「広域的な推進活動」

④-2 北海道開発局との連携

✓サイクルルート北海道：
2016年、局によって組織された
「北海道のサイクルツーリズム推進にむけた検討委員会」
において、道内に5つのモデルルートが設定されました。



この一つ「きた北海道ルート」は、私達が2016年に設定した道北版スイス・モビリティのメインルートが採用されています。このルートに対し、集中的に整備することで、サイクリストが走りたくなる、快適な走行空間づくりが加速しました。



④「広域的な推進活動」

④-3 受け入れ環境の整備

✓自転車ラックの整備：通常、長距離を走る「ロードバイク」には、自立のためのスタンドが付いていない為、サイクリストは休憩時、自転車を施設に立てかけるか、地面に横たえるしかありません。それを解消するため、立寄りスポットに自転車ラックを設置します。



地元産木材で製作した自転車ラック。
現在、エリア内の道の駅10カ所に設置。



ラックの使い方と、空気入れ貸し出し中を示すプレート



✓サイクリストの利便性向上：休憩地点で、タイヤの空気を足したり、簡単な調整ができるよう、空気入れ・工具の貸し出しを行います。

⑤中川町での推進活動

⑤-1 自転車文化の醸成～地域住民が自転車に親しみ、楽しんでいる環境を目指します。

✓レンタル自転車：町民が手軽に体験できる様、スポーツタイプの自転車レンタルを始めました。



ロードバイク6台・クロスバイク8台・マウンテンバイク17台・キッズ用（24インチ）2台を運用。ヘルメットのレンタルはサービス。

✓町民サイクリングイベントの実施：年2～3回、20～30km程度のサイクリングを実施します。買い物などの日常的な自転車ではなく、景色や季節感を楽しめる体験をしてもらいます。



⑤中川町での推進活動

⑤-1 自転車文化の醸成～地域住民が自転車に親しみ、楽しんでいる環境を目指します。

✓中川町サイクリングクラブ（NCC）の結成



町内のサイクリストで構成。イベント時のガイド役や、将来的には、観光客を案内し地域の魅力を伝えていく役割を担います。

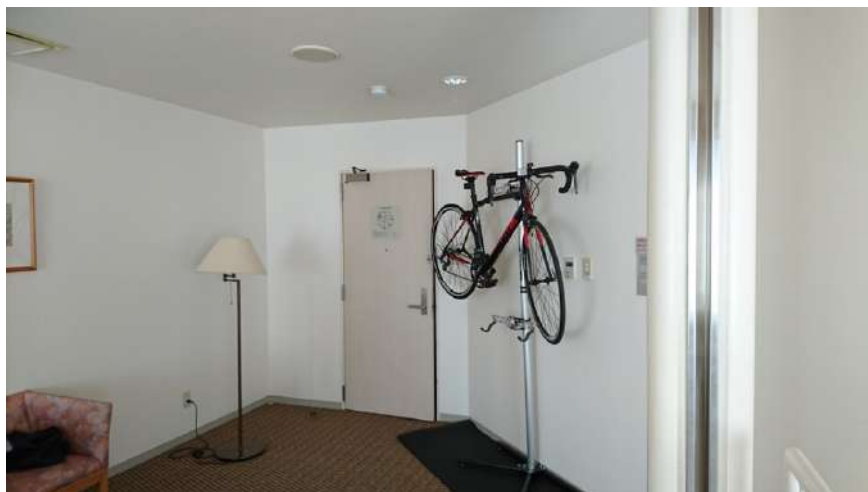
✓講習会の実施：パンク対応や、とっさのメカトラブル時に対応できるように、基礎的な知識を身に付けます。



⑤中川町での推進活動

⑤- 2 環境整備 ~ 官民一体の推進

✓宿泊施設との連携：サイクリングツアーのお客様が、愛車を客室に持ち込めるサービス



ロードバイクは高価なものが多く、サイクリストは施錠できる場所に保管できることを望んでいます。

自転車が2台利用できるスタンド。「ポンピラアクアリズイング」で導入。現在、部屋に常設ではなく、希望者にフロントで貸し出す仕組み。



✓ハイヤー事業者との連携：自転車も一緒に詰める「サイクルハイヤー」

サイクリング中のトラブル時に駆けつけてくれる頼もしいサービス。
遠くまで行きすぎてしまっても安心です。



※画像はイメージです。

⑤中川町での推進活動

⑤- 3 中川町独自の魅力発信

√マウンテンバイクで

「トレイルライド体験」のススメ：中川町では、森林管理の為、しっかりと手入れされた林道が無数に走っています。



距離や高低差を考慮し、利用者のレベルに応じたコースを設定。
中川町で、マウンテンバイクでしか味わえない体験を提案し、
「もう一泊してもらえ」町を目指します。



⑤中川町での推進活動

⑤- 3 中川町独自の魅力発信

■ 「トレイルライド体験」の仕組み

利用する林道は、作業車両が走る場合があるので、予約制です。

コースをよく知っている地元のガイドがご案内します。乗り方のアドバイスや、危険な場所の回避など安全対策はもちろん、地元の人しか知らない、絶景ビューポイントや気持ちの良い森へお連れします。

基本プラン トレイルライド体験	1回3,000円／ガイド料・保険料込み
オプション 車輛による頂上までの搬送	1回2,000円※参考料金・変更になる場合があります。
マウンテンバイクレンタル料	4時間1,100円～ ヘルメット付き ※土日料金／平日は1時間400円～



⑤中川町での推進活動

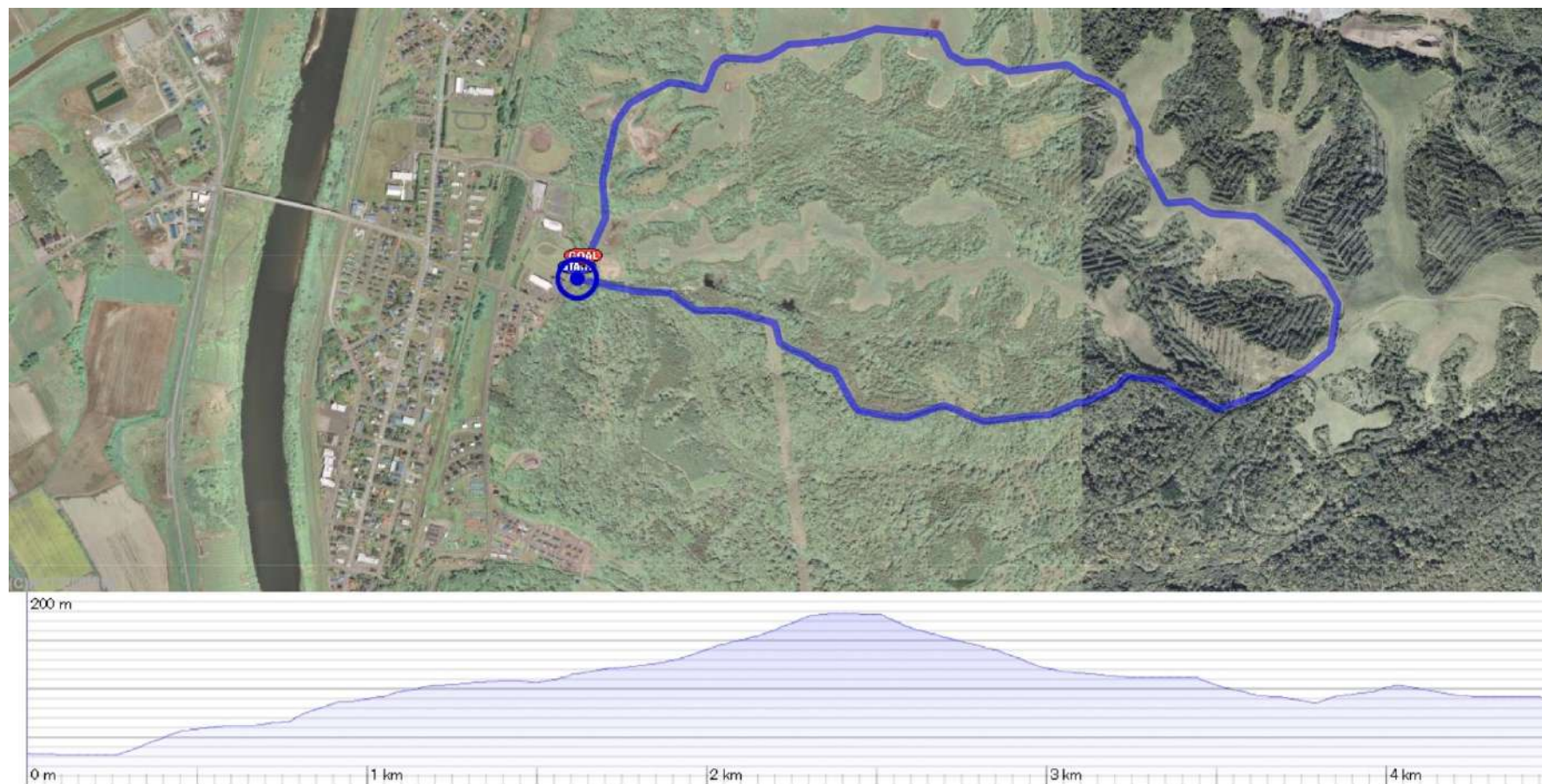
⑤- 3 中川町独自の魅力発信

■ 360° パノラマコース（一例）

全長5.5km、標高差約150mのミドルコース。穏やかな登りで、頑張った後の達成感、頂上からの景色は格別です。

頂上からは一気にダウンヒル！他では味わえない爽快感です。

オプションで、頂上への搬送、道の駅なかがわ特製「スタミナ弁当」もご用意できます。



⑤中川町での推進活動

⑤- 3 中川町独自の魅力発信

✓冬のサイクリングのススメ：雪が積もると、タイヤをスパイクタイヤに履き替えて、雪上サイクリングを楽しめます。

除雪された道路は、北海道では珍しくありませんが、「スパイクタイヤ付き自転車」をレンタルしている地域は、とても希少です。



レンタル自転車を利用することで、手軽に体験できます。首都圏など、雪の降らない地域がメイン・ターゲットとなります。



⑥今後の活動

旭川と稚内を繋ぐメインルートが確立され、その沿線の主要な受け入れ環境は整備されているので、今後はその箇所を増やし、更なるPR・誘客活動を行っていかねばなりません。加えて、地域の差別化を図り、より進んだ環境を整えていく必要があります。そのため、今後は以下の達成を目標に活動を行います。

事業	内容・意義
「TEPPEN-RIDE2019」の運営協力	2019年9月20日（金）～23日（月・祝） ルートを象徴するイベント
手ぶらサイクリング（手荷物即日配送）システムの確立	運送事業者との連携 手荷物預り所（宿泊施設）の設定
町内に複数の自転車レンタル拠点を設置	利用者の利便性を高め、普及を促進させる
輪行旅のススメ	交通事業者との連携 拠点に輪行バッグの整備
広域レンタサイクル・乗り捨てシステムの試行	レンタカー・JRなど複数のモビリティとのミックス 旅行者にとって自由な選択肢～手段・目的地
ロコ（地元）サイクリストによる地元ガイド	地域を越えたサイクリスト同士の交流 （私達のような）観光関係者だけではない人材 の発掘とその人々によるおもてなしの確立

(2) 第4報告 冬季スポーツ拠点化事業と交流人口の拡大について

池田 俊一（名寄市教育委員会教育部スポーツ・合宿推進課 主幹）

ご紹介いただきました、名寄市の教育委員会スポーツ合宿推進課の池田と申します。よろしくお願いたします。今日のタイトルの観光という点では、私だけちょっと異質な感じなタイトルになっておりまして、後からタイトルを聞きまして、私もスポーツツーリズムとか、名寄市のスポーツと観光と、今やっている冬季スポーツ拠点化事業と交流人口の拡大というタイトルにさせていただいております。あと前段言い訳になりますが、資料がつぎはぎ状態で、ちょっと見づらいいと思います、あらかじめご了承ください。

今われわれが進めていますスポーツ施策のこれまでの取り組みと、今後どう進めていくかというのを、観光と地域経済の活性化という視点で今日お話しできたらなと思っていますので、よろしくお願いたします。

では冬季スポーツ拠点化事業とは何かということからお話しします。いま名寄市では地方創生事業で、この大学を使った地方創生と、もう一つはこの冬季スポーツ拠点化事業ということで、2本の大きな柱で進めております。内容につきましては、まず一つが地域の連携を生かして、生涯にわたりスポーツが活躍できる場所づくり。冬季スポーツに限りませんが、アスリートが集まる町ということで、今回のテーマに沿うかもしれないですけども、交流人口の拡大目指しています。もう一つが名寄市立総合病院や名寄市立大学といった機能を生かして、市民の健康と幸せを生み出すスポーツ文化づくりということで、スポーツに慣れしんだ健康な市民が暮らす町を目指しています。

平成28(2016)年度にこのスポーツ合宿推進課という、それまでは生涯学習の1スポーツ振興係というただの係だったんですけども、課として独立しました。平成28(2016)年度より3カ年地方創生の交付金、約5700万円の事業費で進めております。

また、皆さんもご存じのとおり、同年よりリレハンメルオリンピック金メダリストの阿部雅司さんを名寄市特別参与スポーツアドバイザーに就任いただき、アドバイスいただきながら、平成29(2017)年2月、有志によって、なよろスポーツ合宿誘致推進協議会という団体を設立し、当該団体により事業を進めてまいりました。

具体的な事業の主な取り組みということで、まず国内のジュニア育成ということで、国のスポーツ振興センター、北海道、国と連携した、冬季スポーツ中心になりますけれども、ジュニア育成。市内の幼児運動能力向上ということで、写真のとおり幼児に運動をさせる機会、環境の提供。また、先ほど申し上げた市立病院を活用した医学サポートということで、資料は採血の写真ですが、ジュニア育成のデータ取り。更には、子どもたちを教えるためには指導者の育成も必須ということで、年5、6回の指導者を対象の講習会の開催や、多種ジャンルの市内の子どもたちを集めて、ジュニアキャンプも開催。学校とか少年団のほうに、トレーナーの派遣も行い、ボディバランスですとか体幹とか、幼児期からそういう空間能力を付けさせることがやれば将来的にも必要だということで、専門のトレーナーを体育の授業とかに派遣するという活動をしています。

また、大学の結城先生のご協力もいただきながら、地域健康づくりサポートということで、町内会に入って健康づくりのサポートなども行いました。

交流人口の拡大ということでは、新規の大会誘致を展開し、まさに今週の月曜日まで開催していましたJOCのジュニアオリンピックスキー大会も、600人弱の全国のトップクラスのジャンプ、クロカン、バイアスロンの選手が参加いただき、事前合宿といった交流人口の拡大につながっています。

更には、企業、事業所支援ということで、事業の皆さんも健康で企業運営していただきたいということから、企業向け講習会を開催するなど、こういった事業内容をこの3年間進めてまいりました。

中でもちょっと特筆だったのが、ウインタースポーツコンソーシアム事業ということで、全国のトップクラスの中高生クロカン選手を招聘し、市内の自動車学校をコースに設定や商店街閉鎖して商店街を周遊したレース大会を開催しました。これには企業の皆さんの支援いただきながら、コースを設置したなど、インパクトのある事業も平成28(2016)年、29(2017)年度にやらせていただいております。

これら事業に係るKPIにつきましては、まず、第一に今回のテーマに関わるのかもしれませんが、合宿誘致ということを目標としております。平成27(2015)年の基準年で3500人いて、28(2016)年で6020人、29(2017)年8,000と目標を大きく上回る成果を出しております。第二に先ほど申し上げた新規スポーツの大会の誘致・開催も目標としており、こちらのほうも目標を達成しております。

地方創生推進事業につきましては3カ年の今年度で終わる形になります。

この3カ年事業を進めていく中で、やはり新たな課題が見いだせたのと同時に、今後の潜在性・ポテンシャルも感じとることができました。具体的な課題となると、合宿繁忙期になると、競技施設、宿泊施設がキャパオーバーという状況が発生し、競技施設お断りなどの状況があります。また、市民の方から「なぜ冬のスポーツだけ進行しているのか、そもそも何やっているのか」という質問も多く、あまり市民に浸透していないという認識もあります。

しかしながら、地域資源を組み合わせることにより、このスポーツというコンテンツが様々な町づくりに発展できるのではないかなど、先ほどのポテンシャルを感じ取ることができたのも事実です。

そのためには、先ほど申し上げた有志の集まりの協議会だけでは新たな発展はできないということから、いろんな方々が入ってきていただいて、いろんな知見、ノウハウを持ち寄って、スポーツを通じて人を育て、人が集まる町づくりを目標としたスポーツコミッション組織をちょうど来週立ち上げることにしています。

今後の展開につきましては、先ほどの課題を解決しながら、ポテンシャルを具現化できる事業を、この組織を中心にして、さらにこのスポーツ、拠点化事業を発展させていこうというイメージで進めております。このスポーツコミッションのコンセプトとしましては、先ほども申し上げました地域資源を活用し、スポーツを通じて人を育て、人が集まる町づくりを目指すことと

しています。

これまでの、これからの本事業における大きな効果になります、先ほど申し上げた合宿誘致につきましては、大学の先生ともご協力いただきながら経済効果試算しております。平成 29 (2017) 年で 8081 人の方が名寄に合宿していただいております。市内の平均のホテル価格に、大人だと飲んだりすると 2000 円使、大学生、大体 1250 円の消費額が発生すると先生にアドバイスいただきながら、直接的な経済効果、約 6300 万円と試算しております。この額に、北海道開発局が作っている経済波及分析ツールというのがございまして、この金額を入れると 4200 万円の波及効果があるという試算になります。つまり、約 8000 人の合宿者で、地域に 1 億円の経済効果と試算しています。

スポーツコミッションでは今までの事業を踏まえて、今後の事業の内容として 4 つの柱を考えています。まず 1 番目として、スポーツを通じた青少年の育成と人材育成事業。2 番目のスポーツを通じた市民の健康増進、生きがいつくり、障害者スポーツの振興事業。3 番目にスポーツを通じた地域の活性化事業。4 番目にスポーツを通じた広域連携、各種町づくり事業です。

具体的な事業内容につきましては、子どもたちの育成、人材育成につきましては、先ほど申し上げたようにこれまでの継続事業となりますが、専門のトレーナー派遣。それとジュニアの強化、育成と、指導者の育成と、こちらは海外との交流も含めています。また、指導者の確保ということで、やはり学校のほうでも部活動の先生方も業務量が圧迫しているということで、指導者派遣できる仕組みも考えております。2 番目として、健康増進、生きがいにつきましては、これまでも様々な事業を進めておりますが、阿部雅司さんが教えていただいているおじいちゃん、おばあちゃんでもできるノルディックウォーク講習、親子で参加できるスポーツ教室、小年団に加入してない子どもたちにもっとスポーツ体験してもらおうイベントのキッズスポーツ体験。障害者のスポーツイベントでの市民ポッチャ大会の開催や、既存のスポーツ大会やスポーツの健康教室の開催などを計画しております。3 番目にスポーツの経済活性化につきましては、こちらが本日のテーマに近いと思われまして後ほどとします。最後の 4 番目として広域連携。先ほどもお話が挙がっていましたが、観光においても広域連携は絶対必要だと同様に、地域スポーツの世界でも重要であると考えております。広域と各種町づくりということで、広域での情報収集・発信というものはもちろんですが、検討して考えているのが広域の合宿や大会の誘致というのがあります。先ほど申し上げたとおり、やはりピーク時になるとキャパオーバーというような状況があり、名寄のスポーツセンターもやはり市民向けのスポーツセンターで、土日になるといろんな大会が開催されており、合宿となると使えない状況になっています。昨年、台湾のバドミントンチームを誘致した際に、名寄のスポーツセンター使えない状況でしたが、美深の体育館を活用させていただきました。そういった連携しながら交流人口の拡大、合宿の誘致が図られるのではないかなという実証も行っております。また、皆さんもご存じの通りだと思います、スポーツ施設の設置は維持管理機能も含め非常にコストがかかります。これだけ人口が近隣で減っていく中、広域で競技施設の有効活用を行い、ランニングコストを押さえていくような協議を進めていかなきゃいけないんじゃないかなとも考えております。そういったことも考えています。

更にはスポーツ移住ということで、トップアスリートとなるといろんな企業のスポンサーが付いていますが、トップになる前のアスリートは、アルバイトしながら一生懸命頑張ってると思います。特に冬季のスポーツは、夏に仕事され冬はトレーニングを行っている方が多いと。一方で、農家さんは労働者数が激減している状況があり、夏の間そういったことでマッチングできないかと検討しております。これにつきましてはアスリートのニーズ調査をしながら、この地域にマッチできる研究を行いたいと思っております。あとは施設研究。ちょっとこれも後で出るので飛ばしますけども。その他、子どもたちを育成する中でのデータが企業さんに活用できないかなということで、東京のヘルスケア企業とかともお話をさせていただいております。

このような全体的な事業構想の中で、最後に3つほどピックアップして構想している事業をお話させていただきます。

一つは、スポーツ関連商品開発事業です。先ほども小麦の話もありましたけれども、この地域の一番の地域資源は農産物です。こういった農産物を使って、スポーツフード、ヘルスケア商品の開発を目指しています。名寄市はもち米日本一ですが、様々な方から東京マラソンでも北海道マラソンでも、走る前に餅を食べる方が非常に多いと伺っています。カーボローディングといいますが炭水化物を過剰に摂取して、持久力のあるスポーツにエネルギーとして変えていく方法で、トップアスリートも餅を食べるといようなお話も伺っています。このような商品構想を名寄産もち米でコミットできるんじゃないかなと考えております。

次に、今回のテーマである観光とリンクするのではと思っておりますが、合宿の誘致に関しましては国内のみならず、海外からも誘致を行っています。今年度は、先ほどもお話ししましたが台湾のバドミントン協会・選手の方々11名を誘致しております。そのバドミントン協会から波及して、台湾でカーリングってあまりイメージないですが、台湾カーリング協会の方々が見学と合宿を行いたいと、10名の方が6泊で述べ60人泊でお越しいただいております。さらには、今まさに中国のノルディックの複合チームが44名、大人チームが22名、小学生が22名で、小学生は名寄のジャンプ台飛べないので、下川のほうに行ってるんですけども、44名の方が約1カ月間、名寄のこの地域に来ていただいております。今回だけでも、海外の方々1500人泊していただいておりますが、参考ということで、平成29(2017)年度名寄市が公式発表していますインバウンドの数は延べ人数1,090と、抜いちゃってるというような現状もございます。この地域はインバウンド空白地帯と言われ続けていますが、スポーツコンテンツを使って空白を埋められるのではないかと、一つの将来的な可能性のある数字かなと思っております。もちろん、一過性で終わらせないため、波及効果を生む出すためバドミントン協会の方々にも、カーリング協会の方々にも、スキー体験・カーリング体験・天文台を見てもらうとう一般的な観光体験もしていただき、帰って口コミであそこ良かったよっていただければ、また、個人旅行で来ていただけないかなという形で交流事業とも結びつけています。

合宿の受け入れ調査・実証事業ということで、先ほど申し上げましたが、ピーク時のキャパオーバーという状況という課題を解決するため、ジャンプ台の人工降雪機がありますんでこれを有効活用できないかと検討しています。現状では、12月のシーズン直前に使って会場整備している

状況で、もちろん動かすにもお金が必要ですが、11月下旬くらいに駐車場に吹き付けて、クロカンの事前練習場の整備、要は合宿のシーズンをちょっと延長ができないかなということで、管理していただいている名寄振興公社さんと実証事業・研究も行っていきます。

最後にスポーツツーリズム事業ということで、スポーツと観光商品の開発を観光協会等と連携しながら開発していきたいかなと思っております。中身としてはまだまだ研究開発しなきゃいけないのですが、例えばジャンプ台に東京の方々を連れていくと、みんな喜んでいただけます。それも一つの観光の商品なるのではと期待しています。これは阿部雅司さんのアイデアなんですけど、北欧のほうではこうやって冬の間人工降雪機を巨大な扇風機として使用し、選手を空中に吊るして体幹のトレーニングを行っているそうです。例えば観光商品としてジャンプ台に上り、VRをここに付けてこれやれば、疑似ジャンプ体験という発想もしております。さらには、先ほど日置さんからお話もありましたけれども、まさにスポーツとツーリングという広域連携でサイクルツーリズム、例えば合宿者に合宿の一環でロード走ってもらえないかなとか、いろんなことが考えられますが、そういったことも商品開発を連携しながら進めたいなと考えてございます。

今後3年間の目標ということになります。合宿者をこれまでのように急激伸ばすことは難しいのですが、課題の解決・新たな取組等により、今8000人ですので3カ年で2000人増やして1万人ということを目指しています。海外合宿者の受け入れが、目標3年間で1100人増加。子どもたちの育成も目指していますので、子どもたちの全国大会出場。そして先ほど申し上げたスポーツを通じた移住者増加ということで、目標を立てています。

最後は担当している我々スポーツ課の構想となりますが、道立公園・健康の森をスポーツを通じた一大交流拠点として整備できないかと考えています。いろんなことが体験できる拠点として、例えば一つの構想としてノルディックパーク構想でありますけど、射撃場、ローラースキーコース、パラ競技も行える施設がり。その中で子どもたちが遊べる場所もあり、隣接した宿泊施設があつてといった形で、スポーツを通じたスポーツ交流人口、観光客の誘致ができないかなという構想で、こういう夢を僕ら考えております。

ここまでが今冬季スポーツ拠点化事業ということで、我々が進めていることと進めていくこととなります。

最後に情報提供となりますが、名寄でもe-Sportsの協会が立ち上がりました。e-Sportsがスポーツかどうかという議論はさておき、いま世界では経済効果がかなり大きな分野として注目を集めています。こういったe-Sportsという新たなジャンルで今若者たちがこういうふうに動いていますので、こういった方々と連携し、観光になるか、地域経済活性化になると思うんですけども地域を活性化していきたいとも考えております。

とりとめない話になりましたけれども、以上が私の発表になります。ありがとうございます。

冬季スポーツ拠点化事業と交流人口の拡大

冬季スポーツ拠点化推進プロジェクト



2019年3月23日

教育委員会スポーツ・合宿推進課

冬季スポーツ拠点化事業・全体像

冬季スポーツの
アスリートが
集まる街へ

- ・ 冬季ジュニアスポーツ指導者の育成
- ・ 冬季ジュニアアスリートの育成
- ・ 幼少期運動能力向上・底上げ
(教育機関等との連携)
- ・ 冬季スポーツ合宿・大会誘致

※パラスポーツを含む取り組み

地域の連携を活かして、生涯にわたりスポーツで活躍のできる場所づくり



市内病院・大学などの機能を活かして、市民の健康と幸せを生み出す、スポーツ文化づくり

- ・ スポーツによる市民の健康づくり事業
- ・ スポーツによる子育て支援事業
- ・ スポーツによる企業等支援事業
- ・ スポーツイベントによる出会づくり

スポーツに
慣れ親しんだ、
健康な市民が
暮らす街へ



H28～30年度 名寄市まちひとしごと創生事業

地方創生推進交付金実施計画 3年で57,782千円

H29年2月 なよろスポーツ合宿誘致推進協議会設立

主な取り組み 幼少期動能力向上

国内ジュニア育成



日本スポーツ振興センター及び北海道との連携によるジュニア育成事業



スキーをイメージした
幼児運動教室

医学サポート



市立病院によるジュニアアスリートの
医学サポート（採血など）



コーチ養成



国内外からトップコーチ招へいしコーチ
養成プログラム実施

ジュニアキャンプ



競技を超えて、市内ジュニア選手による
トレーニングキャンプ

学校体育・少年団サポート



学校と少年団部活動の両輪で支援



地域健康づくりサポート



市立大学による町内会健康づくり支援

冬季スポーツ大会誘致



JOCジュニアスキー大会

企業・事業所支援



企業等の健康づくり支援

ウィンタースポーツコンソーシアム事業 (H28・H29)



冬季スポーツ拠点化プロジェクト成果指標（地方創生KPI）

	H27 基準年	H28	H29	H30
合宿人数 （目標値）	3, 500	6, 020 （4, 100）	8, 081 （4, 500）	（5, 000）
新規冬季スポーツ 大会誘致	0	2 （1）	3 （2）	（3）
スポーツコミッション での雇用	0	1 （1）	2 （2）	（4）



確かな実績（成果）



新たな課題と更なる発展（ポテンシャル）の可能性の確認

今後の展開

H31年3月 (仮称) なよろスポーツコミッション設立

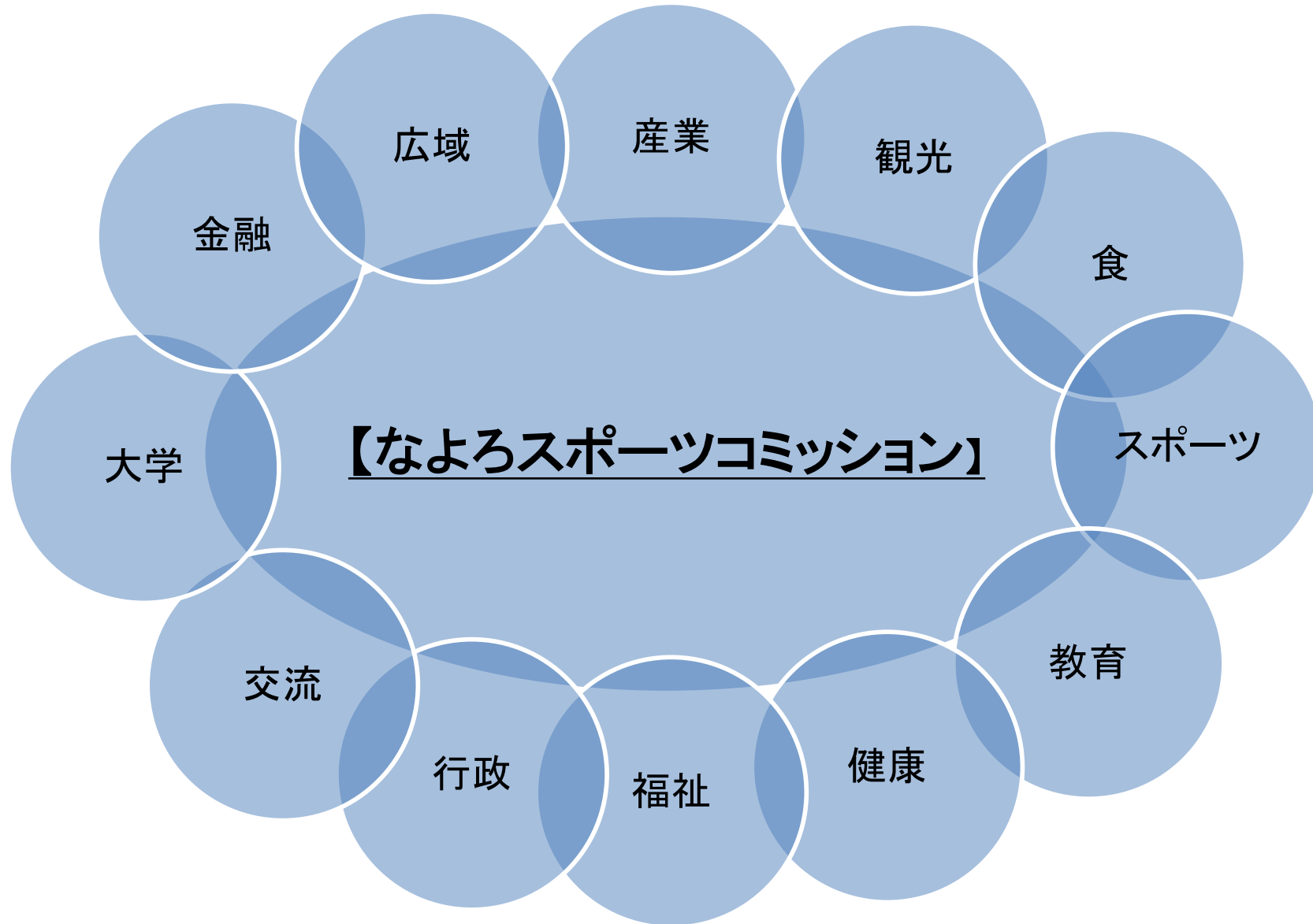
～スポーツを通じた人づくり・まちづくり等を目指した組織へ～

(冬季) スポーツを通じた「人を育て・人が集まるまちづくり」

スポーツ × 地域資源

- 人づくり
- 健康づくり
- 生きがいづくり
- 経済づくり
- 地域づくり
- まちづくり

(仮称) なよろスポーツコミッションの役割 イメージ



冬季スポーツ拠点化による地域づくり推進プロジェクト

1. コンセプト

平成28年度より事業を展開してきた「なよろスポーツ合宿誘致推進協議会」を発展的に解散。新たに様々な分野の団体・企業及び行政など、それぞれの知見・ノウハウを活かし、相互に関与・連携し事業を推進する「なよろスポーツコミッション（仮称）」を設立。名寄市が全国・世界に誇れる雪・自然環境や競技施設と農産物・人材等の地域資源を組み合わせた「4つの柱」となる事業を展開し、人を育て・人が集まるまちづくりを目指します。

参考: 経済効果 (単位: 人泊/千円)	平成28年度					平成29年度				
	宿泊費	食事・消費	小計	波及効果	合計	宿泊費	食事・消費	小計	波及効果	合計
合宿 (H28 6,020人) (H29 8,081人)	29,523	9,713	39,236	27,000	66,236	45,475	17,535	63,010	42,000	105,010
ジュニオリ (H28 443人) (H29 1,945人)	6,293	3,367	9,660	6,000	15,660	12,643	3,890	16,533	10,000	26,533

※スポーツ・合宿推進課による試算

○宿泊費：市内平均価格で算出 ○食事：1泊2食の場合、1,000円/食で算出

○消費額：雑費購入費（大人2,000円、大学生1,250円、高校生1,000円、小中学生800円で算出）

○小計：上記直接消費額

○波及効果：直接消費額に対しての地域への経済波及効果（北海道の経済波及分析ツール（道北圏）を基に算出）

2. 事業内容

①スポーツを通じた青少年人材育成事業

体育事業支援、少年団・部活支援、指導者育成

- 子供たちの運動能力の向上
- 将来を担う人材育成（郷土愛の育成）
- 将来のトップアスリート排出
- 交流機会の拡大 他

②スポーツを通じた市民の健康増進・生きがいづくり・障害者スポーツの振興事業

スポーツ教室・講座・イベント、障害者スポーツ振興

- 運動と触れ合う機会の創出（健康増進、生きがいづくり、幼児運動機会）
- 「住みやすい」「住みたい」まちづくり 他

③スポーツを通じた地域経済活性化事業

合宿大会誘致、スポーツ観光、関連商品開発

- 合宿大会誘致、スポーツ（体験）観光による交流人口（訪問者）の拡大
- 農産物を使用した、スポーツ、健康食の開発、販売 他

④スポーツを通じた広域連携、各種まちづくり事業

広域による合宿大会誘致・情報発信、スポーツ移住誘致

- 近隣市町村の施設を活用した合宿大会誘致及び情報発信
- スポーツ移住の誘致（オフ期の人材不足産業への就業） 他

3. 具体的事業イメージ

①青少年教育・人材育成事業

○専門トレーナーの派遣



子供たちの総合的な運動能力の向上
(学校体育・少年団・部活動等)

○ジュニア選手強化事業



講習会開催・合宿支援等
(少年団・部活動等)

○指導者育成事業



少年団・部活指導者講習会
(少年団指導者、先生等)

○ジュニア交流事業



先進地海外講師・ジュニア交流

○指導者確保事業



地域で子供たちを支える仕組み研究

②健康増進・いきがい・障害者スポーツ

○市民スポーツ
教室・講習会



○親子スポーツ教室



○キッズスポーツ体験



○障害者スポーツイベント



○スポーツ大会



○スポーツ・健康教室



③スポーツ・経済活性化

○合宿・大会誘致



国内・海外合宿誘致

○合宿拡大研究



シーズン延長化研究

○スポーツツーリズム



スポーツ観光商品開発

○関連商品開発



スポーツ・健康食

○地域経済連携



消費額の増加

④広域、各種まちづくり

○情報集約・発信



スポーツ情報発信

○広域合宿大会誘致



各施設広域活用

○スポーツ移住



ニーズ調査・研究

○新施設研究



交流人口拠点

○データ活用・企業連携



データ活用・財源獲得

③スポーツ・経済活性化事業

○スポーツ関連商品開発事業

本市の地域資源である高品質農産物を活用したスポーツ
フード・ヘルスケア商品の開発を行い、販売により地域
経済の活性化に導くため、企業が中心となり、開発段階
で大学と連携し、検討・研究を行う。本会的な製造・販
売の段階では経産省中小企業支援施策を活用し、事業を
展開していく。



○合宿誘致拡大事業 → スポーツインバウンド

国内のみならず海外からの合宿も増加しつつあり、特に
冬季北京オリンピックを見据えたアジア件からの合宿と
して、情報発信・受入を強化することにより、インバウ
ンド経済効果を高めていくことを目指す。



平成30年度

台湾バトミントン協会	11名×4日=44人泊
台湾カーリング協会	10名×6泊=60人泊
中国ノルディックチーム	44名×32泊=1,408人泊
海外チームのスポーツ合宿	1,512人泊

※参考 平成29年度 名寄市外国人観光客入込数
宿泊者数(実人数)712名 延べ宿泊数1,094人泊

バトミントン協会 → スキー体験・カーリング体験、天文台
カーリング協会 → スキー体験・天文台
→ 口コミ期待!?



○インバウンド空白地帯の特効薬となるか!?

○合宿受入調査・実証事業

リピーターを含む合宿者の増加を目指すため、合宿受入の環境向上に向けた調査・実証事業を行う。

- ・ホスピタリティ向上に向けたアンケート調査
- ・人口降雪機を活用し早期合宿受入実証（駐車場を活用したクロカンコースの創設、スキー場の雪をまとめた晩期スキー場運営等の実証 等）



○スポーツツーリズム事業

スポーツを通じ雪等自然環境や競技施設を活用した観光客を誘致するための商品を開発する。スポーツというコンセプトを通すことにより、散在している観光に統一感を創出し、より効果的な観光商品を開発、交流人口の拡大を図ることにより、地域経済の活性化を目指す。

スポーツををコンセプトとし、競技施設や地域資源を活用した観光商品の開発。（例：ジャンプ台体験、ひまわり畑ツーリング、ピヤシリ山ダウンヒル）



冬季スポーツ拠点化プロジェクト成果指標（KPI） 2019-2021年度

合宿受入人数	10,000人(3年で2,000人増) ※経済効果目標 145,962千円
海外合宿受入人数	1,100人(3年で600人増)
冬季スポーツ大会全国出場者数	14人(3年で6人増)
スポーツを通じた移住者数	6人(3年で6人増)



スポーツ基本計画・・・スポーツ基本法(2011(平成23)年公布・施行)に基づき、文部科学大臣が定める計画。第2期は2017(平成29)年度～2021(平成33)年度。

第1期基本計画

第2期基本計画



ポイント1
スポーツの価値を具現化し発信。
 スポーツの枠を超えて異分野と積極的に連携・協働。

～スポーツが変える。未来を創る。Enjoy Sports, Enjoy Life～

1 「する」「みる」「ささえる」
スポーツ参画人口の拡大

スポーツ実施率(週1)
 42% ⇒ **65%**

スポーツをする時間を
 持ちたいと思う中学生
 58% ⇒ **80%**

スポーツに関わる人材の確保・育成

総合型地域スポーツクラブの
 中間支援組織を整備 **47都道府県**

学校施設やオープンスペースの有効活用

大学スポーツアドミニストレーター
 を配置 **100大学**
 など

ポイント2
数値を含む成果指標を第1期計画に
 比べ大幅に増加(8⇒20)。

「人生」が変わる！
 スポーツで
 人生を**健康で生き生きと**
 したものにできる。

「社会」を変える！
共生社会、健康長寿社会の
実現、経済・地域の活性化
 に貢献できる。

「世界」とつながる！
多様性を尊重する世界
持続可能で逆境に強い世界
クリーンでフェアな世界
 に貢献できる。

「未来」を創る！

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会等を好機として、
 スポーツで人々がつながる国民運動を展開し、
 レガシーとして**「一億総スポーツ社会」**を実現する。

3 国際競技力の向上
 オリンピック・パラリンピックにおいて
過去最高の金メダル数を獲得する等
 優秀な成績を収められるよう支援

中長期の強化戦略に基づく支援
 次世代アスリートの発掘・育成
 スポーツ医・科学等による支援
 ハイパフォーマンスセンター等の充実

4 クリーンでフェアな
スポーツの推進
 インテグリティ(誠実性・健全性・高潔性)を高める

コンプライアンスの徹底
 スポーツ団体のガバナンス強化
 ドーピング防止

2 スポーツを通じた
活力があり絆の
強い社会の実現

障害者のスポーツ実施率(週1)
 19% ⇒ **40%**

スポーツを通じた健康増進
 女性の活躍促進

スポーツ市場規模の拡大
 5.5兆円 ⇒ **15兆円** (2025年)

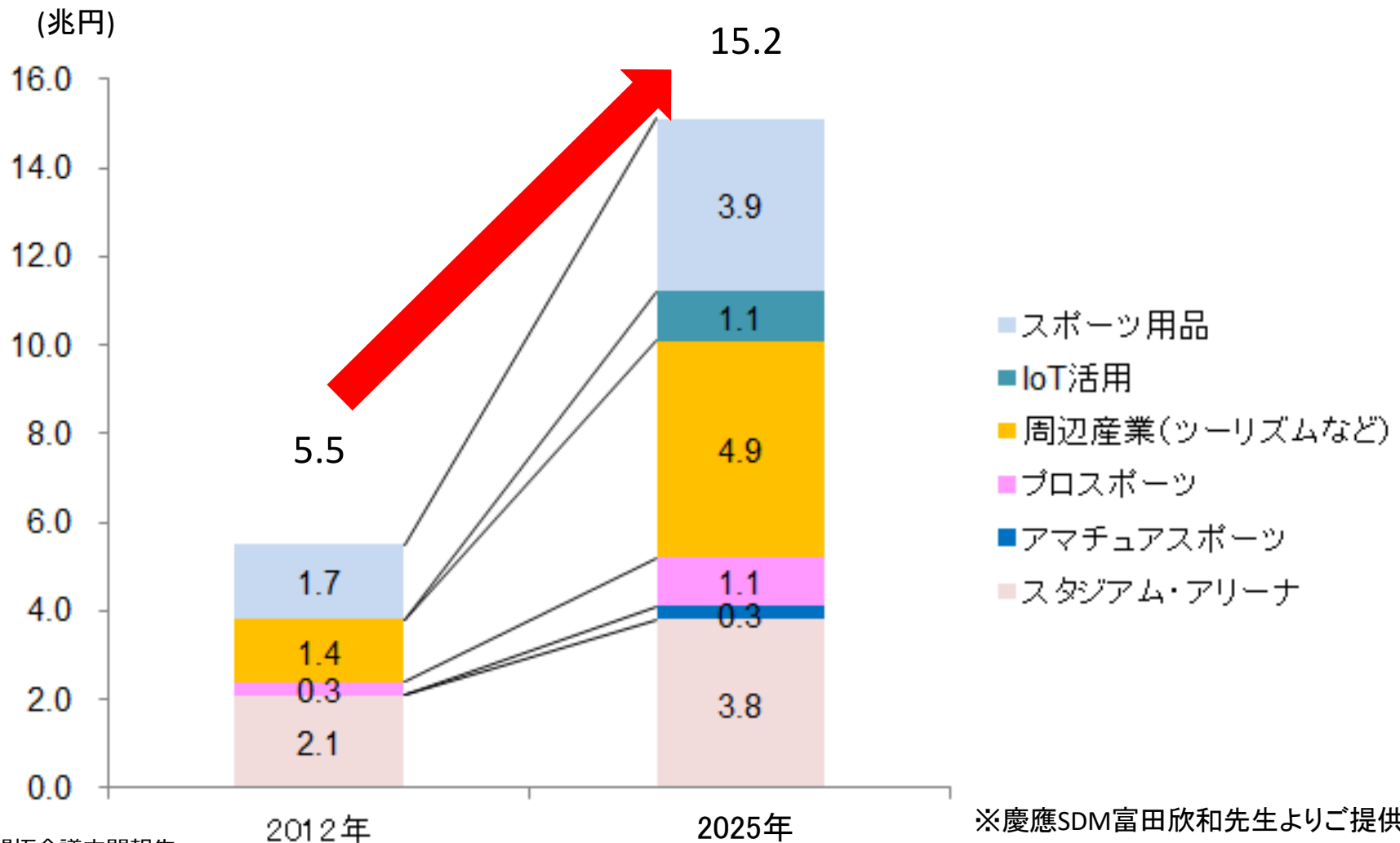
スポーツツーリズムの関連消費額
 2,204億円 ⇒ **3,800億円**

戦略的な国際展開
100か国以上1,000万人以上にスポーツで貢献
 2020年東京大会等の円滑な開催

ポイント3
障害者スポーツの振興やスポーツの
成長産業化など、スポーツ庁創設後
の重点施策を盛り込む。

参考：我が国スポーツ市場規模拡大目標

日本政府・スポーツ庁・経済産業省は、我が国スポーツ市場規模を3倍の**15兆円に拡大する政策目標**を掲げている。



日進ヘルシーゾーンの活用(案)サンピラー温泉・健康の森・サンピラーパーク周辺

ノルディックパーク構想

射撃場

ローラースキーコース

パラ競技

科学サポート施設

キッズパーク

風洞施設

宿泊施設及び体育館に必要な施設

名寄ビヤシリスキー場 スキーレストラン
なよろ温泉サンピラー
名寄市ビヤシリ シャンツェ ノーマルヒル

名寄e-Sports協会



協会情報

正式名称	名寄e-Sports協会
英語表記	Nayoro e-Sports Association
住所	名寄市西13条南4丁目2番地名寄市民文化センターEN-RAYホール管理事務室内
連絡先	090-1525-9716
メールアドレス	nayoro.snowball@gmail.com
設立	2019年2月13日
主な活動	名寄市でのe-Sportsの普及と活性化
代表	宗片 一樹
副代表	山田 和哉
幹事	小山 諒
事務局	中村 拓実

1.eスポーツとは

「eスポーツ(esports)」とは、「エレクトロニック・スポーツ」の略で、広義には、電子機器を用いて行う娯楽、競技、スポーツ全般を指す言葉であり、コンピューターゲーム、ビデオゲームを使った対戦をスポーツ競技として捉える際の名称。市場規模は世界全体で見ると約700億円、オーディエンスは3億3,500万人。2018年で約969億円、そして2022年には約3,300億円まで拡大する見込みとされている。

2.目的

e-Sportsが新たなスポーツとして認められるよう、行政、企業と手を組み、互いに協力関係を築き名寄市にe-Sportsの土壌を定着・育てることを活動目的としています。

3.活動内容

- ・ e -Sportsに関する情報やノウハウの提供、情報・トレンド分析
- ・ イベント、ビジネス、普及活動など、e スポーツ関連事業立案
- ・ e-Sportsの推進を目的とした大会等のイベント運営

4.活動予定

- ・ 本協会が主催するe-Sports大会「Snowball」の主催、運営 (年間数回開催予定)
- ・ 地域e-Sportsコミュニティー形成の為にディスコードサーバー管理
- ・ SNSを通してe-Sportsの最新の情報発信やe-Sportsの正しい情報の発信



名前：宗片 一樹（代表）
IGN：XMHU
年齢：27歳
出身校：名寄高校
職業：音響
好きなジャンル：
MOBA
好きなゲーム
・Vainglory
・League of Legends
特技：シンセサイザー



名前：山田 和哉（副代表）
IGN：kahinayu
年齢：33歳
出身校：名寄光陵高校
職業：運送業
好きなジャンル：FPS
好きなゲーム
・Rainbow Six Siege
特技：自作パソコン



名前：小山 諒
IGN：知らんがな
年齢：29歳
出身校：名寄高校
職業：てんと屋さん
好きなジャンル
・MMORPG
・FPS
・格闘
好きなゲーム
・大乱闘スマッシュブラザーズ
特技：ドラム、ギター



名前：中村 拓実
IGN：sakamoto
年齢：27歳
出身校：名寄産業高校
職業：運送業
好きなジャンル：
FPS,MOBA
好きなゲーム
・Overwatch
・League of Legends
特技：プログラミング

(5) 総合討論

司会 清水池 義治

ではそれでは、今からおおむね1時間程度で総合討論を行います。フロアの皆さんとも、意見交換できればと考えております。最初にお話しするべきでしたが、今回のセミナーを企画するにあたっての問題意識として、人口減少の中で地域の資源を生かし、交流人口、あるいは経済活動の活性化ということが言われています。特に、これは北海道など1次産業を中心とする地域では、1次産業と観光との連携が重要と指摘されています。1次産業と観光とを連動させる形で、産業の振興ということが求められてるということかなと思います。しかし、観光面で言いますと、4人それぞれの方おっしゃっていたように、従来、観光は今までは画一的であり、マストツーリズムと言われ、団体旅行という形態が多かったと言えます。北海道の観光でも、コンテンツはかなり画一的でしたが、最近、インバウンドを含む個人旅行という形で、観光需要の性格が非常に多様化してきています。また、地域の側も、従来型の観光ですと、農業の面でもそうですけど、特定の人に観光の利益が限られてしまうという問題があります。観光振興を通じて、そのビジネスの成果を地域でどうやって共有していくか、還元していくかがポイントになると思います。

その中で、今回のセミナーのキーワードは、広域連携です。この研究会自体が道北地域の広域連携の促進を目的としているといっても過言でもないんですが、そういった流れもありまして、広域連携しながらどう観光振興を進めていくかということが、今日のセミナーの重要なポイントと考えています。

今野さんからは北海道観光の全体的なお話と、あと農業と観光をいかに有機的に連携させていくかについてお話しいただきました。杉川さんからは、宗谷地域を事例としまして、滞在型観光、滞在期間の延長と、そして広域的に観光を展開する上での枠組みでと課題をお話しいただきました。つづいて、日置さんからはエコモビリティ事業、主にサイクリングを軸とした広域観光をご紹介いただきました。最後に、池田さんからは冬季スポーツというコンテンツを軸に、内容的にはツーリズムにとどまらず、まさにツーリズムと地域づくりをどうやって結びつけるか、これも観光を地域で展開していく上では非常に重要な視角になると思いますけども、そういったことも含めてお話をいただきました。まず、会場の皆さんのご意見を伺う前に、今日お話しいただきました4人の方に、他の方の報告を聞いての感想、あるいはこういったところを自分のこれからの取り組みに生かせるといったコメントがあれば簡単にお話してください。今野さんからお願いします。

今野 聖士

私が聞いて思いましたのは、自然を生かしたいとか、生かせるっていう共通点はどの地域も共通でした。ただ単純に自然を生かしたいといってしまうと、北海道だけではなく日本全体になってしまいますので、北海道の道北、北海道北部という意味で、分かりやすく首都圏なりインバウンドの方に、こういった魅力がありますよと、もっとわれわれが伝えていく必要があると思います。農業の景観に

関する話をしましたけども、それと同じく、「自然が豊かだよ」と単にいうだけではなくて、どうしたら自然が豊かである事を都市住民に伝えられるのかということを考えていかなければいけないんだなということを感じとして思いました。また自転車を通じて広域連携の取り組みが始まりつつあるとお話がありましたが、これは農村とか農業観光にしても同じことで、特定の地域に限定してしまうと、忙しい時期も重なりますのでこの時期はまったく受け入れできないという問題が生じます。だからこそ修学旅行を対象にしてきたという理由もあったのですが、本質的に言えば、名寄でできない時は例えば中川でできますよ、中川でできない時は宗谷でできますよとか広域での受入が必要だと思います。特に酪農家でしたら、季節をあまり問わないという利点もあるでしょうから、そういった意味でよりコンテンツを広く提供していくことで、地域全体の魅力が高められると思います。また、ガイドに関するお話もさせていただいたのですが、それこそ自転車の世界では、もうすでにガイドというシステムが立ち上がりつつあるというお話がありましたので、そのような取り組みもいろいろ参考にしながら、農業についてもどういった形であればガイドを付けられて、みんなに楽しんでもらうことができるのかということを考えていければ良いなと思いました。以上です。

杉川 毅

今野先生のほうからお話しいただいた、農業と観光という視点の切り口っていうのは、非常に新鮮に聞かせていただきました。まさしく宗谷は漁業ですけども、農業とどう付き合えばいいとか、そこにある課題って何かっていうのが非常に整理されていたのでよく分かりやすかったです。最近思っているのが、実は私たちの生活そのもの自体が、他の人たちにすれば異文化でありまして、問題はそれをどう見せるかっていうのは今まで考えてはいないわけです。特に自然景観はいつも変わらず365日あるわけで、それ見てもらえれば楽しめるのかなっていうので、お連れしていたのが現実かと思えます。実は、それをどうのように、もう少し演出したりとかは必要ですね。それから自然景観ですから、雨が降ったり霧が掛かって見えない時に、どういうフォローアップするのかっていうところまでが、今まで足りないところかなっていうふうには感じております。その辺りの意見もまた皆さんから頂ければありがたいと思っています。

日置 友幸

いろいろ興味深くお話を聞かせていただきました。今野先生のお話の中で、グリーンツーリズムと云った考え方と、バイクに関して触れている部分があったのですが、これはほんとに地方で人が少ない状況の中では、どんなジャンルで取り組むにしてもすごく重要なことだと思っています。旅行の形態がいろいろ変わって、田舎の日常暮らしがメニューにできるっていうのは、いい時代になったと思います。杉田さんが言われたように、どこを見せるのか。きれいな景色見せただけでは地域にお金が落ちませんので、来てもらうだけじゃなくて、いかに経済に結びつけるかっていうのはほんとに課題かなと感じたところです。

池田 俊一

ちょっと私だけジャンルが違うのでなかなか難しいんですけども、今われわれ考えているスポーツという点は、非常に間口が広い分野だと考えています。お話ありました、先ほど僕もお話しました農業と結びつけた商品開発ですとか。日置さんのそのサイクリング等も、私の中では、体動かすことは全部スポーツという認識で、体験観光＝スポーツツーリズムっていうような認識です。広域連携という形で先ほどもお話ありましたけど、そういった形にもつなげていきたいなと考えております。それとちょっと僕も思い出したのは『星守る犬』っていう名寄で撮影された映画をちょうど僕当時担当しておりまして、先ほど杉川さんもおっしゃられた滞在時間の延長ということですが、すごい僕も悩んだ記憶がございます。じゃあどうしようかということで、ひまわり畑をライトアップし宿泊を誘導し経済効果を上げられないかと、ちょっと安易なことを考えたんですけども。

司会

皆さんどうもありがとうございました。それでは報告された内容に関する質問でもいいですし、それに関わるコメントでも結構なんですけども。どなたかご発言されたいっていう方いらっしゃいますでしょうか。

浅川 晃広（名古屋大学大学院国際開発研究科 講師）

稚内から参りました浅川と申します。

他にいなかったのであえて手を挙げさせていただいた次第です。なぜかというと、いきなり今日のテーマの観光じゃなくて、私どうしても移住のほうに興味があるので、遠慮しようかなと思っていたのですが、他にいらっしゃらないのであえて移住ということで、質問させていただきます。

今日の趣旨と早速、いきなりずれて申し訳ありません。杉川さんのご発表、最後のところで、観光が定住人口増加、地方創生に寄与という機能を持っていくべきだということをおっしゃっていたのですが、まさにその通りです。では具体的にどうすればいいのかと、私もよく分からないところがあります。杉川さんなりにこの点に関して、どのようなご意見なりをお持ちなのか、ぜひお聞かせいただければと思います。

もう1点が名寄の池田さんのほうで、スポーツ移住ということで若干言及されましたけど、この点に関してもし何か具体的なことがありましたら、教えていただければ幸いです。実際にスポーツやりたくて移住したという、具体的な人がいるのかとかです。そういう点をお願いします。すいません、私は移住のほうに関心がありまして。よろしくをお願いします。

司会

ありがとうございました。観光も交流人口拡大のための一手段ですけど、まさにその交流人口拡大のいわば究極がおそらく移住ということなので、関係してくる話ではあるかなと思います。では、まず、杉川さんからお願いします。

杉川

まず人口が減っているのはなぜなのかという原因がよく分からないのですが、実際にあると思うのですけれど、その中で観光やっていると面白いと思うのが、実は私たちが住んでいる地域に来ていただいて、「いや良いところに住んでいるね。」こんなところに住みたいねっていうのが、多分定住になっていくきっかけの一つだと思っています。もう一つが実は観光やることでの経済発展をベースにしながら、例えばそれが医療とか教育にどうやってつなげていけるかっていうことを考えなきゃいけない。今、これはほんとに私たち何人かで考えていることなのですけども、豊富さんもいらっしゃっているのですけれど、実はこの自然の中に人間が入っていくっていうのは非常に精神的に安定をするというのか、いろんな体に対して寄与できるのだと思っておりまして、ヘルスツーリズムというものをもう少し私たち宗谷の地域、それから私も名寄とか、中川さんに何回か足を運ばせていただいているのですが、この道北地域みたいな自然が人に及ぼす影響ってあるだろうなと、ぼんやり思っております。これをベースにしながら進めたいと思っています。で、豊富さんなんかは温泉に入ってアトピーを治すということで来られた方が、もう定住まで実際に結びついておられます。それは豊富さんからご報告いただければいいかなと思うのですけども。そういうきっかけが観光にはあるだろうと思っています。

司会

ありがとうございます。池田さん、お願いします。

池田

先ほど申し上げたように、これから調査研究というところで、なかなか実証もないのですけども、名寄市内のほうでも、スノーボードをやりたくて移住してきたという若者が、2名ほどいるということで私も伺っております。その方々は、農家でアルバイトをしているとのこと。全国的には、多いのか少ないのかはもちろんあるでしょうが、先ほども申し上げたとおり、阿部雅司さんはじめ様々な方から伺っている情報や、その他にもいろんな情報これから収集しなきゃいけないんですが、先ほど申し上げたトップアスリートは企業と連携した形で、活動しているらしいのですが、そこまでいかない、いかないというと語弊があるんですけども、夢向かって頑張っている人たちっていうのはやっぱりアルバイトしながらやっている現状があるとのこと。身近な例として、今市役所でアルバイトさんやってくれている男の子が、名寄出身の子なのですが、野球で徳島の独立リーグでプレーしていたのですが、シーズンオフはアルバイトで生活をしていたそうです。スポーツができる環境、名寄の地域ですと、カーリングとかジャンプとか、そういう競技施設はあります。そういう競技施設を提供して、住むところと仕事を提供すれば、そういう方々がもしかしたら来てくれるのではないかと、いう事業を今後調査しながら進めていきます。そういった方々を受け入れれば、そのまま住んでいただいて、もちろんそこから羽ばたいていただければまたうれしいのですけども。その他に単純にウ

インタースポーツが好きだから、スポーツが好きだから名寄に住んじゃおうといった方々も来ていただきたいという構想もありますが、まずは調査から始めていきたいと考えています。それと農協さんとも話しているところですが、名寄に中国人研修生が、農業研修に来ていただいています。そういったところで移住者のアルバイトができないかなど。一度生産者さんにもお話ししましたが、そういう人たちに来てもらって、そういう人たちの夢を応援するのも面白いよねっていうようなお話もしていただいております。

浅川

ありがとうございました。

司会

ありがとうございました。今ちょっと話の流れの中で、杉川さんから豊富町の話が出てきたので、可能であれば豊富町の話も少しいただければと思います。よろしくをお願いします。

栗山 尚久（豊富町観光協会）

豊富町観光協会の栗山と申します。お世話になっています。先ほど紹介いただいたように、豊富温泉には全国からアトピーを中心とした皮膚疾患の方が湯治に来られています。で、何で豊富温泉に来られているか。全国に何人か、豊富温泉がアトピー感染等に効くと勧めただけの皮膚科の先生の勧めもあって、広島、愛知、大阪等からお越しいただいて、年間豊富の宿泊者大体4万人のうち、1万人が湯治で来られています。で、平均滞在日数が大体2週間ぐらい滞在される中で、じゃあ例えばアサクラさんのほうから移住についてというお話があったのですが、移住ありきで来られたわけではなくて、結果としてですね。豊富で湯治をして、また家に帰って。そうすると悪化してしまう方がいらっしゃるんですね。で、年に何回かですとか、毎年来られる湯治のリピーターの方っていうのがいらっしゃるんですけども。結果、なかなか治らないという中で、じゃあ豊富で仕事がないか、住むところがないかっていうところで移住ですね。で、そこで仕事を始められる方が非常に増えています。豊富町と近隣天塩町等含めて、この10年間で大体60人ぐらいの方が移住されてきているような状況です。ただ残念ながら、移住したいというところで、すぐワンストップの窓口があるかっていうことになると、正直問い合わせ窓口っていうのが、まず役場に1回電話が入るんですけども、建設課なのか総務課なのか。いろんなところへちょっと回ってしまうという部分で、残念ながら隣町、幌延町さんの受け入れ態勢が非常にいいということで、幌延が決まったっていう話は聞いているんですけども。そのへんはまだまだ、移住に関しては大きな課題かなと思っています。以上です。

司会

どうもありがとうございました。確か2016年3月だったかと思いますが、豊富温泉に移住された方に、名寄市立大学でこういう講演会でお話していただいた機会があったかと思いますが、研究会の

会誌にその時の講演も載っておりますので。ちょっとまだ電子化されてないんですけど、すぐ電子化して読めるようにしたいと思います。

今の話でちょっと私も思い出したことがありまして、十勝の大樹町では酪農で移住者を募っている例がありまして、それは経営者として移住を募るんじゃなくて、酪農ヘルパーですね。搾乳作業をする方ということで移住者を募っています。その移住の対象者がアーティストなんですね。若いアーティストの移住を募ってまして。アーティストの方は何を求めて来るかというと、アートの素材もあるんですが、分かりやすいのは大きなアトリエがただで貸してもらえらるっていう、そういうメリットがあるっていうことですね。あと芸術だけでは食べていけないので仕事をしないといけないのですが、ヘルパーの仕事なりあるいは酪農家って直接今は働いてらっしゃるんですけど、要は朝と夕方の搾乳作業で働くので、昼間の時間が空いているんです。昼間の時間芸術活動して、朝夕働くわけです。そういう形で実際に2年前からですかね、先日、私も話を聞いたんですけど、そういう形で移住の方が入っているという形を聞いて、非常に面白い取り組みだったと思いました。

浅川

すいません、十勝のどこですか。

司会

十勝の大樹町です。農畜産業振興機構の『畜産の情報』という雑誌がありまして、2月号に実は私そのレポートを書いています。ウェブ上で読めますので、興味があればぜひご覧ください。

倉本 万里

名寄の倉本といいます。いま年金で生活しております。どうぞよろしく申し上げます。Facebookでこういうのがあるっていうのを見て、今日来てみたいなと思ってやって来ました。よろしく申し上げます。で、いろいろお話したいことあるんですけど、今の移住ということで、実は下川のジャンプなんですけども、伊藤有希ちゃんのお父さんなんですけど、あのお父さんはもう小学校、中学校時代からずっと下川でジャンプやってたんですよね。で、結局は有名にならないっていうか、国内だけで終わってしまったという彼なんですけども、下川がジャンプでものすごいということで、呼ばれたんだそうです。役場の職員として。で、もちろん正式に職員として呼ばれて、あそこに住み着いて、そして子ども今二人育てて。有希ちゃんが今頑張ってるそこなんですけど。その彼が言った言葉なんですけど、自分が2流の選手なのにスキーで食べていけるなんてもう夢にも思わなかったって、ものすごく感動してたのですよね。彼は何をしているかっていうと、まるっきりスキーだけなんですよ。365日。で。夏何もすることないから夏どうにかしなきゃって。町に何かお返ししなきゃならないということで、それこそ夏もスポーツができるようにということで、自分で車を買ってね、サマージャンプですか。そんなようなところにすごく力を入れて。そのせいもあって、私はもっともっと下川が発展していったんだっていうような感情を持っております。

それがあったもんですからね、今回、阿部さんが名寄に期間限定でいらっしゃったんですけども、結局ここに住まないんですよ。ということは例えば3年契約、4年契約でいらっしゃったとしたら、それですぽっといなくなるんですよ。その後ね、続かないと思うの。今すごくスポーツに力入れてやってるっていうのは、もうそれこそ阿部さんが来た途端に始まったから、彼の力なんだなってそう思ってるんですけども、誰か一人ね、専門がいなかったら。アドバイザーっていうのかな、お手伝いする人が市の職員で誰か他の人いたとか、それから町のどなたかっていうのがあると思うんですけども。誰かトップが、ちゃんとした人がいなかったら、やっぱり続けるっていうのは無理なんじゃないかなって、そういうような感じがしました。

名寄も私は雪像づくりのボランティアをやっていますが、雪像づくりももういろいろありまして、つぶれる寸前だったんですけども、それをやっぱり興してね、どうにかしていこうと思って、みんな関係ある人と一生懸命話し合いをしてるんですけども、やっぱり誰かいなきゃって、そんな感じがしたんですよ。今一生懸命お話してくださった方々ね、いずれは部署変わるとか。で、その時にきちっと跡を継げられるのかなって。それがとっても心配です。以上です。

司会

ありがとうございました。池田さんもなかなか答えづらいかもしれませんが、よろしくお願ひします。

池田

阿部さんについては、特別参与という特別職で来ていただいております。もちろん我々らとしてはずっと続けていたきたいと思っておりますが、それは阿部さんの人生なので、お願いをするけどもちょっとどうなのか分からないといったところもあります。おっしゃられた通り、ほんとに阿部さんがいなくなって、今トレーナーも4月から来てもらうんですけども、そういう人たちがいないと事業が進まないという認識は我々も非常に強く思っていることから、地域内の循環型の人材育成をしなきゃ駄目だろうと提案しています。子どもたちを育てて、その子たちが名寄に愛着を持って、い続けてくれて、大人になった時にまた子どもたちが教えるというような。スポーツって限ったわけじゃないんですけども、このような仕組みが出来上がらないと持続ができないということを考えています。ことスポーツに関しましては、4月から来てもらうスポーツトレーナーには名寄の人材でトレーナーも育成、まだ人材いないんですけども子どもたちも教えながらも名寄市内でトレーナーになれるような形で、大人も勉強できるような仕組みを今考えてます。

司会

ありがとうございます。やはり事業を継続していくためにはあらゆる分野の専門家の方に居続けてもらうのが重要ですけども、そういう面でいうと福祉、子育てなど地域に関わる全般的な課題とも関わってくる話なのかなと、聞いていて思いました。

播本雅都子（名寄市立大学保健福祉学部看護学科 教授）

名寄の播本といいます。私は給料もらって暮らしていますが、今日のテーマの観光とか移住とか、スポーツ合宿とか農業とか、そういう全然専門ではないので、今日ご発表があった中身を推進していく立場では全然なく、この件に関してはもう一般のおばさんみたいなところから発言します。でもクラモトさんととても迫力あったので、私も普段は迫力あるほうだと思うんですけど、何かしゃべりにくくなってしまって。一般の一市民、そういうのに全然携わってるものでない者からすると、このどこに住民は協力したらいいのかなっていうのがちょっと分かりにくかったなって思うんですよね。

中川町さんのご報告で、ライダーさんをサポートするライダーが町にいて、その人たちがいずれっていうところは、そういうふうに見てもらえるんだってちょっと思いました。で、私名寄にいて、阿部さんも来られて、合宿に来る方が次々お越しになるんですけども、合宿に来る方たちとも仲良くなるんですよね。元々は遠くの方とか、札幌の方でも。で、交流すると情が移ってくる。それでその人たちに協力をして、一緒にごはんを食べたりとか、うちに泊めてあげたりとかすると、そういうことしているっていうことを言うと、それは名寄が合宿の町にしていくっていうことにある意味賛同しているんですけど、人によっては家に泊めたらホテル代が落ちないから経済振興にならないって、ばさっと言われてね。外食してくれないとお金が落ちないってと言われてね。そんなこと言っているから広がらではとも思いました。で、家で食べたって食材買ってくるわけですし、あんまりマイクで言いたくないけど、去年、私の情が移ったアスリートさんはわが家にのべ 40 泊ほどしていたのですよね。で、そしたらやっぱりいろんな話をすると、ホテルで2、3泊ならいいかもしれないけど、その食事がやっぱりつらいんだと。で、別のパラの選手さんも、皆さんある日突然連れてきて、7人ぐらいでごはん、うちの家で食べたんですけども。たまたまいつもはお試し住宅借りて自炊をしてるんだけど、その間お試し住宅取れなくて、ホテルに泊まって。で、お食事一つ一つがいいんだけど、1週間暮らしていると、やはり自分の体をメンテナンスする食事ではないって。そういうお話を聞いたりして。で、やっぱり農業地域で、野菜の豊富にある地域で。特にそのホテルの食事で野菜が足りないって。で、食べたい時間に食べたいものが食べられないって。で、そういう合宿に来る方たちの声をもっと市民が知ったらね、普通のお弁当屋さんのお弁当でも、これアスリート用とか。居酒屋さんとかでも高タンパク低脂肪。これならたくさん食べても脂肪取り過ぎないとかね。そういうメニューも開発できるでしょうし、そういうところはこの地域得意だと思うんですけど。アスリートさんの声が、特にスポーツ合宿とか、そういうところに入ってないなっていうの。いや今日短い時間だから発表してないだけだと思うんですけど、実際に来る方たちへの応援の気持ちがなかなかない。観光に来る方も、稚内のシーニックバイウェイの報告で、入込数の数え方っていうのが分かっただらすごい面白いなと思ったんですけど、やっぱり特殊なサイクリングですとか、いろんなスポーツ系の取り組みっていうのはリピーターがすごく大事だと思うんですけど、リピーターさんっていうのはコースだけじゃなくて、そこで出会った人に会いに来ると思うんですよね。実際に名寄に繰り返し合宿に来るチームも、アスリートさんも、名寄の人に迎えてもらって、名寄の人と一緒に練習をして。で、ここでご

はんを食べてみたいなところなので。その周辺も含めて、それぞれの分野の方が視野を広げ、実はそういうところを気になっている声も拾ったり、陰でサポートしている市民の人たちを増やしたりとかね。そうするとすごく広がるんじゃないかなと思います。最終的には移住も観光も、経済効果は大事だと思うんですけども、それが産業の人だけじゃなくて、市民が参加できるようになったらいいなってちょっと思っています。やっぱり人が見えないのがちょっと今日気になったんですけど、それはきっと何かあると思うので、またこの研究会でそういう人の具体的なお話を聞くとかできるといいなって思いました。でもすごいそういう観光を全部応援しているつもりですが、言い終わったら辛口になって、ちょっと反省していますが、一緒にいろいろやれたらなと思っています。今後ともよろしくお願ひします。

司会

ありがとうございます。非常に重要なご指摘ではないかと思ひます。特に、こういう観光面というところ、リピーターという意味だけではない。私も名寄に住んでいて、やっぱり来たいなと思うのは、人に会いたくて来たいというのがありますので。ですから、そういう意味でいうと、今回、観光振興の話ですけども、一般の住民にとって何が出来るか、やることの意味っていうのがやはり大きいと思ひます。この点に関しては何か。

播本

言い忘れたんですけど、ちょっと追加していいですか。名寄に合宿に来る人もいっぱいリポートをしてるんですけど、その中のプロ級の人とか、アマチュアでもあちこちの大会で入賞されたり、メダル取ったりされますよね。でも、それを名寄市が応援してないっていうのがやっぱり気になるんですよ。合宿とかで来て、来てくれたことには感謝するけど、その人の実績を応援していないというか。下川町さんのね、すごいところは、下川出身の選手さんたちの応援をとともしていて、名寄も名寄出身の人はするんですけど、合宿誘致するなら、合宿で頑張ってる人の応援も一緒になってしたら、市民はもっと情も移るかなって思ひました。ところが市民からの投稿で、名寄で合宿する人が、どっかのハーフマラソン大会とかで準優勝したんですよ。そしたら名寄で合宿する誰々さん準Vみたいな見出しで名寄新聞に書いてもらって。で、それをご本人に見せると、札幌市民なんだけど、札幌市は自分がしかも優勝でないのに、準優勝なのに、誰も札幌の人は見ないけど、名寄の人は温かいつて言ってくれたんですけど、それは誰かが投稿したからなんですよ。でもそういうことでやっぱり名寄の人は温かい、また来たいと思うっていう声が出るので。今ジュニアとかもそうですけども、ここで合宿してる人たちの応援っていうところにちょっと裾野を広げると、情っていうのがね、高まるんだろうなって思ひます。

司会

ありがとうございます。今の点について、報告者の皆さんは何かコメント等ありますか。今野さん

何か。

今野

はい、ありがとうございます。リピートに関しては何も観光とかスポーツだけじゃなくて、農業の体験もまったくその通りで、やっぱり人に会いに来るっていうのは非常に重要な話だと思います。その意味で、農業の世界っていいものは外から来る方、言い換えると観光とかグリーンツーリズムで来られる方を重視してきました。昔は、農業が一番身近な産業で、実家が農家だったとか、特に気にしなくても農業というものがみなさんの近くにあったのですけども、最近はそれがどんどん遠くなってしまって、むしろ一番近くでやっているはずなのに、名寄市民も農業とか農家とコンタクトを取ったことがあまりないという方が増えてきていると思います。その意味で、例えば同じ給料で同じ仕事でアルバイトの募集出したとしても、農業のほうはよく分からないから行かないっていう方が、市民の中でも増えてきている。そういう意味でやはりもっと市民も含めて、関係人口を増やす取り組み、地元だから知っているだろう、当たり前だろうと思わないで、きちんとPRして理解してもらい取り組みを継続的にしていけないといけないと思います。農業もかなり他人事として捉えている方が多くなってきてしまっていますので、農業・農村、食は自分の問題だと考えられるように、地道な取り組みが必要だと思います。先ほど先生がおっしゃったような、スポーツの中でも市民がもっとおもてなしをしていく取り組みがありましたが、おもてなしっていうとすごく難しいんですけども、そういうふうに来てくれた方を応援する。そして、それについて良かったねと話すことは、全然お金も掛からないですし、誰にでも出来る取り組みなので、そういったことを続けていく意義はすごく参考になりました。ありがとうございます。

司会

はい。杉川さん、何かございますか。

杉川

ありがとうございます。先生今おっしゃったように、今まで観光のお客さまのことを交流人口って言っていたのですけれど、最近やっぱり関係人口とか、関係交流とかいうふうにして、地域の方々と、来られる方々が関係をしっかり構築していくことが今求められつつあるのだと思うのです。特に旅行会社さんが入っていて、バスからバスに乗せて移動してしまい次に買い物へ行かせて、そして帰らせるっていう時代ではなくなったということです。では、個人のお客さん増えてくると、もう行政とか観光業界だけじゃ全然対応ができなくなって、実は町全体で受けなきゃいけないようになってのが今実際に起きているのだらうと思っています。多分これからの観光、特に北海道観光は、今まで大型観光といわれているこのツアー型が多かったのですけども、どんどんそっちにシフトしていかなくちゃいけないのだなと思っています。この前高千穂に行きましたら、山の中の一軒家なのですけども、そこに行きたくて、一生懸命全国どころか世界中から人が来ているところがありまして、何やっ

ているかという、その地域の古民家（民宿）みたいところなのですが、一緒に農業をやったり釣りをやったりという、生活そのものを楽しむようなことが今観光にも求められていることなのだと思います。ちょうど過渡期なんだというふうには思っています。

司会

ありがとうございます。日置さん、一言あればお願いします。

日置

思ったことを、関係人口についてだとかは杉川さんのお話の中に入っちゃってはいたんですけど、僕としてもやっぱりリピーターがさせることが一番、小さな町だと受け入れも含めて大事かなと思ってまして。何度も繰り返し来てもらうことが大事かなと思っております。合宿なんかだとかなり明確で、その後のその人たちを追跡したりとかって結構できちゃうのかなと思うんですが。杉川さんも言われたように、観光業界とかですとか、役場の観光課の人たちだけじゃない、一般の地元の住民の人たちが、あったかい雰囲気でお客さんを迎え入れるっていうのはやっぱり大事かなと思いますし。自転車とかカヌーとかっていうとちょっと特殊な感じで、されない人はあまり関心ないのかもしれないんですけど、ほんとに単純なことで、そういう人たちを見かけたら声掛けるとか、それぐらいでもだいぶ違うかなとは思うんですよね。そういったことはほんとに広がっていったらいいなって思うこと。あと僕らが町の中でやっていることを、町の隅々の方々まで知っているわけではないってところが、やっぱり僕らの活動内容のアピールも問題あるのかなと思うんですけど。そういったことも含めて、全体で情報共有して、お客さんを受け入れるような環境は目指していきたいなと思います。

司会

ありがとうございました。続いて池田さん。名寄市役所への期待の表れだと思いますが、よろしくお願いします。

池田

この3年間の大きな課題の一つは、市民の認知度というか、関心っていうのが大きな課題だなと思っております。先ほどお話しましたジュニアオリンピックという大きな大会を開催させていただきましたけれども、やはり市民のお客さんがあまり来ていただけないというのが現状であります。そういった経緯も含め、今回のジュニアオリンピックで市内の小中高生13名に、それぞれにインタビューを行い顔写真付きでチラシを作製、全校配布し、みんな応援に来てくださいねっていうような形で、少しでも興味を持ってもらうような形は努力したのですが、なかなか結びついていないという現状もあります。今までその3年間、少しでも市民の皆さんに関心を持ってもらうためにどうするかということで、例えば最初はスポーツ教室とかそういったところでもいいと思うんですけど、イベントに参加してもらい、関心を持ってもらうとそこから始めたほうがいいかなと考えております。

目に見える事業をそういった形で平成 31 (2019) 年度は展開して、市民の皆さんにも関心持ってもらえるような形で考えています。合宿者の食事についても同じで、やはり合宿の層によってニーズが全然違います。例えば小学生の合宿ですと、1泊3食付いて3千いくらか、そういうニーズもあります。土別の朝日町だと3食付いて3500~3600円で泊まれるそうです。では、それを市内の業者でできるのかというのもあり、ターゲットをどこに絞るか。市内業者さんもどこまでできて、利益を出せるのかというのを研究するのも大きな課題だと認識しています。

司会

どうもありがとうございました。じゃあ、お願いします。

今井 政徳

風連町の今井といいます。一応初めて来たんで、皆さんのおっしゃっていることをまとめながら聞いていたんですけども、まず勝手に来てくれてる人たちがいます。ボーダーの方とか、それから今の中ではまったくお話になかったんですが、『星守る犬』のようにキャンピングカーに、今も夏の間に来ていらっしゃる方とかたくさんいます。それでそういう方たちがね、例えば、この間も名寄の道の駅で、お風呂ないっていうのとかね、聞きました。どこにでもある自然とかを題材にするのもとてもいいことだと思うんですけど、今勝手に来てくれてる人たち、ボーダーであったり、あるいはキャンピングカーで来てくれてる人たち。そういうところのニーズをくみ取ってあげて、例えば、今でも市民が楽しめる場所として、サンピラーパークの中にバーベキューができる場所があつて。健康の森ですか。バーベキューができる場所があつて、そこは、名寄の市民も取れないぐらい人気の時があるそうなんですけど、そこに例えばコテージみたいなものをたくさん何個も作る。その熊本の阿蘇のふもとにそういう施設があつて、すごくビックリしたことがあるんですけど。冬にあれ作りますよね、かまくら。かまくらのもっと大きいバージョンみたいなやつで、中に7、8人ぐらいずつ入れるんですよ。で、そこで自分たちで勝手に飯作ってみたいのがですね、できたりするような場所とかがあるので。優れているところをより伸ばすのが一番現実的です。例えば、優れているところを探すのは、とても簡単です。北海道中川町でGoogleで検索すれば、その後は外の方が何を調べているかみんな出てくるわけなんで。すでに自分たちの町が、こっちに住んでいると分からないけど、向こうから、他のところから何を求められているかが分かるはずですよ。そこを生かしていけたらすごくいいんじゃないかなと。自分で個人的に何かできることがないか、そういう利己的なことばかり考えてたんですけど、そう思いました。

あと質問なんですけど、ローラースキーって去年あるのかなと思ったらなくなったんですけど、それは打ち切りになったのかなっていうのが一つと、あと中川町で、列車で自転車を移動するってのがあったんですけど、列車はもうなくなると思うので、例えばバス。バスで移動するとかですね、バスは自転車積むのがめんどくさいのかな。じゃあスノーモービル皆さん今冬移動させてますけど、スノーモービルみたいに後ろに何かくっ付けて、それで自転車を移動する。とかよりは、例えばキャンピ

ングカーを、これは普通の例えですけど、キャンピングカーですね、北海道新幹線のペインティングをして移動しているっていう方もいらっしゃるんで、今すでに実績のある、そういうすでに得意なことです。伸ばしていけたらそこでもっと発展して、それが還元されるのではないかと。以上になります。

司会

ありがとうございます。具体的な内容も含めて言っていただいて、ありがとうございます。ローラースキーの件は。

池田

ローラースキーは平成 28 (2016) 年と平成 29 (2017) 年の 2 カ年ということで、これ実は、もともとは国の事業を道が受託して、道庁の事業として、名寄が候補地として手挙げさせて受け入れたっていう経緯がございます。国の事業なので 2 カ年一区切りというルールの中であの事業やらせてもらって、同じことはできないよということで、実は昨年も、大学と病院のご協力いただきながら、トップジュニア選手を呼んでメディカルチェックとか、そういうようなちょっと違う趣旨の事業をやっていたという経緯がございます。ただ先ほど申し上げた通り、商店街を使ったイベントということで、結構インパクトを与えたということで、今後またああいった事業を考えてったほうがいいのかなという、個人的には思っております。

司会

ありがとうございます。

今井

言い忘れたことがあります、すいません。中川町の個別の話なんですけど、自転車のメンテナンスしてもらえるととてもうれしいんです。特に競技用とかロード系とか、ああいう自転車っていうのは、ほんとにメンテナンス一つで走りがかっと変わるんですよ。札幌とかでも十分にメンテしてくれるところって少ないので。メンテされると、もうそこしか行かないってなるんですよ。僕だけかもしれないんですけど、ただ例えば先ほど宿で、中に自転車を止められるのも、それもすごくうれしいんですけど、例えばその時に一晩経ったらメンテされているとか、あるいは 1 時間ぐらいでメンテしちゃう人は、ただ人がいるかないかは分かんないんですけど、それを見ながら、目の前でやってくれたらまた感動するし、そういうことがあるとさらにすごく、中川町に行きたくるようになります。

あともう一つ、『星守る犬』のキャンピングカーなんですけど、キャンピングカーの方は風連の望湖台のところのロケの現場にいらっしゃるんですよ。そこに来た時に、来てくれた方、結構がっかりして帰られたりとかする可能性が非常に高いように思っています。例えば、いま望湖台に行く道、キャンピング場という看板の国道 40 号線のところに出ています。出ているんですけども、行っても結局

何だかよく分かんないみたいな状態になっているので。思い切って、廃止するなら廃止して、その健康の森に集約できるといいんじゃないかなと思います。

司会

ありがとうございます。先ほどの自転車の件ですね、JR以外にもあるのかどうかとか、そういうことも含めてですが。

日置

モビリティに取り組んだのは、体験そのものが重要性を持っているってことで、2次交通が弱い道北でも結構有効なのかなと思った経緯もあります。JRがいずれなくなるかどうかは置いといてですね。1日100km、200km走れる人もいますし。だけどみんながみんなそういうわけでもないけど、隣の町まで行ってみたいとか、そういったニーズって必ずあると思うので、ここはほんとにJRを活用したPRというか、提案を今年もやっていきたいなと思っております。

あとメンテナンスのお話出しましたが、それは正直課題で、結構専門性の高いショップが残念ながら近隣にはないんですよ。近いところで稚内か、旭川ということになってしまいます。元々好きでやってる人で、かなり詳しい人がいるんですけど、それがお客さんの都合に合わせて動けるかっていうと、またそれも難しい現実があります。今お話いただいたように、すごくいいサービスだとは思いますが、サイクリングクラブの中で講習会をやったりしています。

司会

ありがとうございます。播本先生、どうぞ。

播本

先ほどのローラースキーの件です。北海道の補助金で名寄が手を挙げて2年間だったからなくなったっていう話のことなんですけれども。私も元公務員だったんですけども、やっぱりモデル事業みたいなものは、まずはお金をもらってモデルでやって、それをやっている時にいつまでお金が来るかは分かっているから、そこで続ける努力をするのが本筋だと思うんですよ。それで市役所としては代わりの事業やりましたっていうのも、メディカルチェックと商店街のみんなで、業者も入りましたけど、個人でもみんなでほうきを持って、小石を全部飛ばしてお掃除したり手伝って。こういう役割が市民はできるんだと思ったのが、ばさっともうやらないよって言われたら、そうなのねでチーンって終わるっていう。

やはり先ほどの意見の続きで、この町で何かをするっていう、道北全部そうですけど、それはやっぱり住民がどういう目で見ているのか、この後どう参加できるのかって一人一人が考えているんですよ。そこを抜きにどっかが中心になって、ましてお金が来た、来なくなったっていうのでやるかやらないっていうのはもう市民に見えないで、やっぱり来たお金は最初は潤沢に来るんですけど、最低限い

からできるのか、そのために地元はどれだけ負担しなくちゃいけないのか。そのために市民ができることは何なのか。ふるさと納税もありますし、クラウドファンディングの方法も今すごく盛んですし、やっぱりみんなでできる方法を考えるっていうところで、この地域に人が住んでる存在感があって、そういうところに参加できる、意見を言えるっていう、自分が生きている実感が持てるのがやはり移住につながるっていうことだと思います。結局全部つながると思うんですよね。

私もそうやって言いながら、名寄に来て14年になるんですけど、いろんな事業をだらだら続けるのではなく、時には潔くスクラップ・アンド・ビルドをするのはすごくいいなって思っています。やはりそのスクラップ・アンド・ビルドの理由が、お金が来るから来ないからってというのは、すごくわかりやすいですね。ここ今ちょっと人数少ないし、記者さんも帰ったし、どこにも載らないからもういいんですけど、やっぱりこういうのを、私も今、一市民ですけども、市民のみんなが聞くともっともってわかりやすいので。やはり何か大きなお金を取ってきた時は、そのことも含めて、これを立ち上げて、これ良かったらもっとやりませんかという機運もずっと続けるっていうスタイルをこれから取っていくことが、やっぱり小さい町の生き残りの姿勢じゃないかなっていうのをちょっと思いましたので。

司会

ありがとうございます。播本先生、最初から企画に関わっていただければ良かったと、今思っております。ありがとうございました。

そろそろ時間になりましたのでまとめないといけないんですが、今日はフロアの皆さんからも非常に活発なご議論いただきました、誠にありがとうございます。最後に、報告者の方々に一言ずつコメントいただきたいと思います。今日は広域連携の話をもう少ししたかったんですが、あんまりする時間がありませんでした。今後進んでいく上で、特に広域連携をはじめ、こういうことが必要だとか、こういうことをしたいということがあれば、最後お一言ずついただきたいと思います。

今野

ありがとうございます。農業とそういった形で絡めてお話したいと思うんですけども。グリーンツーリズムでいいますと、グリーンツーリズムが非常にうまくいっているというところは、やはりワンストップ窓口がきちんとできているところっていうのが中心になります。例えば北海道ですと長沼ですとかが例としてあげられます。どこに頼んだらどういうメニューが、どういった人で、どう受けられるのかというのが分かりやすいというのが非常に利点になっております。そういった意味ではやはり道北地域の観光に関しても、農業のそういった観光にしても、やっぱりどこに頼んだらどういうことができるのかというのが分かるワンストップの窓口を作るために、やはり広域連携は重要なのだろうと思います。ただそのために、じゃ、取りあえず作りましょうとなりますと、やはり難しいのだなというのがご報告聞いていても分かりました。その中でもシーニックバイウェイはうまくいっていますが、やはり目的があったから組織を作ったということが違います。そういった意味で、目的によ

る組み合わせをして、形ではなく目的から組織を作っていくことが重要だと思いました。そういった意味でも目的をどんどん積み重ねて、今は例えばシーニックバイウェイですとか自転車っていうのがありますので、そういうのを広げていく事が必要になるでしょう。例えば先ほどフロアからありました、キャンピングカーというものは私も非常に興味がありまして、いつかは欲しいなと思っているのですが、名寄の道の駅にキャンピングカーが結構夏止まっているのですけども、あれはなぜそこにいるかという、ゴミ処理をしてくれるんですね。普通のところはもうゴミ箱はほぼ撤去されてしまっているんですが、あそこはきちんと分別さえすれば捨ててくれるという特徴があり、さらにコインランドリーもあるので、キャンピングカーは非常に行きやすいというのがあります。そういった意味ではキャンピングカーを使う人は別に、無料であそこに捨てたいわけじゃなくて、有料でもいいんですよ。むしろお金取ってくれたらちゃんと捨てたいのにとという方が多いと思うので。そういった意味ではキャンピングカーをもてなす、今来てくれる方をつなぎ止めるという意味ではキャンピングカーはゴミ処理と、コインランドリーと、あと下水の排水ができると非常にいいですけども、そして電気があれば来てくれます。もしそういったRVパークみたいな場所が道北地域で連携して、ここここにありますよといった、取り組みが出来たら面白いと思えます。そういった目的ごとにどんどん進めていった先に、DMOとか広域的な取り組みが見えてくるのかな、という感想を、お話聞いていて思いました。

杉川

報告の中でもお話させていただいたんですけども、多分地域連携っていうのは基本的にそのお互いをお互いで認め合うというところから始めないと、わが町だとかわが村だとかやっていて、なかなかうまくいかないなと思っています。もう一つが1歩進んで、何が一緒に課題かっていうところの、課題見つけをちゃんとやって、それを解決するために共有のビジョンを作ってきましょうっていうのが、手続き上必要なのかなと思っています。ただ人と人のいることですので、仲良くやるのが一番いいのかなというふうには思っています。

日置

おかげさまで、名寄市や、杉川さんとことも仲良くさせていただいて、いろいろ進んできています。しかし、まだまだ当事者だけの中で動いてるところもありますので、いろんな地域で関連性がありそうなところの情報共有が、もっともっと広がってやっていけるといいのかなと。お客さんがこういうことしたいんだ、じゃあ何とか町のあそこの人のとこへっていうようなところが、どこ行っても生まれるような環境は目指していきたいなと思います。

池田

広域連携ということで、先ほど述べさせていただきましたがけれども、観光も一スポーツも一緒だと認識しております。この地域は色々なスポーツ振興、観光振興していますし、それらを組み合わせる

ことによって、魅力が非常に上がると思います。名寄だけではなく、美深行ったらエアリアルができるし、下川行ったらジャンプが見られるといった形で、一つの地域で魅力を大きく上げることができるのかなど、今後とも、他の市町村さんと連携しながら進めていきたいなと思っております。

司会

ありがとうございました。私の力量ではまとめることができませんが、観光に関する現状と、直面している課題の住民との関わりが、非常に重要な視点として指摘していただきました。このような形で議論することができて、有意義であったと思います。

それでは、最後に、今日報告していただきました4人の報告者の方に拍手をして、終了したいと思います。では、以上をもちまして、2018年度道北の地域振興を考える研究会セミナーを終了いたします。どうもありがとうございました。